

教育関係共同利用拠点 千葉大学アカデミック・リンク・センター

アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム

平成 27 年度 事業報告書

教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）  
（アカデミック・リンク・センター）



アカデミック・リンク  
教育・学修支援専門職養成プログラム

---

ACADEMIC LINK PROFESSIONAL STAFF  
DEVELOPMENT PROGRAM  
for EDUCATIONAL and LEARNING SUPPORT

教育関係共同利用拠点 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム  
平成 27 年度 事業報告書 目次

はじめに

平成 27 年度事業報告書骨子

1. 教育関係共同利用拠点としての申請と認定

- (1) 申請の背景 ..... 1
- (2) 認定のプロセス ..... 2

2. 教育関係共同利用拠点としての認定後の活動

- (1) センターの一部改組と運営委員会の設置 ..... 3
  - ア. センターの一部改組と運営組織
  - イ. 運営委員会の設置と開催
  - ウ. 企画ワーキング・グループの設置とその活動
  - エ. 調査実務ワーキング・グループの設置とその活動
- (2) 拠点事業の活動
  - ア) 教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック作成のための活動 ..... 5
    - (ア) 調査の全体概要
    - (イ) 大学職員を対象とするインタビュー調査
    - (ウ) 文献調査
    - (エ) 大学職員アンケート調査
    - (オ) 「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」の作成
  - イ) 教育関係共同利用拠点及び履修証明プログラムの運営のための調査 ..... 33
    - (ア) 調査の概要
    - (イ) 訪問調査の記録
  - ウ) ALPS シンポジウム／ALPS セミナーの実施 ..... 39
    - (ア) ALPS シンポジウム
    - (イ) ALPS セミナー
- (3) 刊行物・広報活動 ..... 42
  - ア. ブックレットの刊行
  - イ. 「大学教職員の能力開発に関する懇談会」への参加
  - ウ. その他広報活動 3. 平成 27 年度の活動の総括と次年度の計画

3. 平成 27 年度の活動の総括と次年度の計画 .....	43
(1) 平成 27 年度活動の総括	
(2) 平成 28 年度の計画	

## はじめに

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成27年7月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点(教育・学修支援専門職養成)」の認定を受け、教育・学修支援専門職養成を進めるために、ALPSプログラム(Academic Link Professional Staff Development Program for Educational and Learning Support)をスタートさせ、爾来拠点事業に取り組んでいます。

拠点としての認定期間は、平成29年3月31日までの2年間とされており、認定の際の特記事項として、「教育・学修支援専門職を養成するプログラムの実現可能性や他大学の利用見込みという点で、今後の成熟過程を確認したいため2年間の認定とし、次回申請時に示される実績に期待する」と付記され、3点の留意事項が示されました。

当センターでは、拠点認定に伴い、新たに「教育・学修支援専門職養成部門」を設置するとともに、同部門の運営及び活動に関する重要事項を調査審議する運営委員会を設置しております。平成28年5月18日に開催した運営委員会においては、留意事項も踏まえ、平成27年度の活動の実績と今後の活動に関して議論が行われました。

この報告書は、この運営委員会に提出した資料を基にとりまとめたもので、「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム平成27年度事業報告書」としておりますが、実際には平成28年5月までの活動を含んでいるものです。ALPSプログラムが多くの関係の方々に関心をもっていただけることを期待して、報告書として公表することにいたしました。

当センターは、運営委員会でのご意見を参考に教育・学修支援専門職養成プログラムの実現に向けた活動を推進してまいります。引き続き皆様方のご支援をよろしく願います。

平成28年6月

千葉大学  
アカデミック・リンク・センター長

竹内 比呂也

**教育関係共同利用拠点 千葉大学アカデミック・リンク・センター**  
**アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム**  
**平成 27 年度 事業報告書 骨子**

### 1. 教育関係共同利用拠点の申請と認定

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成 23 年 4 月のセンター設置以降、千葉大学において教育・学修支援に関する先駆的取組みを進めてきたことを活かして、平成 27 年度の文部科学省による教育関係共同利用拠点に、大学の教職員の組織的な研修等の実施機関として申請することとした。その内容は、教育・学修支援専門職を養成する実践的 SD プログラムを履修証明プログラムとして開発・運営・実施することを中心に、教育・学修支援専門職養成のための取組みをおこなうことである。

審査の結果、平成 27 年 7 月に、文部科学大臣より、教育関係共同利用拠点として認定を受け、「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）（アカデミック・リンク・センター）」の拠点名が与えられた。その際、認定期間は、平成 27 年 7 月 30 日～平成 29 年 3 月 31 日の 2 年間とされた。

また、認定にあたっては、(1) 国内外の事例・先行研究等を踏まえ、我が国における教育・学修支援職の確立に寄与し、全国に普及しうる研修プログラムの開発・提案を行うこと。(2) 研修プログラムの共同利用計画を確立し、利用者数・利用大学数を拡充すること。(3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるよう努めること。の 3 点の留意事項が付与された。アカデミック・リンク・センターは、これらの留意事項を前提に、拠点事業を推進することとなった。

拠点認定を受けて、アカデミック・リンク・センターでは、拠点事業として取り組む活動を「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」(Academic Link Professional Staff Development Program for Educational and Learning Support : ALPS プログラム)と称し、ロゴを作成した。

### 2. 運営委員会の設置と運営

拠点事業の認定ののち、センター関連規程を改正するとともに、組織を一部改組し、教育・学修支援専門職養成部門を設置した。そして、共同利用の実施に関する重要事項について審議する機関として「教育・学修支援専門職養成部門運営委員会」を設置した。運営委員は、高等教育論や大学職員論、教育行政などに高い学識を有する学外有識者に委員就任を依頼し、これら外部有識者が委員の過半数を超える委員数とし、学外者 6 名、学内関係者 4 名による委員会として設定した。

「教育・学修支援専門職養成部門運営委員会」は、第 1 回委員会を 12 月 7 日に開催し、拠点事業の進め方等について検討を行った。

### 3. 拠点事業の推進

#### (1) 事業推進体制の整備と推進

教育関係共同利用拠点としての認定を受けたのち、拠点事業を推進するための組織とし

て、新設した教育・学修支援専門職養成部門の中に、教育・学修支援専門職能力ルーブリックの開発、SDプログラム設計を検討する「企画ワーキング・グループ」を設置した。

このワーキング・グループは、アカデミック・リンク・センターに関係する教職員のみでなく、千葉大学の全学的な協力を得ることを目的に、17名の教職員から構成し、教職協働、部局横断の事業推進体制を整備した。

## **(2) 「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」の作成**

平成27年度の中心的活動として、履修証明プログラムの内容構成の前提となる「教育・学修支援専門職ルーブリック」の作成に取り組んだ。この「教育・学修支援専門職ルーブリック」を作成するために、まず、「教育・学修支援に必要な能力項目」の抽出に取り組んだ。このことを進めるために、1) 文献の系統的抽出・分析、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査、3) 大学職員を対象とするアンケート調査を実施した。

まず、1) 文献の系統的抽出・分析を通じて、先行研究によって大学職員の能力養成においてどのような能力が重要と言及されているかを抽出する。次いで、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査により、大学職員が重要と考える能力を文脈を通じて確認するとともに、能力項目プールを作成する。そして、文献調査とインタビュー調査をもとにアンケート調査を作成し、能力項目の構成概念の妥当性を検証し、設定するという構成である。

これらの調査を通じて、「教育・学修支援に必要な能力項目（第一次案）」を設定し、3つの調査結果をもとにしながら、「教育・学修支援専門職ルーブリック（第一次案）」を作成した。

## **(3) 教育関係共同利用拠点及び履修証明プログラムの運営のための調査**

教育関係共同利用拠点として履修証明プログラムを運営するにあたり、大学職員の能力向上のための研修プログラムを実施している10の大学・団体に対し、訪問調査を実施した。各大学・団体の研修プログラムの内容や運営を確認することで、履修証明プログラム構築の参考とするためである。

## **(4) ALPS シンポジウム／ALPS セミナーの実施**

拠点事業として、教育・学修支援専門職の必要性和重要性を広く伝えるための研修会（セミナー）として、ALPS シンポジウムとALPS セミナーを総計4回開催した。

拠点事業のキックオフ事業として、平成27年12月7日（月）に「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点・ALPS プログラムキックオフシンポジウム：教育・学修支援専門職の確立に向けて」として、ALPS シンポジウムを開催した。100名を超える参加者があった。また、ALPS セミナーは、第1回「大学の新しい学修支援：ICUにおけるアカデミックプランニング・センターの事例から」（平成27年11月19日）、第2回「障害者差別解消法と学修支援」（平成28年2月19日）、第3回「法学におけるアクティブラーニングとカリキュラム改革」（平成28年3月8日）として3回行った。総計で100名を超える参加者があった。総計4回のシンポジウム・セミナーでは、延べ参加者数は160機関から、210名の参加者がみられた。

#### (5) 刊行物・広報活動

拠点事業の広報活動として、冊子刊行と各種広報に取り組んだ。

まず、拠点事業の成果を広く、社会及び他大学に提供することを目的に、「ALPS ブックレットシリーズ」を刊行することとした。平成 27 年度には、12 月 7 日に実施したキックオフシンポジウムの議論を「ALPS ブックレットシリーズ Vol.1 教育・学修支援専門職の確立に向けて」として刊行した。このブックレットは、全国国公立大学 779 大学に配布し、教育・学修支援専門職養成の必要性和重要性を広く広報した。

また、「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」(ALPS プログラム)の独自のウェブサイトを作成し、情報発信を行うとともに、各種報道媒体での広報に努め、事業の取組内容は 6 件の広報・報道媒体に掲載された。

#### (6) 大学間連携への参加と推進

教育関係共同利用拠点をはじめ、大学の教職員の能力向上のための取組を行っている諸機関に対して、東北大学 高度教養教育・学生支援機構が呼びかけ主体となり、「大学教職員の能力開発に関する懇談会」が開催されている。アカデミック・リンク・センターも、拠点認定後、同懇談会へ参加し、平成 27 年度中に第 1 回(平成 27 年 10 月 19 日)、第 2 回(平成 28 年 2 月 16 日)の 2 回の懇談会に参加した。

大学間連携に参加することで、拠点事業の成果を共有することができた。

### 4. 平成 27 年度の活動の総括と次年度の計画

#### (1) 平成 27 年度の活動の総括

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成 27 年 7 月 30 日に教育関係共同利用拠点として認定を受け、8 か月間の活動を行ってきた。運営委員会を設置して実施するとともに、重点的取組として、「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック(第一次案)」を作成した。また、訪問調査を実施し、大学職員の能力開発プログラムや履修証明プログラムの運営について他大学の先行事例を学び、今後の参考知見を収集した。

さらに、シンポジウム・セミナーを 4 回実施し、延べ参加者数は 160 機関から、210 名の参加者がみられた。各大学には、「ALPS ブックレットシリーズ Vol.1 教育・学修支援専門職の確立に向けて」を配布するなど、積極的な広報に努めた。

これらの状況から、平成 27 年度の拠点事業の進捗状況は、計画通り順調に進んでおり、事業目的の達成が見込まれると考えられる。

#### (2) 次年度の計画

平成 28 年度においては、当初の事業計画どおり、平成 27 年度の成果を前提に、「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック」を確定し、それに基づいて履修証明プログラムの全体構成を構築するとともに、その一部を試行的に実施することを中心的に取り組む予定である。

## 1. 教育関係共同利用拠点への申請と認定

### (1) 申請の背景

アカデミック・リンク・センターは、千葉大学において「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するために提示した教育・学習のための新しいコンセプト、「アカデミック・リンク」を実現するために、2011年4月に、附属図書館、総合メディア基盤センター（当時、現・統合情報センター）、普遍教育センター（当時、現：全学教育センター）が協力して創設した学内共同利用機関である。

アカデミック・リンクは、知識基盤社会を生き抜く力を持つ「考える学生の創造」を目的として掲げ、「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つの機能により「コンテンツと学習の近接による能動的学習の促進」を実現するために、千葉大学において教育・学修支援の研究開発と具体的実践を積み重ねてきた。その取り組みは、千葉大学における教育・学修の充実だけでなく、新しいタイプのラーニングコモンズとしての学習空間の整備、学修支援活動としての機能、デジタル教材を中心とした教材開発、学修支援の研究開発などを中心に、我が国の大学の先駆的取組みとして、国の政策文書（中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）資料編」（2012年8月））に取り上げられるとともに、新聞報道をはじめとする各種メディアなどでその取組内容が紹介されることを通じて、我が国の大学における教育・学修支援のひとつのモデルを提示してきた。

他方、現在、日本の大学教育においては、学生の能動的学習の推進、学習時間の増加などを通じた「大学教育の質的転換」の必要性が指摘されており（中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012年8月））、各大学においてその具体的な取り組みが求められている。そして、このような大学教育の質的転換を進めるために、これまでの大学教員、大学職員の区分を超えた、新たな専門職（中間的専門職）の必要性が指摘されてきた。さらに現在、高大接続システム改革として、高校から大学への移行プロセスの再構築が進められる中で、大学に対しては、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの3つのポリシーに基づく体系的な教育課程の構築・充実が求められており、そのことを推進していく新たな高度専門職の育成・制度化の必要性が指摘されている。このような高度専門職をどのように設定するか、また、大学職員の組織的研修（Staff Development）をどのように充実させていくかは、我が国の大学教育の質的転換のために喫緊の政策課題となっている。日本の大学教育の高度化のために、教育・学修支援に高度な専門性を有し、「高度な実践力」と「体系された関連知見」と「新しい教育の開発・企画力」を有する新たな教育・学修支援専門職の養成は急務である。この新たな高度専門職が、大学教育の質的転換を支える専門人材となるためである。

このような政策的動向を踏まえ、アカデミック・リンク・センターでは、これまで教育・学修支援に関する先駆的取組みを進めてきたことを活かして、教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムを履修証明プログラムとして開発・運営・実施する構想を考案し、平成27年度の文部科学省による教育関係共同利用拠点に、大学の教職員の組織的な研修等の実施機関として申請することとした。



## (2) 認定のプロセス

平成 27 年度の教育関係共同利用拠点の公募は、平成 27 年 5 月 18 日付により文部科学省高等教育局長により、各大学に通知された。

アカデミック・リンク・センターでは、これに申請することをセンターの方針として決定したのち、学内調整等を経て、6 月 5 日及び 6 月 16 日に、文部科学省担当部署への事前相談を行い(本申請は、事前相談が制度化されており、申請の前提となっている)、6 月 23 日に申請書類を提出した。その後、7 月 14 日に審査委員会による面接審査を受審し、8 月 5 日に認定の通知を得た(認定は 7 月 30 日付)。

認定において、「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点(教育・学修支援専門職養成) (アカデミック・リンク・センター)」の拠点名が与えられ、平成 27 年 7 月 30 日～平成 29 年 3 月 31 日の 2 年間が有効期間とされた。そして、(1) 国内外の事例・先行研究等を踏まえ、我が国における教育・学修支援職の確立に寄与し、全国に普及しうる研修プログラムの開発・提案を行うこと。(2) 研修プログラムの共同利用計画を確立し、利用者数・利用大学数を拡充すること。(3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるよう努めること。の 3 点の留意事項が付与された。

これらの留意事項を前提に、拠点事業を推進することとなった。

## 2. 教育関係共同利用拠点としての認定後の活動

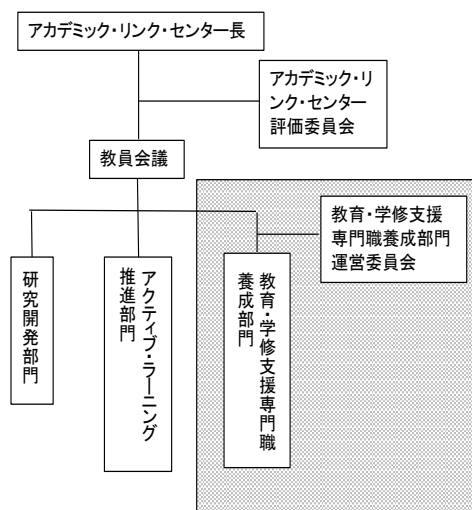
### (1) センターの一部改組と運営委員会の設置

#### ア. センターの一部改組と運営組織

教育関係共同利用拠点としての認定を受け、アカデミック・リンク・センターでは、拠点事業を推進するために、センター教員会議においてセンター関連規程を改正するとともに、組織を一部改組し、既存の研究開発部門とアクティブラーニング推進部門に加え、教育・学修支援専門職養成部門をセンター内に設置した。そして、教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程【平成 21 年 8 月 20 日 文部科学省告示第 155 号】第 2 条第 3 項に基づく委員会として、教育関係共同利用拠点の運営と教育・学修支援専門職養成部門の活動に関する重要事項を審議するために「教育・学修支援専門職養成部門運営委員会」を設置した。改組後の組織図を下記に提示している。

あわせて、拠点事業で取り組む活動を「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」(Academic Link Professional Staff Development for Educational and Learning Support : ALPS プログラム) と称し、ロゴを作成することとした。

アカデミック・リンク・センター組織図



※教育関係共同利用拠点の運営と教育・学修支援専門職養成部門の活動に関する重要事項を審議するため、センター長、センター教員会議構成員、外部の学識経験者等の委員で構成。(教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程【平成 21 年 8 月 20 日 文部科学省告示第 155 号】第 2 条第 3 項に基づく委員会)

図 1 アカデミック・リンク・センター組織図 (拠点認定後)

また、拠点事業を推進していくために、平成 27 年 9 月に事務補佐員の公募を行い、10 月より担当事務組織の強化を図るとともに、10 月には教員公募を行い、本拠点事業を本務とする特任教員(特任助教)を翌年 3 月より採用した。また、拠点事業を推進するために学内の兼務教員(教授)を 2 名増員することを進め、拠点事業を十全に推進するための組織体制を構築した。

## イ. 運営委員会の設置と開催

拠点事業の認定ののち、共同利用の実施に関する重要事項について審議する機関として運営委員会である「教育・学修支援専門職養成部門運営委員会」の設置を進めた。拠点事業の内容を背景に、高等教育論や大学職員論、教育行政などに高い学識を有する学外有識者に委員就任を依頼し、これら外部有識者が委員の過半数を超える委員数とし、学外者 6 名、学内関係者 4 名による委員会として設定した。

「教育・学修支援専門職養成部門運営委員会」は、第 1 回委員会を 12 月 7 日に開催し、教職員の組織的な研修等の共同利用拠点の今後の進め方について議論が行われた。なお、同日は、第 1 回 ALPS シンポジウムとして、「ALPS プログラム キックオフシンポジウム」を開催し、委員による登壇及び参加があった。運営委員会では、年度計画として、平成 27 年度中に、「教育・学修支援専門職ルーブリック」を作成することを基本方針として決定した。

委員名簿及び議事概要は別掲の通りである。

## ウ. 企画ワーキング・グループの設置とその活動

教育関係共同利用拠点としての認定を受け、拠点事業を推進するための組織として、新設した教育・学修支援専門職養成部門の中に、教育・学修支援専門職能力ルーブリックの開発、SD プログラム設計を検討する「企画ワーキング・グループ」を設置することとした。企画ワーキング・グループは、アカデミック・リンク・センターに關係する教職員のみでなく、千葉大学の全学的な協力を得ることを目的に、17 名の教職員から構成することとした。その構成は、副学長（学修支援）、副学長（教育改革）の副学長 2 名、人文社会学研究科長、普遍教育センター副センター長、高等教育研究機構、アカデミック・リンク・センター関係教員等の教員とともに、学務部教育企画課、教務課、学務部留学生課、附属図書館の職員とし、教職協働を進める体制を構築した。

この企画ワーキング・グループは、平成 27 年 10 月以降、2 か月程度に 1 度の開催頻度により、年度内に 3 回開催し、拠点事業の実施内容の方向性を決めるとともに、進捗状況を確認する役割を担っている。

委員名簿及び議事概要は別掲の通りである。

## エ. 調査実務ワーキング・グループの設置とその活動

拠点事業を実務的に推進するための組織として、企画ワーキング・グループのもとに、調査実務ワーキング・グループを設置し、教職協働により、教育・学修支援専門職能力ルーブリックの開発、SD プログラム設計に必要な各種調査を担当する組織を設置した。

調査実務ワーキングは、教員 2 名（平成 28 年 2 月より 3 名）と学務部職員 2 名、附属図書館職員 2 名、アカデミック・リンク・センター職員 1 名の 7 名（平成 28 年 2 月より 8 名）による構成とし、大学職員へのインタビュー調査、文献調査、大学職員へのアンケート調査の実務作業を担当した。この調査実務ワーキング・グループは、平成 27 年度内に 8 回開催し、大学職員インタビュー調査の対象者の選出、実施、分析を中心に、調査・分析実務の中心的役割を任せた。

## (2) 拠点事業の活動

### ア) 教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック作成のための活動

#### (ア) 調査の全体概要

平成 27 年度の拠点事業では、その中心的活動として「教育・学修支援専門職ルーブリック」の作成に取り組んだ。この「教育・学修支援専門職ルーブリック」を作成するために、まず、「教育・学修支援に必要な能力項目」の抽出に取り組んだ。このことを進めるために、1) 文献の系統的抽出・分析、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査、3) 大学職員を対象とするアンケート調査を実施した。これら 3 つの調査の関係は、下図の通りである。

まず、1) 文献の系統的抽出・分析を通じて、先行研究によって大学職員の能力養成においてどのような能力が重要と言及されているかを抽出する。次いで、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査により、大学職員が重要と考える能力を文脈を通じて確認するとともに、能力項目プールを作成する。そして、文献調査とインタビュー調査をもとにアンケート調査を作成し、能力項目の構成概念の妥当性を検証し、設定するという構成である。

これらの調査を通じて、「教育・学修支援に必要な能力項目（第一次案）」を設定し、3 つの調査結果をもとにしながら、「教育・学修支援専門職ルーブリック（第一次案）」を作成した。

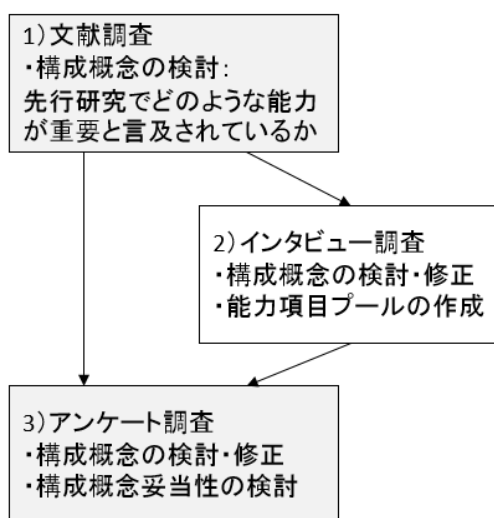


図2 3つの調査の関係

## (イ) 大学職員を対象とするインタビュー調査

### 1. 目的

「教育・学修支援に必要な能力項目」・「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」を作成するために、学生に接する業務を担当する現職大学職員を対象に、インタビュー調査を実施した。現場の大学職員がどのような業務のなかで、どのような能力を必要と考えているかを広く聴取することで、教育・学修支援に必要な能力を帰納的に構築することを目的とするためである。

### 2. 調査の対象

本調査は、29名の国私立大学（6大学）の現職職員を対象とした。原則として10年以上の職務経験を有する職員を対象とし、大学で教育支援、学修支援、学生支援に直接・間接にかかわる部署として学務系職員（本部・学部）、図書館職員のなかから、①他者推薦として高い職能を有していると評価されている、②他機関の主催セミナーに参加する積極性を有する、③スノーボールサンプリングとして調査者からの推薦、により選定した。また、対象の選定にあたり、管理職（課長級）、初級管理職（課長補佐、係長級）、一般職員の職位の多様性にも配慮した。表1は調査対象を示したものである。

表1 インタビュー調査の対象

	学務系職員				図書館職員			合計
	管理職	初級管理職	一般職員	その他	管理職	初級管理職	一般職員	
国立大学	4	6	11	2	1	2	1	25
私立大学	1	0	1	0	1	0	1	4

※その他は、再雇用職員・特定専門職員

### 3. 調査・分析の方法

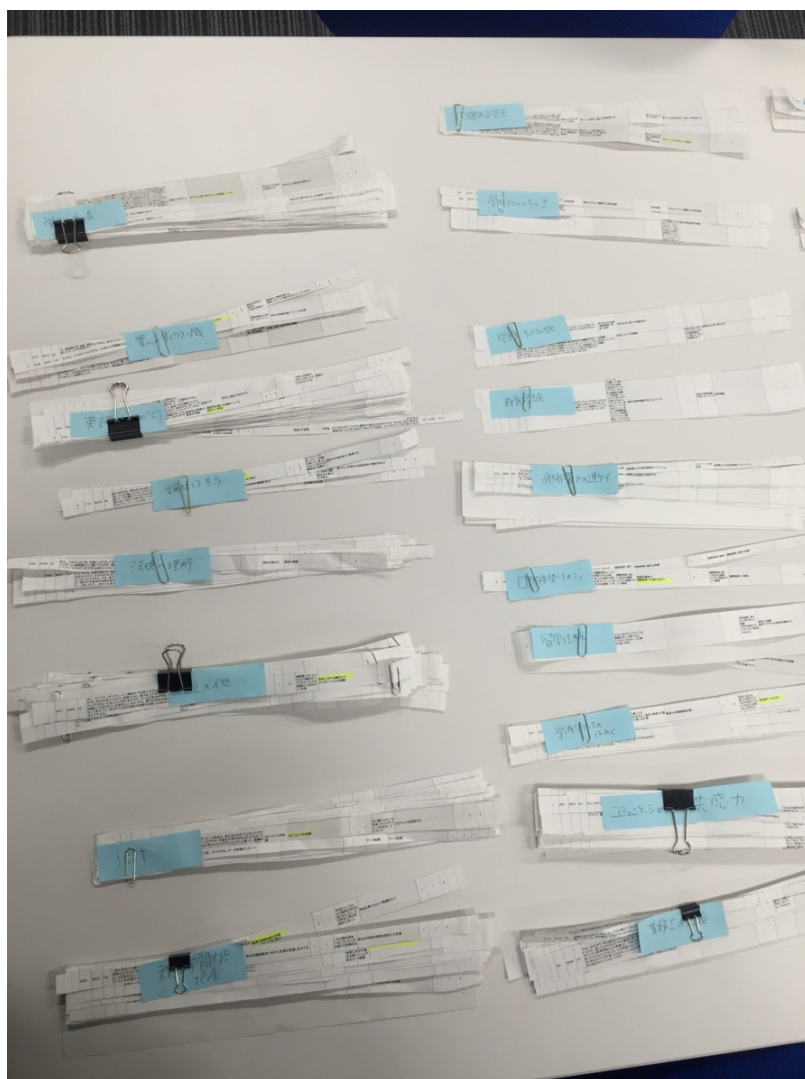
調査では、職員4名と教員2名からなる6名の調査グループが、2015年11月から2016年2月にかけて、国私立大学の現職職員を対象に、1件1時間程度を目安とする半構造化インタビューを行った。インタビュー項目は、①現在の部署での仕事内容、これまでの異動の状況、それぞれの場所での仕事内容、②自分自身の強み・得意なこと、③これまでの教育課程や授業支援などに関する仕事、学生に接する仕事のなかで時間がかかったこと、他の人の助けを求めたこと、④③のことを振り返ってみて、どういう力・能力があればうまくできたと思うか、⑤大学で学生に接する仕事の際に必要／あったほうがよいと思う能力、⑥自分の能力を上げるために行っていること、心掛けていること、⑦自分が受けてみたいと思う研修、などである。

### 4. 調査・分析のプロセス（資料収集のプロセス）

29名のインタビューデータは、発言の意味のかたまりごとに、総数7710件のパラグラフに区分され、そのうちコード化可能な能力項目の言及がみられたパラグラフは861件であった（2名の分析者が共通で抽出したパラグラフ444件、一方のみが抽出417件）。能

力項目の抽出は、対象パラグラフから1次ラベルを付与し、全体調整のうえで抽象化した2次ラベルを付与する2段階で行い、2次ラベルをもとに統一カテゴリを整理する3段階の分析方法を採用した。2次ラベルから抽出された能力項目の総数は、1234項目であった(1パラグラフから複数の能力項目も抽出)。これらの能力項目の重複整理を行い、類似項目を集約することで能力カテゴリを作成し、統一カテゴリを編成した。

#### 作業プロセス



#### 5. 分析結果 (概要)

1234件の能力項目を重複を整理し、類似項目を集約することで、以下の58件の能力項目(中項目)を抽出し、更に整理を行い、18項目のドメイン項目を設定した。

表2 インタビュー調査による析出した能力項目

大分類(6)		ドメイン(18)		中項目(58)		
対象・対人関係	学生	一般的な学生への対応	1	学生の立場に立つ		
			2	学生に丁寧に説明できる		
			3	学生のニーズを把握する		
			4	学生の話を聞く		
			5	学生への指導力		
		困難を抱えた学生への対応	6	学生トラブルの知識		
			7	問題のある学生への対応		
			8	メンタルヘルスの知識		
			9	カウンセリング		
	教員	教員との関係を構築する	10	教員とのコミュニケーション		
	職員	チームで仕事する	11	職場の環境づくり		
			12	チームワーク/情報共有(報・連・相)		
			13	リーダーシップ		
	その他	人的ネットワーク	14	人脈作り		
	知識・内容	関係する知識	業務に関する知識	15	他大学の人のつながり	
16				業務の専門知識		
17				業務に必要な知識		
18			大学の予算・会計についての理解			
自大学や自学の学生を理解する			19	学生生活の知識		
			20	全学についての知識		
			21	他部署との連携		
			22	学内のリソースの把握		
			23	教育についての知識		
			24	高等教育についての知識		
高等教育、社会、教育に関する知識			25	法規の理解		
			26	政策動向の把握		
			27	国際情勢の理解		
			情報	情報収集、整理、分析、発信	28	情報収集
					29	他大学の情報収集
		30			情報を整理する	
31		情報発信・広報				
32		統計				
33		教育・学習内容の把握				
教育内容		教育内容を把握する	34	仕事を一人で抱えない		
			35	仕事の効率化		
	36		根拠を持って対応する/正確性			
	37		仕事への姿勢/職員としての役割意識			
仕事の進めかた	仕事の進め方	38	英語(語学)			
		39	自己理解			
その他	キャリア・スキルアップ	40	キャリアアップ/スキルアップ			
		41	研修への参加			
	様々な経験を積む	42	教育の経験			
		43	研究の経験			
		44	様々な業務経験			
		45	留学経験			
	46	説明できる(プレゼンテーション等)				
	基礎的能力	物事を広く見る力	47	先見性・先を見る力		
48			物事を広く見る力			
49			観察力・調整力			
クリティカルシンキング		50	批判的なものの見方			
		51	疑問を持つ			
		52	論理的思考			
メタ的な能力(社会人としてのコンピテンシー)			53	コミュニケーション能力・共感力		
			54	信頼関係を構築する		
			55	企画力		
			56	冷静な判断力		
			57	クレーム対応		
			58	健康・体力		
分類しない	分類しない	59	その他			

## (ウ) 文献調査の概要

### 1. 調査の目的と概要

#### 1. 1. 調査の目的

本調査は、教育・学修支援専門職に必要な能力を明らかにすることを目的に、大学職員や教育支援、学修支援について論じられた先行研究・専攻調査を収集・分析したものである。本調査によって既存文献資料で指摘されている教育・学修支援専門職に必要な能力を抽出することにより、大学職員を対象とするインタビュー調査の分析結果とともに、教育・学修支援専門職に求められる能力項目をプールすることが可能となる。これらの能力項目のプールは、大学職員を対象とするアンケート調査を設計に活用するとともに、能力項目や能力ルーブリックの策定の根拠資料として活用する。

#### 1. 2. 調査の対象の概要

海外先行研究においては、Student Affairs などの専門職の定義(ACPA & NASPA 2015)や一定の基準のもと教育課程が整備(CAS 2015)されている。この状況を踏まえ、本調査では特に国内文献に焦点を当てることとした。伊藤(2010)が言及しているように、大学職員に関する文献は2000年前後から急増している。このような実態を踏まえ、本調査では2000年から2015年までを対象とし、「CiNii Articles」「国会図書館サーチ」「JAIRO」の3つのデータベースを使用し、文献抽出を行うこととした。

検索語については、「教育・学修支援」の議論が未成熟であるという状況に鑑み、大学職員全体を含む用語として、以下の検索ワードの14の組み合わせを設定した。すなわち、{大学} + {職員} {図書館} + {能力} {コンピテンシー} {SD} {研修} {支援+教育} {支援+学習} {支援+学修}、{支援+学生}、{支援+授業}、である。

#### 1. 3. 調査・分析のプロセス

14の検索ワードによる検索結果をもとに、データベース内およびデータベース間の重複データを除外し、第一次文献リストを作成した。この第一次文献リストについて、文献のタイトルから調査者4名(教員3名、職員1名)が、それぞれ、教育・学修支援の能力への関わりを4段階で評価を行い、関連性の低い文献(研究支援、財務・会計等)を除外し、関連度の平均値が3以上の文献を第二次文献リストとして設定した。そして、二次文献リストの検索結果から漏れる単行本の章や頻出する被引用文献の補完する作業を行い、分析対象リストを整理した。分析文献リストに掲載された文献を精査し、その内容に含まれる教育・学修支援に関する能力項目を抽出した。抽出された能力は、その抽象度・具体性も多様であり、アプローチの方法も経験ベース、調査ベースと多岐に渡るが、より個別具体的に言及されている能力や行動特性に焦点を当てて整理し、能力項目プールを作成した。



## 2. 調査の対象

上記の示した通り、使用したデータベースと検索ワードは以下の通りである。

### 2. 1. 使用したデータベース

- 1) CiNii Articles
- 2) 国会図書館サーチ (NDL-OPAC)
- 3) JAIRO

### 2. 2. 14の検索ワード

	検索ワード
1	「大学」 + 「職員」 + 「能力」
2	「大学」 + 「職員」 + 「SD」
3	「大学」 + 「職員」 + 「コンピテンシー」
4	「大学」 + 「職員」 + 「支援」 + 「教育」
5	「大学」 + 「職員」 + 「支援」 + 「学習」
6	「大学」 + 「職員」 + 「支援」 + 「学修」
7	「大学」 + 「職員」 + 「支援」 + 「学生」
8	「大学」 + 「職員」 + 「支援」 + 「授業」
9	「大学」 + 「図書館」 + 「支援」 + 「教育」
10	「大学」 + 「図書館」 + 「支援」 + 「学習」
11	「大学」 + 「図書館」 + 「支援」 + 「学修」
12	「大学」 + 「図書館」 + 「支援」 + 「学生」
13	「大学」 + 「図書館」 + 「支援」 + 「授業」
14	「大学」 + 「職員」 + 「研修」

## 3. 調査・分析のプロセス（資料収集のプロセス）

### 3. 1. 第1プロセス

「CiNii Articles」「国会図書館サーチ」「JAIRO」の3つのデータベースを使用し、14の検索ワードから検出された文献を抽出した。その結果、「CiNii Articles」767件、「国会図書館サーチ」157件、「JAIRO」224件の文献が抽出された。尚、3つのデータベースで検出された文献のうち重複する文献は除き、加えて、「国会図書館サーチ」で、抽出された文献のうち「NDL 雑誌記事索引」、「JAIRO」、「CiNii Articles」、「J-STAGE」経由で検出された文献は他と重複するため除外した。その結果、3つのデータベースから抽出された文献は、合計1108件であった。ここから重複件数を除くとともに検索結果から漏れた単行本の章や頻出する被引用文献の補完を行い、951件の第一次文献リストを作成した。

### 3. 2. 第2プロセス

第一次文献リストの文献タイトルから調査者4名がそれぞれ教育・学修支援の能力への関わりを4段階で評価し、関連の深い文献を選出した。評価基準は「4：内容を必ず確認する必要がある」、「3：内容を確認することが望ましい」、「2：内容を確認する必要が低い」、「1：確認する必要はない」として、4から1の数字を4名の調査メンバーで付与し、

加えて、文献に関連するキーワードの付与作業を行った。その結果は、下の図1と表1に示したように1から2と評価した文献で50%以上を占める結果となった。この結果をもとに、関連性の低い文献（研究支援、財務・会計等）を除外し、平均値が3以上の文献を選出し、第二次文献リスト（292件）として設定した。

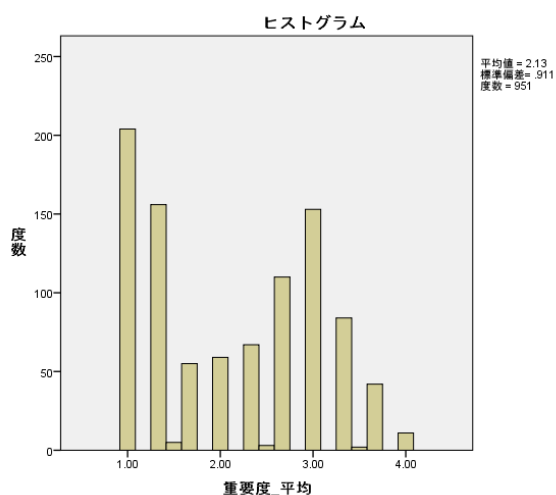


図1. 文献評価 重要度付与の傾向

重要度_平均					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1.00	204	21.5	21.5	21.5
	1.33	156	16.4	16.4	37.9
	1.50	5	.5	.5	38.4
	1.67	55	5.8	5.8	44.2
	2.00	59	6.2	6.2	50.4
	2.33	67	7.0	7.0	57.4
	2.50	3	.3	.3	57.7
	2.67	110	11.6	11.6	69.3
	3.00	153	16.1	16.1	85.4
	3.33	84	8.8	8.8	94.2
	3.50	2	.2	.2	94.4
	3.67	42	4.4	4.4	98.8
	4.00	11	1.2	1.2	100.0
	合計	951	100.0	100.0	

表1. 文献評価 重要度付与の傾向

### 3.3. 第3プロセス

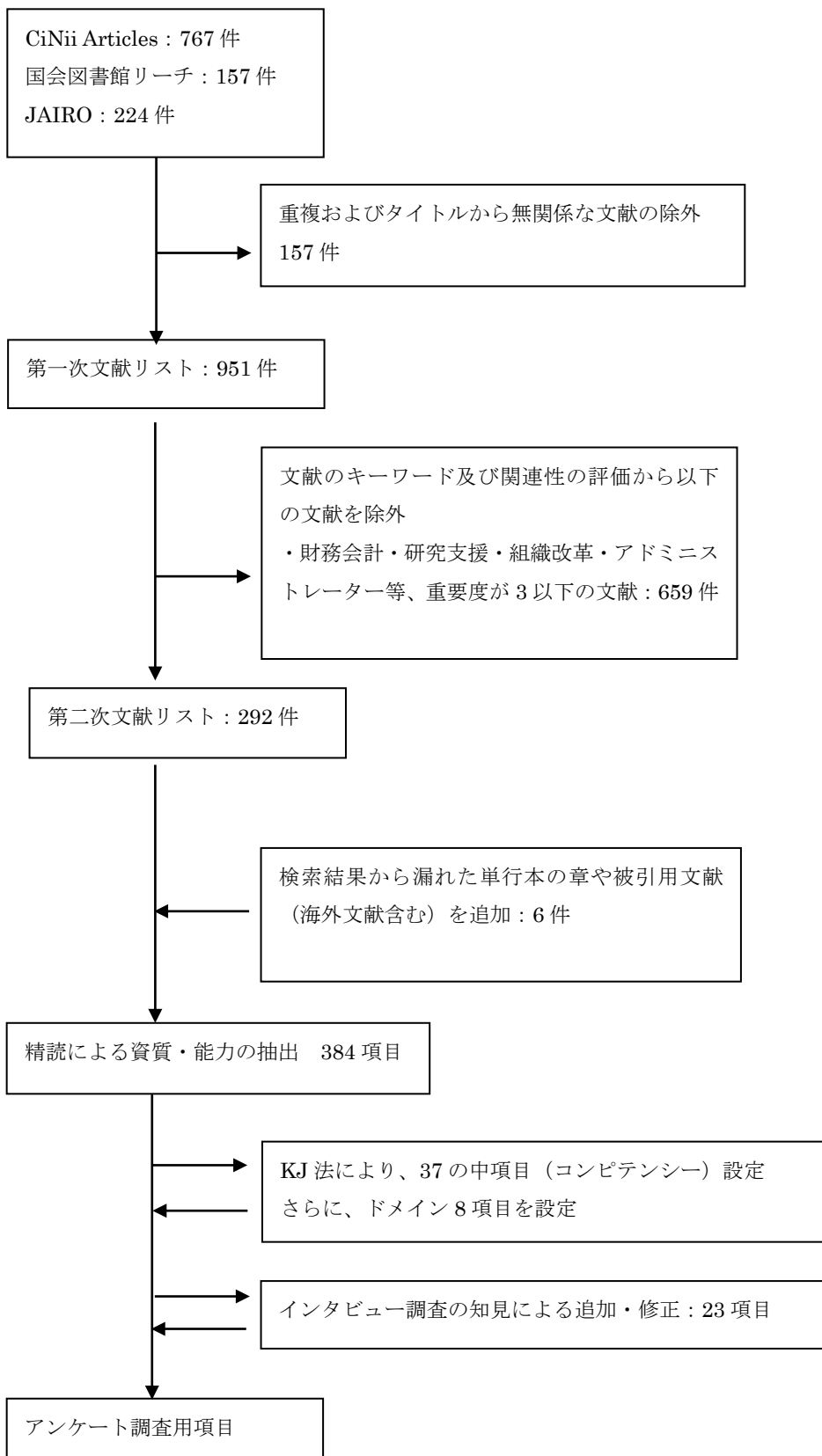
第二次文献リストの文献内容から「教育・学修支援に関する能力」の洗い出しを行った。その際、実践事例や個人の経験による文章の執筆、要旨のない記事は除外し作業を行った。除外作業と同時に、検索結果から漏れる単行本の章や頻出する被引用文献の補完を行った（6件）。作業の結果、384件の能力（行動特性）を抽出した。これら能力を調査メンバー（3名）でKJ法を用い分類を行い（35項目の中項目（コンピテンシー））を設定した（図2、表2参照）。加えて、ドメイン（コンピテンシ）として8つの項目を教育・学修支援に関する能力として位置付けた（図2、表3参照）。



図2. KJ法実施時の様子



#### 4. 分析結果（整理フロー）



## (エ) Web アンケート調査（教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査）結果概要

### 1. 目的

本 Web アンケート調査は、大学職員を対象に、大学における教育・学修支援の専門性に関する資質・能力の在り方や、研修プログラムに対するニーズを把握することを目的として実施したものである。特に前者については、文献調査やインタビュー調査をもとに作成されたコンピテンス領域（ドメイン）やコンピテンシーの構造の妥当性や信頼性を検証することを狙いとしている。

### 2. 調査設計

#### 2. 1. 調査の対象

国公立 10 大学の研究協力のもと、各大学の事務局に調査対象者への案内を依頼する形式で匿名 Web 調査方式により実施した。配票については、各校のシステム等に依存するため、分析対象者を事後的に選定できるよう、質問項目を設定している。

#### 2. 2. 調査項目の選定

具体的な調査項目は、教育・学修支援に関連する資質・能力を測定する 47 項目（「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 段階リッカート尺度。反転項目を含む。）、教育・学修支援の専門性を養成する研修プログラム内容のニーズに関する 15 項目（「必要である」～「必要でない」の 5 段階リッカート尺度）、教育・職務経験年数、研修・資格取得経験、基本属性等である。

#### 2. 3. 分析方法

ニーズの評価については、単純集計を基本とし、尺度項目の評価は、①天井・床効果、②項目間相関、③I-T 相関、④各項目を除外した場合の  $\alpha$  係数、⑤G-P 分析によって行い、構成概念妥当性は因子分析により、信頼性は  $\alpha$  係数により検討することとした。

### 3. 調査・分析結果

#### 3. 1. 研修プログラムのニーズの集計結果について

本 Web アンケート調査は 2016 年 3 月に実施され、712 件の回答が得られた。この 712 件の回答について、研修プログラムのニーズに関する項目である「Q:あなたは教育支援・学修支援の専門性を構成する能力として、どのような内容の知識や能力が必要だと思いますか。」の問いについての単純集計をまとめたものが、図 1 である。

集計の結果、最も必要という意見が多かった項目は、「(13) 接遇等の対人スキル」であり、次いで「(1) 大学教育における現代的課題」、「(15) 学生のキャリア形成や就職支援のあり方」の順となっている。必要という意見が少なかった項目は、「大学で教育研究されている学問領域全体の体系・内容・構造」や「(14) 各種資格やその取得に関する情報」などであるが、これらの項目も「必要である」と「ある程度必要である」という回答を合わせた割合は 7 割強であることを考え合わせると、今回アンケートで設定されたいずれの項目についても必要であることが示唆される。一方で、「(10) 授業改善・教材開発」については、相対的に「どちらともいえない」の割合が大きいことが確認される。

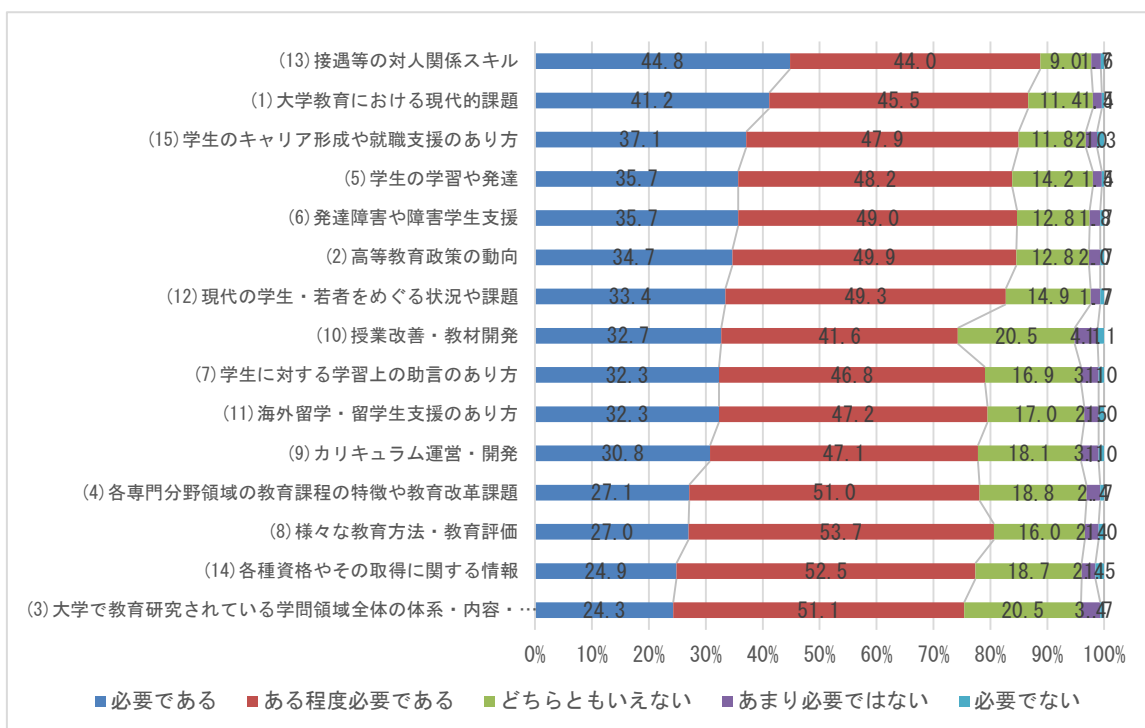


図1：研修プログラムのニーズ（単純集計）

### 3. 2. 資質・能力尺度項目の分析結果について

#### 1) 項目分析結果

調査で得られた 712 件の回答のうち、資質・能力尺度項目に関する分析では事務補佐員等を除く専任事務職員 502 名を分析対象とした。この場合の回収率は、20.7%（公表データに基づく）であった。なお、1 ケースについては回答に論理矛盾が確認されたため、分析から除外し、最終的な分析対象は 501 名となった。

この 501 ケースについて、反転項目 2 項目を除く 45 項目について項目分析の結果、以下の結果が得られた。

##### ①天井・床効果について

天井効果（ $Mean + SD > 5$ ）を示す質問項目が 2 項目確認されたため、項目の内容を確認し、削除することとした。

##### ②項目間相関について

1 項目で 0.7 以上の相関が認められたが、項目の意味内容を吟味し、当該項目はこの段階では除外しないこととした。

##### ③I-T 相関について

I-T 相関係数は 0.26～0.64 の範囲であり、著しく相関が低い項目は確認されなかった。

##### ④各項目を除外した場合の Cronbach の $\alpha$ 係数について

いずれも 0.94 以上であり、内的一貫性を脅かす項目は確認されなかった。

##### ⑤G-P 分析について

四分位法に基づき上位 1/4 群と下位 1/4 群に分け、各項目得点の平均値について t 検定を行った結果、いずれの項目でも有意差が確認された。

## 2) 信頼性・妥当性の検証結果

項目分析の結果、得られた43項目について探索的因子分析（最尤法、Promax回転）を実施し、ガットマン基準および因子負荷量が0.35以上の項目を採用し、複数の因子に対して重複した負荷を示した項目は除外することとし、分析を繰り返し、最終的に5因子30項目を採用することとした（表1）。

各因子および評価尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は、因子1が0.82、因子2が0.84、因子3が0.86、因子4が0.80、因子5が0.80、評価尺度全体が0.86であり、各因子と評価尺度全体に高い信頼性が確認された。構成概念妥当性については、文献調査およびインタビュー調査結果との関連性から概ね確保されたと考えられる。

表1：探索的因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
<b>因子1：学生・教育への関心</b>					
(1) 様々な教育方法に関心がある。	.831	-.062	.007	-.054	.012
(9) 学生の学習や発達についての専門的な知識に関心がある。	.800	-.013	.070	-.080	-.120
(3) 現代の学生・若年者をめぐる課題や問題状況に関心がある。	.755	.116	-.146	.010	-.018
(5) 学生のメンタルヘルスに関する知識に関心がある。	.745	.059	-.053	.025	-.083
(4) 個々の学生の家庭環境や家族関係が多様であることを理解しようとしている。	.690	.181	-.094	-.081	-.029
(18) 留学生への支援のあり方に関心がある。	.657	-.049	-.099	.045	.104
(17) 障害をもつ学生へ支援のあり方に関心がある。	.656	.008	-.062	.102	.026
(13) 各専門分野の教育について動向に関心がある。	.621	-.103	.279	.028	-.036
(6) 学生が参加できる学内外の学習機会を把握している。	.617	-.075	.115	-.032	.061
(7) カリキュラムマネジメントについて関心がある。	.617	-.057	.183	.013	.007
(10) 学内の教育環境・設備を把握している。	.460	.023	.150	.001	.057
<b>因子2：他者への関わり</b>					
(27) 相手の立場で考えることを意識している。	-.047	.831	.043	.029	-.139
(26) 他者の話を丁寧に聞く。	.018	.789	.092	-.165	-.028
(11) 話しかけやすい雰囲気意識している。	-.095	.559	-.027	-.083	.184
(23) 相手の特徴や個性に合わせた対応をする。	.007	.454	-.022	.150	.030
(28) 教員との協働を意識している。	.148	.452	.065	.165	-.061
(10) チームワークが得意である。	-.025	.439	.019	.014	.267
(21) 困った人を見たら進んで声を掛ける。	.200	.425	-.045	.071	.120
<b>因子3：高等教育・大学の構造</b>					
(14) 学校教育法や大学設置基準等の関連法規を理解している。	.000	.094	.867	-.042	-.026
(15) 高等教育の制度や歴史を理解している。	.169	-.060	.718	-.016	.083
(12) 文部科学省や中央教育審議会等の政策文書を読んでいる。	-.010	.052	.707	.095	.021
<b>因子4：仕事への姿勢</b>					
(1) 新しい企画・提案をする。	.000	-.133	-.004	.843	-.006
(5) リーダーシップを発揮する。	-.195	.105	.119	.766	-.048
(6) 自分の業務の進め方を絶えず見直している。	.050	.227	-.096	.507	-.019
(7) 自分の業務の社会に対する意味や役割を意識している。	.089	.145	.035	.406	.041
(4) ICT等の新しいテクノロジーに対応する。	.155	-.090	-.071	.375	.101
<b>因子5：学内外資源の積極的活用</b>					
(13) 他部署との交流を積極的に行っている。	-.089	.105	.072	-.050	.765
(12) 学内の他部署の仕事に関心を持っている。	.029	.137	-.074	-.068	.681
(14) 他大学の教職員と交流する。	-.067	-.099	.136	.164	.466
(8) 自分から進んで研修に参加する。	.194	-.025	-.051	.184	.432
<b>因子間相関</b>					
因子1		.466	.542	.489	.510
因子2			.146	.558	.568
因子3				.467	.369
因子4					.621
因子5					

『教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査』  
基礎集計

<調査の基本情報>

- ・実施時期：2016年3月14日～31日
- ・調査対象：国公立10大学の大学職員（国立：6校、公立：1校、私立：3校）
- ・調査方法：匿名WEB回答方式のアンケート調査
- ・配票方法：各大学の事務局に調査対象者へアンケートの案内を依頼
- ・回収票数：712票（事務補佐員等含む）

<1. あなた自身についてうかがいます。>

Q1：あなたの性別について、あてはまるもの1つを選択してください。

	度数	パーセント
男性	312	43.8
女性	306	43.0
無回答	94	13.2
合計	712	100.0

Q2：あなたの年齢について、あてはまるもの1つを選択してください。

	度数	パーセント
25歳未満	22	3.1
25～29歳	85	11.9
30～34歳	72	10.1
35～39歳	116	16.3
40～44歳	125	17.6
45～49歳	86	12.1
50～54歳	108	15.2
55～59歳	66	9.3
60歳以上	31	4.4
無回答	1	0.1
合計	712	100.0



Q3：あなたの最終学歴について、あてはまるもの1つを選択してください。

	度数	パーセント
高等学校卒業	121	17.0
短期大学、高等専門学校、専門学校卒業	115	16.2
四年制大学卒業	396	55.6
修士課程/博士前期課程/専門職学位課程 修了	61	8.6
博士課程/博士後期課程（学位未取得）	1	0.1
博士課程/博士後期課程 修了（学位取得）	10	1.4
その他	3	0.4
無回答	5	0.7
合計	712	100.0

Q4：あなたが現在勤務している大学は、あなたが卒業した大学ですか。あてはまるもの1つを選択してください。

	度数	パーセント
はい	141	19.8
いいえ	561	78.8
無回答	10	1.4
合計	712	100.0

Q5：あなたは現在勤務している大学にどのような経緯で採用（異動含む）されましたか。あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

		度数	パーセント
国立	1. 国家公務員1種試験	2	0.3
	2. 国家公務員2種試験	98	13.8
	3. 国家公務員3種試験	139	19.5
	4. 国立大学法人等職員統一採用試験	102	14.3
	5. 大学の独自採用・公募（特任，非常勤を含む）	186	26.1
	6. 非常勤職員からの登用	40	5.6
	7. その他	60	8.4
公立	1. 地方自治体職員としての採用	0	0
	2. 法人・大学職員としての独自採用	8	1.1
	3. その他	0	0
私立	1. 新卒採用	41	5.8
	2. 中途採用	31	4.4
	3. 学校法人の他部門から配属	3	0.4
	4. その他	2	0.3
合計		712	100.0

Q6：あなたの現在の職務について、あてはまるもの1つを選択してください。

(所属部署ではなく、担当職務の内容からご回答ください。また、学内での呼称が異なる場合、最もあてはまるものを選択してください。)(必須)

	度数	パーセント
総務・人事	114	16.0
財務・経理	78	11.0
経営企画	29	4.1
教務	69	9.7
学生支援(キャリア・就職支援含む)	57	8.0
入試	27	3.8
広報	13	1.8
情報システム	11	1.5
施設・管財	27	3.8
国際交流(留学生関連含む)	34	4.8
研究支援	81	11.4
図書館	55	7.7
病院	36	5.1
附属学校園	7	1.0
その他	74	10.4
合計	712	100.0

Q7: あなたが大学職員としてこれまで経験した職務について、それぞれの経験年数をあてはまるもの1つを選択してください。(勤務先にその職務の該当がない場合は、「経験なし」を選択してください。)(必須)

		経験なし	1年未満	1年以上5年未満	5年以上10年未満	10年以上15年未満	15年以上20年未満	20年以上	合計
総務・人事	度数	440	29	122	56	34	13	18	712
	パーセント	61.8	4.1	17.1	7.9	4.8	1.8	2.5	100.0
財務・経理	度数	485	16	96	48	36	14	17	712
	パーセント	68.1	2.2	13.5	6.7	5.1	2.0	2.4	100.0
経営企画	度数	626	16	54	12	1	2	1	712
	パーセント	87.9	2.2	7.6	1.7	0.1	0.3	0.1	100.0
教務	度数	491	29	117	37	22	11	5	712
	パーセント	69.0	4.1	16.4	5.2	3.1	1.5	.7	100.0
学生支援 (キャリア・就職支援含む)	度数	535	20	119	31	5	1	1	712
	パーセント	75.1	2.8	16.7	4.4	0.7	0.1	0.1	100.0
入試	度数	596	16	62	28	5	2	3	712
	パーセント	83.7	2.2	8.7	3.9	0.7	0.3	0.4	100.0
広報	度数	629	20	55	5	2	1	0	712
	パーセント	88.3	2.8	7.7	0.7	0.3	0.1	0	100.0
情報システム	度数	637	7	43	19	3	1	2	712
	パーセント	89.5	1.0	6.0	2.7	0.4	0.1	0.3	100.0
施設・管財	度数	624	8	49	10	5	2	14	712
	パーセント	87.6	1.1	6.9	1.4	0.7	0.3	2.0	100.0
国際交流 (留学生関連含む)	度数	610	14	71	14	0	1	2	712
	パーセント	85.7	2.0	10.0	2.0	0	0.1	0.3	100.0
研究支援	度数	534	25	103	22	10	4	14	712
	パーセント	75.0	3.5	14.5	3.1	1.4	0.6	2.0	100.0
図書館	度数	620	11	34	17	8	6	16	712
	パーセント	87.1	1.5	4.8	2.4	1.1	0.8	2.2	100.0
病院	度数	517	11	113	57	6	5	3	712
	パーセント	72.6	1.5	15.9	8.0	0.8	0.7	0.4	100.0

Q8：あなたの現在の職位（役職）について、あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

	度数	パーセント
役員（理事等）	2	0.3
管理職（部長・次長・課長・事務長等）	59	8.3
初級管理職（課長補佐級・係長級等）	190	26.7
一般専任職員（主任・一般職員・係員等）	251	35.3
事務補佐員	141	19.8
嘱託職員、臨時職員	18	2.5
派遣職員	4	0.6
その他	47	6.6
合計	712	100.0

Q9：あなたが「大学職員」としての仕事を選んだ理由について、あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

		あてはまる	ある程度あてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらない	あてはまらない	無回答	合計
(1)学校・教育業界に関心があったから	度数	225	226	127	52	81	1	712
	パーセント	31.6	31.7	17.8	7.3	11.4	0.1	100.0
(2)自分の専門性や経験を活かせるから	度数	138	156	156	110	151	1	712
	パーセント	19.4	21.9	21.9	15.4	21.2	0.1	100.0
(3)安定しているから	度数	225	286	118	36	46	1	712
	パーセント	31.6	40.2	16.6	5.1	6.5	0.1	100.0
(4)地元で働けるから	度数	271	201	56	51	132	1	712
	パーセント	38.1	28.2	7.9	7.2	18.5	0.1	100.0
(5)学生・若者と関わるのが好きだから	度数	106	205	214	79	107	1	712
	パーセント	14.9	28.8	30.1	11.1	15.0	0.1	100.0
(6)親や先生等、人に勧められたから	度数	51	138	119	108	295	1	712
	パーセント	7.2	19.4	16.7	15.2	41.4	0.1	100.0

Q10：あなたは、「大学教育」、「教育支援」、「学習支援」、「学生支援」の改革や改善、新しい取組をテーマとする研修（研修、セミナー等名称は問いません）について、過去1年以内に、参加したことはありますか。それぞれあてはまるものを1つ選択してください。（必須）

		複数回参加した	参加したことがある	参加したことはない	合計
(1)所属大学や部局主催の研修	度数	166	193	353	712
	パーセント	23.3	27.1	49.6	100.0
(2)他大学で開催される研修	度数	49	121	542	712
	パーセント	6.9	17.0	76.1	100.0
(3)大学団体が主催する研修	度数	47	99	566	712
	パーセント	6.6	13.9	79.5	100.0
(4)大学教育や大学運営に関する学会のイベント	度数	34	65	613	712
	パーセント	4.8	9.1	86.1	100.0
(5)文部科学省等の行政機関の主催する研修	度数	52	91	569	712
	パーセント	7.3	12.8	79.9	100.0
(6)大学職員等が主催する自主的なイベント	度数	34	83	595	712
	パーセント	4.8	11.7	83.6	100.0
(7)民間企業や団体が主催するセミナー	度数	56	95	561	712
	パーセント	7.9	13.3	78.8	100.0

Q11：あなたは、これまでに、次のような職務経験等を持っていますか。あてはまるものすべてをチェックしてください。

		あり	なし	合計
1. 他大学への出向	度数	125	587	712
	パーセント	17.6	82.4	100.0
2. 大学団体・関連団体・独立行政法人等への出向	度数	102	610	712
	パーセント	14.3	85.7	100.0
3. 民間企業・団体での勤務経験	度数	252	460	712
	パーセント	35.4	64.6	100.0
4. 海外での勤務経験(海外研修含む)	度数	45	667	712
	パーセント	6.3	93.7	100.0
5. 大学職員を対象とした研修やセミナーでの講師	度数	49	663	712
	パーセント	6.9	93.1	100.0
6. 文部科学省での行政職	度数	49	663	712
	パーセント	6.9	93.1	100.0
7. 文科省以外の国の行政機関での行政職	度数	23	689	712
	パーセント	3.2	96.8	100.0
8. 地方自治体等公共団体での勤務経験	度数	51	661	712
	パーセント	7.2	92.8	100.0
9. 起業・自営等の事業経営	度数	12	700	712
	パーセント	1.7	98.3	100.0

Q12：あなたは、大学職員としての職務を遂行するために、何らかの試験を受けたり、資格を取得していますか。あてはまるものすべてをチェックしてください。

		該当	非該当	合計
1. TOEIC、英検など英語の試験・資格	度数	165	547	712
	パーセント	23.2	76.8	100.0
2. 学生支援士など学生相談、学生支援の資格	度数	10	702	712
	パーセント	1.4	98.6	100.0
3. キャリアカウンセラーなどキャリア相談の資格	度数	15	697	712
	パーセント	2.1	97.9	100.0
4. IT パスポートなど情報技術の資格	度数	46	666	712
	パーセント	6.5	93.5	100.0
5. 留学カウンセラーなど留学生支援の資格	度数	4	708	712
	パーセント	0.6	99.4	100.0
6. 簿記など経理関係の資格	度数	120	592	712
	パーセント	16.9	83.1	100.0
7. 大学マネジメントなどの大学院や履修証明プログラム	度数	37	675	712
	パーセント	5.2	94.8	100.0
8. 図書館司書	度数	51	661	712
	パーセント	7.2	92.8	100.0
9. その他	度数	100	612	712
	パーセント	14.0	86.0	100.0

<2. 大学職員としての仕事について、あなたの行動、態度、認識についてうかがいます。>

Q13：あなたの日常の仕事の進め方について、それぞれあてはまるもの1つを選択してください。(必須)

		あてはまる	ややあてはまる	どちらとも いえない	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
(1)新しい企画・提案をする。	度数	112	238	161	121	80	712
	パーセント	15.7	33.4	22.6	17.0	11.2	100.0
(2)仕事に優先順位を付ける。	度数	401	266	28	11	6	712
	パーセント	56.3	37.4	3.9	1.5	0.8	100.0
(3)ルールや規則を遵守する。	度数	468	212	26	4	2	712
	パーセント	65.7	29.8	3.7	.6	0.3	100.0
(4)ICT等の新しいテクノロジーに対応する。	度数	88	200	235	126	63	712
	パーセント	12.4	28.1	33.0	17.7	8.8	100.0
(5)リーダーシップを発揮する。	度数	76	226	195	136	79	712
	パーセント	10.7	31.7	27.4	19.1	11.1	100.0
(6)自分の業務の進め方を絶えず見直している。	度数	168	363	147	30	4	712
	パーセント	23.6	51.0	20.6	4.2	0.6	100.0
(7)自分の業務の社会に対する意味や役割を意識している。	度数	183	316	162	43	8	712
	パーセント	25.7	44.4	22.8	6.0	1.1	100.0
(8)自分から進んで研修に参加する。	度数	86	160	265	127	74	712
	パーセント	12.1	22.5	37.2	17.8	10.4	100.0
(9)自分の個性や特徴を理解している。	度数	182	360	147	19	4	712
	パーセント	25.6	50.6	20.6	2.7	0.6	100.0
(10)チームワークが得意である。	度数	100	298	238	58	18	712
	パーセント	14.0	41.9	33.4	8.1	2.5	100.0
(11)話しかけやすい雰囲気を意識している。	度数	219	274	163	41	15	712
	パーセント	30.8	38.5	22.9	5.8	2.1	100.0
(12)学内の他部局の仕事に関心を持っている。	度数	131	323	183	59	16	712
	パーセント	18.4	45.4	25.7	8.3	2.2	100.0
(13)他部署との交流を積極的に行っている。	度数	71	193	276	122	50	712
	パーセント	10.0	27.1	38.8	17.1	7.0	100.0
(14)他大学の教職員と交流する。	度数	53	153	127	180	199	712
	パーセント	7.4	21.5	17.8	25.3	27.9	100.0

(15)人の顔や名前を覚えることが得意ではない。	度数	95	187	205	156	69	712
	パーセント	13.3	26.3	28.8	21.9	9.7	100.0
(16)他部局や他機関の事例を参照する。	度数	103	337	171	69	32	712
	パーセント	14.5	47.3	24.0	9.7	4.5	100.0
(17)分からないことがあれば他人に聞く。	度数	302	330	61	17	2	712
	パーセント	42.4	46.3	8.6	2.4	0.3	100.0
(18)英語等の外国語の学習を行っている。	度数	76	116	97	135	288	712
	パーセント	10.7	16.3	13.6	19.0	40.4	100.0
(19)周りの仕事を把握する。	度数	115	378	166	45	8	712
	パーセント	16.2	53.1	23.3	6.3	1.1	100.0
(20)人の成長を助けたいと思っている。	度数	207	345	129	19	12	712
	パーセント	29.1	48.5	18.1	2.7	1.7	100.0
(21)困った人を見たら進んで声を掛ける。	度数	162	359	158	28	5	712
	パーセント	22.8	50.4	22.2	3.9	0.7	100.0
(22)データや統計を使用した実態の把握を意識している。	度数	89	258	254	83	28	712
	パーセント	12.5	36.2	35.7	11.7	3.9	100.0
(23)相手の特徴や個性に合わせた対応をする。	度数	155	387	143	19	8	712
	パーセント	21.8	54.4	20.1	2.7	1.1	100.0
(24)問題を自分だけで解決しようとする。	度数	28	142	229	234	79	712
	パーセント	3.9	19.9	32.2	32.9	11.1	100.0
(25)人と話すことが好きである。	度数	150	236	222	81	23	712
	パーセント	21.1	33.1	31.2	11.4	3.2	100.0
(26)他者の話を丁寧に聞く。	度数	172	351	158	26	5	712
	パーセント	24.2	49.3	22.2	3.7	0.7	100.0
(27)相手の立場で考えることを意識している。	度数	192	402	101	13	4	712
	パーセント	27.0	56.5	14.2	1.8	0.6	100.0
(28)教員との協働を意識している。	度数	212	332	122	33	13	712
	パーセント	29.8	46.6	17.1	4.6	1.8	100.0



Q14：大学における教育や学生について、あなたの行動、態度、認識として、それぞれあてはまるもの1つを選択してください。(必須)

		あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
(1)性、人種、国籍等の多様性を理解している。	度数	180	332	150	37	13	712
	パーセント	25.3	46.6	21.1	5.2	1.8	100.0
(2)学生が晒される危険やリスクへの対応を知っている。	度数	76	253	249	96	38	712
	パーセント	10.7	35.5	35.0	13.5	5.3	100.0
(3)現代の学生・若年者をめぐる課題や問題状況に関心がある。	度数	129	328	182	53	20	712
	パーセント	18.1	46.1	25.6	7.4	2.8	100.0
(4)個々の学生の家庭環境や家族関係が多様であることを理解しようとしている。	度数	166	330	154	39	23	712
	パーセント	23.3	46.3	21.6	5.5	3.2	100.0
(5)学生のメンタルヘルスに関する知識に関心がある。	度数	114	264	210	79	45	712
	パーセント	16.0	37.1	29.5	11.1	6.3	100.0
(6)学生が参加できる学内外の学習機会を把握している。	度数	16	87	235	215	159	712
	パーセント	2.2	12.2	33.0	30.2	22.3	100.0
(7)カリキュラムマネジメントについて関心がある。	度数	34	116	243	181	138	712
	パーセント	4.8	16.3	34.1	25.4	19.4	100.0
(8)単位制度について説明できる。	度数	62	117	143	156	234	712
	パーセント	8.7	16.4	20.1	21.9	32.9	100.0
(9)学生の学習や発達についての専門的な知識に関心がある。	度数	50	167	205	144	146	712
	パーセント	7.0	23.5	28.8	20.2	20.5	100.0
(10)学内の教育環境・設備を把握している。	度数	44	216	214	167	71	712
	パーセント	6.2	30.3	30.1	23.5	10.0	100.0
(11)様々な教育方法に関心がある。	度数	75	245	216	110	66	712
	パーセント	10.5	34.4	30.3	15.4	9.3	100.0
(12)文部科学省や中央教育審議会等の政策文書を読んでいる。	度数	28	136	138	153	257	712
	パーセント	3.9	19.1	19.4	21.5	36.1	100.0
(13)各専門分野の教育について動向に関心がある。	度数	34	182	203	166	127	712
	パーセント	4.8	25.6	28.5	23.3	17.8	100.0
(14)学校教育法や大学設置基準等の関連法規を理解している。	度数	27	119	193	182	191	712
	パーセント	3.8	16.7	27.1	25.6	26.8	100.0

(15)高等教育の制度や歴史を理解している。	度数	26	103	176	234	173	712
	パーセント	3.7	14.5	24.7	32.9	24.3	100.0
(16)学内規程を理解している。	度数	57	309	207	99	40	712
	パーセント	8.0	43.4	29.1	13.9	5.6	100.0
(17)障害をもつ学生へ支援のあり方に関心がある。	度数	91	228	232	107	54	712
	パーセント	12.8	32.0	32.6	15.0	7.6	100.0
(18)留学生への支援のあり方に関心がある。	度数	93	187	242	120	70	712
	パーセント	13.1	26.3	34.0	16.9	9.8	100.0
(19)資料収集や調査等の方法を理解している。	度数	71	199	287	93	62	712
	パーセント	10.0	27.9	40.3	13.1	8.7	100.0

Q15：あなたは教育支援・学修支援の専門性を構成する能力として、どのような内容の知識や能力が必要だと思いますか。それぞれあてはまるもの1つを選択してください。(必須)

		必要である	ある程度必要である	どちらともいえない	あまり必要ではない	必要でない	合計
(1)大学教育における現代的課題	度数	293	324	81	11	3	712
	パーセント	41.2	45.5	11.4	1.5	0.4	100.0
(2)高等教育政策の動向	度数	247	355	91	14	5	712
	パーセント	34.7	49.9	12.8	2.0	0.7	100.0
(3)大学で教育研究されている学問領域全体の体系・内容・構造	度数	173	364	146	24	5	712
	パーセント	24.3	51.1	20.5	3.4	0.7	100.0
(4)各専門分野領域の教育課程の特徴や教育改革課題	度数	193	363	134	17	5	712
	パーセント	27.1	51.0	18.8	2.4	0.7	100.0
(5)学生の学習や発達	度数	254	343	101	11	3	712
	パーセント	35.7	48.2	14.2	1.5	0.4	100.0
(6)発達障害や障害学生支援	度数	254	349	91	13	5	712
	パーセント	35.7	49.0	12.8	1.8	0.7	100.0
(7)学生に対する学習上の助言のあり方	度数	230	333	120	22	7	712
	パーセント	32.3	46.8	16.9	3.1	1.0	100.0
(8)様々な教育方法・教育評価	度数	192	382	114	17	7	712
	パーセント	27.0	53.7	16.0	2.4	1.0	100.0
(9)カリキュラム運営・開発	度数	219	335	129	22	7	712
	パーセント	30.8	47.1	18.1	3.1	1.0	100.0
(10)授業改善・教材開発	度数	233	296	146	29	8	712
	パーセント	32.7	41.6	20.5	4.1	1.1	100.0
(11)海外留学・留学生支援のあり方	度数	230	336	121	18	7	712
	パーセント	32.3	47.2	17.0	2.5	1.0	100.0
(12)現代の学生・若者をめぐる状況や課題	度数	238	351	106	12	5	712
	パーセント	33.4	49.3	14.9	1.7	0.7	100.0
(13)接遇等の対人関係スキル	度数	319	313	64	12	4	712
	パーセント	44.8	44.0	9.0	1.7	0.6	100.0
(14)各種資格やその取得に関する情報	度数	177	374	133	17	11	712
	パーセント	24.9	52.5	18.7	2.4	1.5	100.0
(15)学生のキャリア形成や就職支援のあり方	度数	264	341	84	14	9	712
	パーセント	37.1	47.9	11.8	2.0	1.3	100.0

## (オ)「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」の作成

ここまで確認した、1) 文献の系統的抽出・分析、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査、3) 大学職員を対象とするアンケート調査の 3 つの調査の結果をもとに、以下の「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」を作成した。

「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」は、平成 28 年度前半にさまざまな機会をもとに広く意見を求め、その内容を確定するためのたたき台である。そして、平成 28 年度には、「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック」をもとに履修証明プログラムの全体構成を構築する。

---

2016 年 5 月 13 日版

### 教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリックについて（第一次案）

#### 教育・学修支援専門職能力ルーブリックとは何か

大学において教育・学修を支援するために必要となる、①高等教育についての全般的理解、②各専門領域の特性を含めた大学教育の構造的な理解、③学生・学修の理解・実践的方法論、④学生・学修支援の各領域の専門的知識・技能を体系的に示したものである。

大学で教育研究されている各学問領域の全体の体系・内容・構造を理解したうえで、教育課程運営・開発などの教育プログラム改善、新しい教育方法の導入・教材開発などの教育支援、学生の学修への助言や履修指導を含むキャリア形成の支援を行うとともに、教職協働のもとで担当業務を遂行することができる学修・学生支援を効果的に遂行するための能力を示している。

#### 教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリックの作成プロセス

この「教育・学修支援に必要な能力項目」・「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」は、次のような 3 つの調査・分析を踏まえた作成プロセスを経て策定した。3 つの調査とは、(1) 文献の系統的抽出・分析、(2) 現職大学職員を対象とするインタビュー調査、(3) 現職大学職員を対象とするアンケート調査、である。

(1) 文献の系統的抽出・分析では、「CiNii Articles」「国会図書館サーチ」「JAIRO」の 3 つのデータベースを使用し、14 の検索ワードから検出された書籍・論文の文献を抽出した。その結果、951 件の文献による第一次文献リストを作成し、4 名の分析者による重要度の精査を行い、292 件の文献による第二次文献リストを作成した。292 件の文献を対象に分析作業を行い、384 件の能力を抽出した。これら能力を 3 名の分析者で KJ 法を用い分類を行い 35 項目の中項目を整理し、8 項目のドメイン項目を設定した。

(2) 現職大学職員を対象とするインタビュー調査では、6 名の分析者が 2015 年 11 月から 2016 年 2 月にかけて、国私立大学の現職職員 29 名を対象に、1 件 1 時間程度を目安とする半構造化インタビューを行った。調査は対象者の同意を得たうえで録音し、逐語録を作成したうえで、各記録内容から具体的な能力項目を抽出した。能力項目の抽出は 1 記

録に対し、調査者のうち2名が分析者として独立して抽出作業を行い、質的分析としての妥当性を確保したうえで分析をした。29名のインタビューデータは、発言の意味のかたまりごとに、総数7710件のパラグラフに区分され、そのうちコード化可能な能力項目の言及がみられたパラグラフは861件であった。能力項目の抽出は、対象パラグラフから1次ラベルを付与し、その結果をもとに全体調整のうえで抽象化した2次ラベルを付与する2段階で行い、2次ラベルをもとに統一カテゴリを整理する3段階の分析方法を採用した。2次ラベルから抽出された能力項目の総数は、1234件であった。この1234件の能力項目を整理し、58件の能力項目（中項目）を抽出し、更に整理を行い、18項目のドメイン項目を設定した。

(3) 現職大学職員を対象とするアンケート調査では、文献の系統的抽出・分析で抽出された8項目のドメイン項目と35項目の中項目、現職大学職員を対象とするインタビュー調査により抽出された18項目のドメイン項目と58項目の中項目に基づいて、重複等を整理し、47項の大学職員としての仕事に対する行動特性を尋ねる設問を設定した。アンケート調査は、国公立10大学の研究協力のもと、各大学の事務局に調査対象者への案内を依頼する形式で匿名Web調査方式、2016年3月に実施し、712件の回答が得られた。調査結果について、分析対象として設定できた43項目について探索的因子分析を行い、最終的に5因子30項目を採用することとした。

(4) これらの3つの調査結果を整理することを通じて、教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリックを策定した。結果として、7つのドメイン、24の中項目が設定された。これらを教育・学修支援に必要な能力項目として設定し、7つのドメインのうち、基盤的スキルを除く、6つの内容について、その能力の内容を具体的に4段階で記述することで教育・学修支援専門職能力ルーブリックを作成した。

#### 教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリック（第一次案）の位置づけについて

この教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリック（第一次案）は、内容を確定するためのたたき台である。内容を精緻化するために今後広く意見を募り、2016年6月中旬に最終的な試案として広く公表するとともに、履修証明プログラムの作成を進めていく。そのため、文章・文言等を含め内容・構成等にお気づきのさいには、以下にご連絡をいただければ幸いである。

連絡先

千葉大学 アカデミック・リンク・センター

E-mail [alc-info@chiba-u.jp](mailto:alc-info@chiba-u.jp)

# 教育・学修支援に必要な能力項目(第一次案)

	学生・学修支援への関心	担当業務の遂行	大学職員としての共通性
理解する内容	<p><b>①学生・学修・教育支援の内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育内容の把握</li> <li>・支援の設計と実施</li> <li>・学生支援活動のプログラム改善</li> <li>・学生・学生支援の現状理解</li> </ul>	<p><b>② 担当業務の内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の設定と問題解決</li> <li>・情報収集・整理・分析・発信</li> <li>・業務に関する知識</li> <li>・様々な経験とその活用</li> </ul>	<p><b>③大学についての知識</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高等教育・社会・教育に関する知識</li> <li>・所属大学についての理解</li> </ul>
対人関係	<p><b>④学生への対応</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的な学生への対応</li> <li>・困難を抱えた学生への対応</li> </ul>	<p><b>⑤担当業務への取り組み方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担当業務の遂行</li> <li>・チームワーク</li> </ul>	<p><b>⑥人間関係の構築</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人的ネットワーク</li> <li>・教員との連携・協働</li> </ul>
基盤的スキル	<p><b>基盤的スキル</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアアップ・スキルアップの取組</li> <li>・ICTスキル <ul style="list-style-type: none"> <li>・物事を広くみる力</li> <li>・クリティカルシンキング</li> </ul> </li> <li>・語学</li> <li>・説明できる力</li> <li>・文章作成能力</li> <li>・メタ的な能力(社会人としてのコンピテンシー)</li> </ul>		

教育・学修支援専門職 能力カルーブリック（第一次案）

2016年5月13日  
千葉大学 アカデミック・リンク・センター

Domain	Advanced	Applied	Moderate	Basic
<p>① 学生・学修・教育支援の内容 ・教育内容の把握 ・支援内容の設計と実施 ・学生支援活動のプログラム改善 ・学生・学生支援の現状理解</p>	<p>学生の支援ニーズを調査し、学習者のニーズにあわせた学修支援を開発し、効果的に実施することができる。さまざまな教育領域の教育上の最新の改善課題、論点、教育方法を把握し、個別の支援ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。そして、学修支援・教育支援の結果を検証し、評価、改善することができる。</p>	<p>個々の学生に応じた支援内容・方法を選定し、必要な支援を設計・提案することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を理解した上で、学内外の先進的な取組事例を参考に、個別の授業に対して教育支援を具体的に提案することができる。</p>	<p>学修支援に必要な教育領域における最新の改善課題、論点、教育方法を説明することができる。また、学生の多様性を理解し、個々人の学習上の課題を踏まえた支援を説明することができる。</p>	<p>教育支援や学修支援の担当者に必要な法令遵守の意識、倫理観を身に付けている。また、学修支援に必要な教育課程と個々の授業が扱っている教育内容の概要を理解している。</p>
<p>② 担当業務の内容 ・課題の設定と問題解決 ・情報収集・整理・分析・発信 ・業務に関する知識 ・様々な経験とその活用</p>	<p>所属箇所における課題を発見し、改善することや自立的に、課題設定、データ収集・分析、対応策の立案、実施を自律的に実現することができる。担当業務に関連する新たな取組を企画立案し、周囲の協力を得て、実行することができる。</p>	<p>学内外の先進的な取組事例を参考にし、自分の担当業務に関連することができる。また、自分の業務について予見的裏付けや会計上の位置づけを説明することができる。これまでの業務内外の経験を現在の担当業務に活かしており、その関連性を説明することができる。</p>	<p>学内外の最新動向・情報を収集し、担当業務との関連性を説明することができる。また、自分の業務について予見的裏付けや会計上の位置づけを説明することができる。これまでの業務内外の経験を現在の担当業務に活かしており、その関連性を説明することができる。</p>	<p>大学における担当業務を行うために必要な知識を有している。また、学生や教育に関する情報の収集、整理、発信に関する法令や規則、倫理を理解している。</p>
<p>③ 大学についての知識 ・高等教育・社会・教育に関する知識 ・所属大学についての理解</p>	<p>高等教育の現状について批判的に分析・検討し、所属大学における教育のあり方について具体的な改善策を策定し、実践の場で提案することができる。</p>	<p>高等教育を取り巻く社会・経済情勢や政策動向などから、所属大学の教育の現状について批判的に分析・検討し、組織上の構造的な問題を特定し、解決策や改善策を提示することができる。</p>	<p>大学で教育研究されている学問領域全体の体系的な内容、構造についての理解に基づき、所属大学の教育の特徴や個々の施策・規則の意義や課題について説明できる。</p>	<p>国内外の大学に関する歴史や制度、法規、政策、取り巻く環境などについて基本的な理解を示すとともに、その中で所属大学の理念や特色、位置づけを把握している。また、カリキュラム論や発達理論などの教育や学生に関わる一般的な知識を有している。</p>
<p>④ 学生への対応 ・一般的な学生への対応 ・困難を抱えた学生への対応</p>	<p>学生の対応に関わる学内外の利用可能なリソースの現状について批判的に分析・検討を行い、より効果的な支援やケアの体制・あり方を、実現可能性を含めて、企画・設計し、構築するなど、学生の対応について指導的役割を果たすことができる。</p>	<p>学生への対応に関して、国内外の様々な事例を参照・理解し、それらの事例を批判的に検討したうえで、個別の事例に適用して実践に利用することができる。問題解決のために、学内外の利用可能なリソースを活用し、効果的に対応することができる。</p>	<p>アドバイジングやカウンセリング、コーチングに関する技術を活用し、留学生を含む多様な学生への効果的なコミュニケーションのあり方について説明することができる。また、所属大学における保護者との関わり方や医療機関等の学内外の利用可能なリソースの現状について説明することができる。</p>	<p>現代の学生・若者をめぐる状況や課題を理解し、キャリアやハラスメントなど、学生が入学して卒業するまでどのような困難や課題を抱えるかについて理解している。また、問題行動を起こした学生への対応について把握している。発達障害やメンタルヘルスなどに関する困難を抱えた学生の対応や支援、ケアについての知識を有している。</p>
<p>⑤ 担当業務への取り組み方 ・担当業務の遂行 ・チームワーク</p>	<p>学内外の組織横断的な、あるいは困難な担当業務について先を見通した計画を立て、主導的に実行することができる。さらに、協働して業務を行うことの強みを活かして、高い成果を生み出すことができる。</p>	<p>担当業務を遂行するに当たり、率先して取り組むとともに、協働する他者の強みや弱みなどの特徴を理解し、業務への自他のモチベーションを高めるなど、チームを活性化し、業務の効率と効果を高めることができる。</p>	<p>担当業務の意義や大学全体から見た役割を理解しており、職務に対して意欲的に取り組むことができる。チームで業務を進めるに当たり、自分の考えを伝えつつ、他者との合意形成を図り、協働的に業務を推進することができる。</p>	<p>所属大学の方針や業務の流れを把握し、正確に業務を行うため、自分で調べたり、必要に応じて関係者に確認することの重要性を理解している。また業務で困難が生じた場合は、周りに助けを求めることができるなど、チームワークを意図して業務を遂行することができる。</p>
<p>⑥ 人間関係の構築 ・人的ネットワーク ・業務との連携・協働</p>	<p>勉強会・シンポジウム等の参加や情報交換の機会を利用し、学内外に幅広い人的ネットワークを形成している。また、学内外の人的ネットワークを活用し、様々な情報を収集し、所属大学の業務改善・開発に生かすことができる。</p>	<p>学内に人的ネットワークを形成し、必要に応じて、関係する教員や他部署の職員等と連携を図り、調整しながら業務をやり遂げることができる。また、どのような関係者と協働すれば効果的に業務が遂行できるか把握している。</p>	<p>大学教員の仕事や役割についての理解に基づき、業務で関わる教員の特性を把握し、他部署の職員等との連携を含めて、協働する体制を構築するための働き掛けを行うことができる。</p>	<p>担当業務以外の業務や学内の取り組みについて関心を持ち、所属大学内の他部署の職員と関わる機会に積極的に参加するなど、開かれた態度や行動を示す。</p>

## イ) 教育関係共同利用拠点及び履修証明プログラムの運営のための調査

### (ア) 調査の概要

教育関係共同利用拠点として履修証明プログラムを運営するにあたり、大学職員の能力向上のための研修プログラムを実施している他大学・団体等に対し、訪問調査を実施した。各大学・団体の研修プログラムの内容や運営を確認することで、履修証明プログラム構築の参考とするためである。下記の訪問調査先として10件を調査し、実施し、訪問記録を作成した。

#### 訪問先と訪問担当者

日時	訪問先	訪問担当者
平成28年 1月25日	東北大学 高度教養・学生支援機構	前田・堀内・古池・岩井
1月26日	愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室	織田・白川・木下・米田・伊勢
2月4-5日	大学コンソーシアム京都	山中・姉川・米田
2月16日	九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク (Q-Links)	織田・岡田・御手洗・木下・ 中原
2月17日	熊本大学 eラーニング推進機構	藤本・三角・塩田
2月19日	筑波大学 大学研究センター	白川・岡田・多田
2月22日	名古屋大学 大学院教育学発達科学研究科 高度職業人養成コース(博士前期)・ 教育マネジメントコース(博士後期)	織田・南・谷
2月23日	東京大学 大学院教育学研究科大学経営・政策コース	白川・御手洗・岩井
2月24日	桜美林大学 大学院大学アドミニストレーション研究科	岡田・御手洗・谷
2月29日	北海道大学 高等教育推進高等教育研修センター	竹内・堀内・木下・伊東・高木

### (イ) 訪問調査の記録

※熊本大学 eラーニング推進機構の訪問記録については、現在調整中。

#### ①東北大学高度教養教育・学生支援機構

日時：2016年1月25日(月)15時00分～17時15分

調査者：前田、堀内、古池、岩井

調査項目：

- ・東北大学高度教養教育・学生支援機構について
- ・大学教育支援センターの体制について
- ・実施プログラムについて

[キャリア対象別プログラム]

- 大学教員準備プログラム (Preparing Future Faculty Program; PFFP)
- 新任教員プログラム (New Faculty Program; NFP)
- 履修証明プログラム「アカデミック・リーダー育成プログラム」(Leadership for



#### Academic Development Certificate Program; LAD)

- 大学職員能力開発プログラム (Staff Development Program; SDP)
- 専門教育指導力育成プログラム (Discipline-Specific Teaching Program; DTP)

[分野別プログラム]

- 専門性開発プログラム (Professional Development Program; PDP)
- ・ PDP により開講される「PD セミナー」のアンケート結果からみられる効果等について
- ・ プログラムの企画運営について
- ・ 研修の記録、録画配信、出版
  - PDPonline (<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/>)
  - PD ブックレット ([http://www.ihe.tohoku.ac.jp/?page\\_id=700](http://www.ihe.tohoku.ac.jp/?page_id=700))

#### ②愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

日時：2016年1月26日(火) 13時30分～15時30分

調査者：織田，白川，木下，米田，伊勢

調査項目：

- ・ 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD)
- ・ 教育企画室の体制
- ・ SDC (スタッフ・ディベロップメント・コーディネーター：SD 実践的指導者)
- ・ SDC の資格認定基準
- ・ 愛媛大学職員によるスタッフ・ポートフォリオの作成
- ・ SDC 認定者や研修参加者への料金徴収
- ・ 研修内容の検討について (体制，スケジュール，広報)
- ・ 研修の記録，録画配信
- ・ 図書館職員の研修への関わり

#### ③大学コンソーシアム京都

日時：2016年2月5日(金) 13:30～15:30

調査者：山中，姉川，米田

調査項目：

- ・ 運営体制 (意思決定組織・実務組織・人数・運営経費)
- ・ SD 事業実施プログラム
- ・ 委員会体制
- ・ 研修内容等の検討スケジュール
- ・ 事務局の研修運営体制
- ・ 参加者の状況 (参加人数、参加大学名、受講料等)
- ・ 今後の予定・内容の変更計画等

#### ④Q-Links

日時：2016年2月16日（火） 10:00～12:15

調査者：織田、岡田、御手洗、木下、中原

調査項目：

- ・発足の経緯とコンセプト
- ・運営体制
- ・実施内容、特徴
- ・参加者の状況
- ・今後の予定・内容の変更計画等

#### ⑤筑波大学大学研究センター

日時：2016年2月19日（金） 10時00分～12時00分

調査者：白川、岡田、多田

調査項目：

- ・筑波大学大学研究センターの体制
- ・大学研究センターのプログラム実施内容・特徴
- ・プログラム内容の決め方・見直し
- ・大学研究センターの参加者の状況（人数、どのような大学からが多いか、受講料等）
- ・その他関連する事項

#### ⑥名古屋大学大学院教育発達科学研究科 高度専門職業人養成コース（博士前期）、教育マネジメントコース（博士後期）

日時：2016年2月22日（月） 13:30～15:30

調査者：織田、南、谷

調査項目：

- ・運営体制（意思決定・実務・人数・運営経費）
- ・教育内容・特徴・重視している内容
- ・教育内容の見直し等の体制
- ・受講学生の状況（人数、どのような背景の学生が多いか（現職職員、他領域等））
- ・今後の内容の変更計画等
- ・その他関連する事項

#### ⑦東京大学教育学研究科大学経営・政策コース

日時：2016年2月23日（火） 13時～14時30分

調査者：白川、御手洗、岩井

調査項目：

- ・大学経営・政策コース (<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/>)

- ・体制について
- ・学生の属性について
- ・入学動機と修了後の満足度、有用度について
- ・コースの内容、カリキュラムについて
- ・修了生のつながり
- ・その他

#### ⑧桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科

日時：2016年2月24日（水） 13：30～15：30

調査者：岡田、御手洗、谷

調査項目：

- ・運営体制（意思決定・実務・人数・運営経費）
- ・教育内容・特徴・重視している内容
- ・教育内容の見直し等の体制
- ・受講学生の状況（人数、どのような背景の学生が多いか（現職職員、他領域等））
- ・今後の内容の変更計画等
- ・その他関連する事項

#### ⑨北海道大学高等教育推進機構高等教育研修センター

日時：2016年2月29日（月） 10：00～12：00

調査者：竹内、堀内、木下、伊東、高木

調査項目：

- ・運営体制（意思決定組織・実務組織・人数・運営経費）
- ・FD・SD研修について
- ・授業コンサルティングについて
- ・ティーチング・フェロー研修会について
- ・オープンエデュケーションセンターについて
- ・教育関係共同利用拠点としての活動について
- ・今後の展望について

## 参考 海外での事例

### ◆カンサス州立大学

アカデミック・アドバイジング証明プログラム (15 単位)

オンラインの授業で、1つのコースが3単位で授業料は\$1,588.50である。

EDCEP 829 - Learning Principles Credits: (3)

EDCEP 835 - Foundations of Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 838 - Student Development Theory Credits: (3)

EDCEP 851 - Multicultural Aspects of Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 863 - Trends in Career Development Credits: (3)

アカデミック・アドバイジング大学院課程 (30 単位)

オンラインの授業

Core requirements (27 credit hours)

EDCEP 816 - Research Methods in Education Credits: (3)

EDCEP 829 - Learning Principles Credits: (3)

EDCEP 835 - Foundations of Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 836 - Interpersonal Relations for Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 838 - Student Development Theory Credits: (3)

EDCEP 851 - Multicultural Aspects of Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 854 - College Student Athletes Credits: (3)

EDCEP 863 - Trends in Career Development Credits: (3)

EDSP 853 - College Students with Special Needs Credits: (3)

Restricted Elective (3 hours)

EDCEP 837 - Administration of Academic Advising Credits: (3)

EDCEP 864 - Current Issues in Intercollegiate Athletics Credits: (3)

### ◆アンジェロ州立大学

アカデミック・アドバイジング証明プログラム (15 単位)

EDG 6301 Social and Cultural Influences 3

EDG 6324 Career and Occupational Counseling 3

EDG 6362 College Student Development 3

EDG 6366 Student Affairs and Administrative Services 3

EDG 6367 Foundations of Academic Advising 3

サムヒューストン州立大学

15 単位の授業料は Texas Resident は\$4,668.50、Non-Resident は\$10,518.50

Graduate Certificate in Academic Advising

HIED 5370 Career Advising in HI ED

HIED 5367 Diverse Student Populations

HIED 6360 Student Services in HI ED  
HIED 5390 Concepts in Academic Advising  
HIED 6372 Practicum

Master of Arts (M.A.) in Higher Education Administration

HIED 5360 History and Organization of Higher Education 3  
HIED 5361 Contemporary Issues in Higher Education 3  
HIED 5362 Higher Education Resource Management 3  
HIED 5366 Assessment in Higher Education 3  
HIED 5364 Leadership in Higher Education 3  
HIED 5379 Research in Higher Education 3  
HIED 6372 Practicum in Instructional Leadership 3  
HIED 6360 Student Services in Higher Education 3  
HIED 5367 Diverse Student Populations 3  
HIED 5365 Academic Affairs in Higher Education 3

◆セネカ・カレッジ (カナダ)

Student Affairs and Services

このうち、SAS140、 SAS150 がオンライン実施されており、各コース\$354.20 である。

SAS110 Student Development and Student Experience  
SAS120 Function and Organization in Student Affairs  
SAS130 Learning and the Student Learner  
SAS140 Advising and Supporting Students  
SAS150 Administration and Management in Student Affairs

## ウ) ALPS シンポジウム／ALPS セミナーの実施

### (ア) ALPS シンポジウム

拠点事業のキックオフ事業として、平成 27 年 12 月 7 日（月）に「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点・ALPS プログラムキックオフシンポジウム 教育・学修支援専門職の確立に向けて」として、ALPS シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、学外有識者 2 名の講演とパネルディスカッションを行った。

講演は、本拠点事業の運営委員会委員でもある篠田道夫 桜美林大学教授(日本福祉大学学園参与)に「大学職員の専門的力量的の向上と教学運営参画：中教審・大学教育部会での議論も踏まえて」として講演を依頼し、また、先行する教育関係共同利用拠点を運営する羽田貴東北大学高度教養教育・学生支援機構 副機構長より、「教育活動の組織化と分業教育・学修支援専門職の可能性」として依頼した。

当日は、学内外（学内 7 部署、学外 67 大学・機関）から 110 名の参加者があった。

---

## 第 1 回 ALPS プログラム キックオフシンポジウム

### 「教育・学修支援専門職の確立に向けて」

日時：平成 27 年 11 月 19 日（木）14：30～16：30

プログラム・登壇者：

1. 挨拶：徳久剛史 千葉大学長
2. 挨拶：文部科学省
3. 趣旨説明：竹内比呂也センター長
4. 講演：篠田道夫先生（桜美林大学教授，日本福祉大学学園参与）  
「大学職員の専門的力量的の向上と教学運営参画—中教審・大学教育部会での議論も踏まえて」
5. 講演：羽田貴史先生（東北大学高度教養教育・学生支援機構 副機構長）  
「教育活動の組織化と分業教育・学修支援専門職の可能性」
6. パネルディスカッション

参加者数：

		所属機関数	人数
学内		7	13
他大学		63	91
	国立	12	20
	公立		
	私立	51	71
大学以外の機関		4	6
	大学共同利用機関法人		
	民間・独立行政法人等	4	6
	外国の研究機関		
計		74	110

### (イ) ALPS セミナー

拠点事業の一環として、平成 27 年 11 月より ALPS セミナーを実施することとし、平成 27 年度中に 3 回のセミナーを実施した。ALPS セミナーは、教育・学修支援に関する最新動向や特徴的な実践事例を紹介することで、教育・学修支援の実践を向上させるものである。各回の概要は以下のとおりである。

#### 第 1 回 「大学の新しい学修支援：ICU におけるアカデミックプランニング・センターの事例から」

日時：平成 27 年 11 月 19 日（木）14：30～16：30

プログラム・登壇者：

1. 講演：小林潤司氏  
(国際基督教大学 上級准教授、アカデミックプランニング・センター長)  
『明日の大学』における自発的学修者育成の取り組み
2. 講演：大枝さやか氏(国際基督教大学教務部アカデミックプランニング・センター)  
「職員が主導するアカデミックプランニング・センター」
3. 質疑応答

参加者数：

		所属機関数	人数
学内		6	18
他大学		23	25
	国立	4	4
	公立	1	1
	私立	18	20
大学以外の機関		2	2
	大学共同利用機関法人		
	民間・独立行政法人等	2	2
	外国の研究機関		
計		31	45

#### 第 2 回 「障害者差別解消法と学修支援」

日時：平成 28 年 2 月 19 日（金）14：00～16：00

プログラム・登壇者：

1. 講演：常世田良氏（立命館大学教授）  
「37 条ガイドラインと大学のスタンス」
2. 事例報告 1：三谷恭弘氏（立命館大学図書館サービス課課長補佐）  
「立命館大学図書館における障害者への対応」
3. 事例報告 2：堀内靖雄（千葉大学准教授）  
「千葉大学ノートテイク会の活動について」
4. 質疑応答・意見交換

※当日は手話通訳のほか、千葉大学ノートテイク会のご協力をいただき、講演や質疑の内容を逐次スクリーン上に表示するという情報保障が行われました。

参加者数：

		所属機関数	人数
学内		8	14
他大学		29	33
	国立	5	5
	公立	1	1
	私立	23	27
大学以外の機関		4	5
	大学共同利用機関法人		
	民間・独立行政法人等	4	5
	外国の研究機関		
計		41	52

### 第3回 「法学におけるアクティブラーニングとカリキュラム改革」

日時：平成28年3月8日（火）14：30～16：30

プログラム・登壇者：

1. 講演：中川孝博氏（國學院大学法学部教授）

「國學院大学法学部のこれまでの取り組み：法学部教育改革に向けた提言と刑事訴訟法分野でのスモールステップカリキュラム」

2. 講演：高橋信行氏（國學院大学法学部教授）

「國學院大学法学部の現在のFDの取り組み：入門科目の導入を中心としたカリキュラム改革」

3. 質疑応答

※千葉大学法政経学部，千葉大学法学会との共催。

参加者数：

		所属機関数	人数
学内		7	15
他大学		5	6
	国立	1	1
	公立		
	私立	4	5
大学以外の機関		2	2
	大学共同利用機関法人		
	民間・独立行政法人等	2	2
	外国の研究機関		
計		14	23



### (3) 刊行物・広報活動

#### ア. ブックレットの刊行

拠点事業の成果を広く、社会及び他大学に提供することを目的に、「ALPS ブックレット シリーズ」を刊行することとした。平成 27 年度には、12 月 7 日に実施したキックオフシンポジウムの議論を「ALPS ブックレットシリーズ Vol.1 教育・学修支援専門職の確立に向けて」として刊行した。

このブックレットは、全国国公立大学 779 大学に配布し、教育・学修支援専門職養成の必要性和重要性を広く広報した。

#### イ. 「大学教職員の能力開発に関する懇談会」への参加

教育関係共同利用拠点をはじめ、大学の教職員の能力向上のための取組を行っている諸機関に対して、東北大学 高度教養教育・学生支援機構が呼びかけ主体となり、「大学教職員の能力開発に関する懇談会」が開催されている。

アカデミック・リンク・センターに対しても、拠点認定後、同懇談会への参加要請があり、平成 27 年度中に第 1 回（平成 27 年 10 月 19 日）、第 2 回（平成 28 年 2 月 16 日）の 2 回の懇談会に参加した。同懇談会は、各拠点事業等の活動の情報交換とともに、実務レベルでの交流を進めることで、研修プログラムの相互活用を進めることを目指している。本センターでは、他拠点・他団体の取組を参照することで、取組内容の質的向上を図るために、同懇談会へ継続的に参加することとしている。

#### ウ. その他広報活動

拠点事業の活動や成果を広く社会に公表し、また、他大学に教育・学修支援専門職養成の必要性和重要性を伝えるために広報活動にも取り組んでいる。「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」(ALPS プログラム) の独自のウェブサイトを作成し、情報発信を行うとともに、各種報道媒体での広報に努めている。平成 27 年度中に、ALPS プログラムについて言及された報道媒体は以下の通りである。

No.	掲載誌	掲載日付・掲載号	編集・発行等	内容(タイトル)	備考
1	千葉大学 HP	2015.8.19	千葉大学	(ニュースリリース)アカデミック・リンク・センターが教育関係共同利用拠点に認定されました	
1	教育学術新聞	2015.11.25	日本私立大学協会	教育・学修支援専門職シンポ 12/7 千葉大	
2	文教速報	2016.1.18	(株)官庁通信社	千葉大学が ALPS プログラム キックオフシンポ	
3	文教ニュース	2016.1.4・11	(株)文教ニュース社	千葉大学「ALPS プログラム キックオフシンポジウム」	
4	コクヨ教育 WEB	2016.2.1	KOKUYO	多様な学びをシームレスにつなぐラーニングコミュニティ ～「千葉大学附属図書館」事例レポート～	<a href="http://www.kokuyo-furniture.co.jp/manabi/topics/post_4.html">http://www.kokuyo-furniture.co.jp/manabi/topics/post_4.html</a>
5	育英ニュース	2016.1	電通育英会	編集部インタビュー「図書館は大学の学習支援の中心に : 主体的学びのサポーターへの変化が求められる大学図書館員」	<a href="http://www.dentsu-ikeikai.or.jp/common/degitalbook/vol73/#page=9">http://www.dentsu-ikeikai.or.jp/common/degitalbook/vol73/#page=9</a>

### 3. 平成 27 年度の活動の総括と次年度の計画

#### (1) 平成 27 年度の総括

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成 27 年 7 月 30 日に教育関係共同利用拠点として認定を受け、以降 8 か月間の活動を行ってきた。この間、拠点事業を推進するために、アカデミック・リンク・センターの組織を一部改組し、教育・学修支援専門職養成部門を設置するとともに、担当教職員を公募、学内兼務教員を増員するなど、組織体制の強化を図った。事業運営のためには、外部有識者が委員の過半数を超える運営委員会を設置するとともに、企画ワーキンググループ、調査実務ワーキンググループを運営することで各種事業を推進してきた。

また、具体的活動としては、教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック作成のために、1) 文献の系統的抽出・分析、2) 大学職員を対象とするインタビュー調査、3) 大学職員を対象とするアンケート調査の 3 つの調査を実施し、「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック（第一次案）」を作成した。また、訪問調査を実施し、大学職員の能力開発プログラムや履修証明プログラムの運営について他大学の先行事例を学び、今後の参考知見を収集した。

さらに、シンポジウム・セミナーを 4 回実施し、延べ参加者数は 160 機関から、210 名の参加者がみられた。各大学には、「ALPS ブックレットシリーズ Vol.1 教育・学修支援専門職の確立に向けて」を配布するなど、積極的な広報に努めた。

これらの状況から、平成 27 年度の拠点事業の進捗状況は、計画通り順調に進んでおり、事業目的の達成が見込まれると考えられる。

#### (2) 平成 28 年度の計画

平成 28 年度は、平成 27 年度の成果を前提に、「教育・学修支援専門職の能力項目・能力ルーブリック」を確定し、それに基づいて履修証明プログラムの全体構成を構築するとともに、その一部を試行的に実施することを中心的に取り組む。平成 29 年度からの履修証明プログラムの本格実施に向けた準備を進める。

平成 28 年度計画は、別添の通りである。

教育関係共同利用拠点 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム 平成 27 年度 事業報告書

平成 27 年 6 月

編集発行：千葉大学アカデミック・リンク・センター

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

Tel:043-290-2243 Fax:043-290-2255

<http://alc.chiba-u.jp>

<http://alc.chiba-u.jp/ALPS/index.html>

教育関係共同利用拠点 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム  
平成 27 年度 事業報告書 資料編



アカデミック・リンク  
教育・学修支援専門職養成プログラム

ACADEMIC LINK PROFESSIONAL STAFF  
DEVELOPMENT PROGRAM  
for EDUCATIONAL and LEARNING SUPPORT

## 目次

○ 教育関係共同利用拠点申請書	1
○ 教育関係共同利用拠点の認定について（通知）	12
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育・学修支援専門職養成部門 運営委員会名簿	13
○ 平成27年度第1回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育・学修 支援専門職養成部門運営委員会議事録	14
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点企画ワー キンググループ名簿	17
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点企画ワー キンググループ議事要旨（第1回～第3回）	18
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点調査実務 グループ名簿	26
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点調査実務 グループ打合せ議事要旨（第1回～第8回）	27
○ 教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査 調査票	45
○ 千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点ALPS プログラムキックオフシンポジウム「教育・学修支援専門職の確立に向け て（2015年12月7日）参加者アンケート	51
○ 千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPSセミナー「大学の新しい 学修支援：ICUにおけるアカデミックプランニング・センターの事例 から」（2015年11月19日）参加者アンケート	59

- 千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPSセミナー「障害者差別  
解消法と学修支援」(2016年2月19日)参加者アンケート …………… 62
  
- 千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPSセミナー「法学におけ  
るアクティブラーニングとカリキュラム改革」(2016年3月8日)参加者  
アンケート …………… 66
  
- 教育関係共同利用拠点 平成28年度実施計画書 …………… 69

## 教育関係共同利用拠点 申請書

大 学 名	千葉大学			
申 請 者	学 長 名	徳久 剛史		
	本部所在地	〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33		
拠 点 の 名 称	教育・学修支援専門職を養成する実践的SD プログラムの開発・運営拠点			
申 請 施 設 の 名 称	千葉大学 アカデミック・リンク・センター			
申 請 施 設 の 種 類	1. 留学生支援施設 ② 大学の教職員の組織的な研修等の実施機関 3. 練習船 4. 演習林等 5. 農場 6. 臨海・臨湖実験所に関する実習施設 7. 水産実験所に関する実習施設 ※該当する申請に○を付けて下さい			
申 請 組 織 の 代 表 者 (申請施設の運営について権限を有する者)	フリガナ	タケウチ ヒロヤ	所属部署	文学部
	氏 名	竹内 比呂也		
	役 職 名	副学長(学修支援)、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、文学部教授		
	所 在 地	〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33		
	T E L	043-290-2240	F A X	043-290-2255
	E - m a i l	*****		
1. 教育関係共同利用拠点の全体概要(告示第二条第一号及び第三条第一号関係)				
(1) 共同利用拠点としての認定を受ける趣旨及び必要性				
1) 申請施設の目的・役割・必要性				
①千葉大学アカデミック・リンク・センターの目的とこれまでの役割				
<p>アカデミック・リンク・センターは、千葉大学において「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するために提示した教育・学習のための新しいコンセプト、「アカデミック・リンク」を実現するために、2011年4月に、附属図書館、総合メディア基盤センター(当時、現・統合情報センター)、普遍教育センターが協力して創設した学内共同利用機関である。アカデミック・リンクは、知識基盤社会を生き抜く力を持つ「考える学生の創造」を目的として掲げ、「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つの機能により「コンテンツと学習の近接による能動的学習の促進」を実現するために、千葉大学において教育・学修支援の研究開発と具体的実践を積み重ねてきた。その取り組みは、千葉大学における教育・学修の充実だけでなく、新しいタイプのラーニングコモンズとしての学習空間の整備、学修支援活動としての機能、デジタル教材を中心とした教材開発、学修支援の研究開発などを中心に、我が国の大学の先駆的取組みとして、国の政策文書(中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)資料編」(2012年8月))に取り上げられるとともに、新聞報道をはじめとする各種メディアなどでその取組内容が紹介されることを通じて、我が国の大学における教育・学修支援のひとつのモデルを提示してきた。</p>				

## ②「大学教育の質的転換」を支える専門人材である教育・学修支援専門職の安定的・体系的育成の必要性

現在、日本の大学教育においては、学生の能動的学習の推進、学習時間の増加などを通じた「大学教育の質的転換」の必要性が指摘されており（中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012年8月））、各大学においてその具体的な取り組みが求められている。そして、このような大学教育の質的転換を進めるために、これまでの大学教員、大学職員の区分を超えた、新たな専門職（中間的専門職）の必要性が指摘されている。さらに現在、高大接続システム改革として、高校から大学への移行プロセスの再構築が進められる中で、大学に対しては、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの3つのポリシーに基づく体系的な教育課程の構築・充実が求められており、そのことを推進していく新たな高度専門職の育成・制度化の必要性が指摘されている（文部科学省 高大接続システム改革会議「配布資料」平成27年4月23日）。このような高度専門職をどのように設定するか、また、大学職員の組織的研修（Staff Development）をどのように充実させていくかは、我が国の大学教育の質的転換のために喫緊の政策課題となっている（中央教育審議会 大学分科会 大学教育部会「配布資料」平成27年6月8日）。

大学職員の能力向上に関しては、これまで、大学職員の能力の高度化のための教育プログラムは、大学院や履修証明プログラムとして実施されてきた。具体的には、専門性に特化せず大学職員の全体的な能力の高度化を目指す教育課程（東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース、名古屋大学大学院発達科学研究科教育科学専攻）や、専門性に特化するものとしてIRや大学マネジメント、大学アドミニストレーターの養成（九州大学IR人材育成に関する大学院共通科目、筑波大学大学研究センター「大学マネジメント人材養成プログラム」、桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科）などが挙げられる。しかし、大学政策や大学教育改革の実践の現場において求められている教育・学修を支援する新たな専門職については、必要となる能力やそのキャリア形成は必ずしも明確ではなく、また、現時点では、その育成・養成についても具体的な養成課程が存在するわけではない。しかし、日本の大学教育の高度化のために、教育・学修支援に高度な専門性を有し、「高度な実践力」と「体系された関連知見」と「新しい教育の開発・企画力」を有する新たな教育・学修支援専門職の養成は急務である。この新たな高度専門職が、大学教育の質的転換を支える専門人材となるためである。このことに関して、千葉大学では、2014年度より、大学独自の取組として、学生の学修を支援する教員と職員の間位置する専門職として、ULA（University Learning Administrator）、SULA（Super University Learning Administrator）の新たな専門職の創設を提起してきた。ULA、SULAは、現在求められている「大学教育の質的転換」を推進する新たな教育・学修支援専門職の千葉大学としての位置づけである。

千葉大学では、このような教育・学修支援専門職に関する先駆的取組を進めてきたことを踏まえ、現在、大学院人文社会科学研究科において高等教育研究や大学教育研究の専門領域とともに修士課程プログラムとして整備する計画を構想中であり、その実践的部分を、これまで千葉大学の中で教育・学修支援を具体化してきたアカデミック・リンク・センターにおいて体系化することを進めている。アカデミック・リンク・センターにおいて、教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムを履修証明プログラムとして開発・運営・実施する構想である。

## ③千葉大学におけるアカデミック・リンク・センターを中心とした教育・学修支援専門職の育成の貢献

千葉大学では、これまで、アカデミック・リンク・センターや高等教育研究機構等を中心に、全学的な学修支援や教育改革を実現してきた。その取り組みは、体系的な学習支援・学習相談の企画・運営、能動的学習（アクティブ・ラーニング）の推進、教材の著作権処理・管理、LMS（Learning Management System）の運営・活用、科目番号制（コースナンバリングシステム）の導入、授業ニーズに対応したデジタル教材の開発、学生の学修時間の確保・増加のための学習空間の整備、学修成果の可視化のための各種調査、教育のIRによる教育改善、柔軟な学事暦の導入（6ターム制の導入）、学修支援への学生参加（ピアサポート）、教育のグローバル化の促進などである。また、各学部や専門領域では、JABEE認定、専門法務研究科の認証評価や医学部における分野別評価（医学教育分野別評価基準日本版（世界医学教育連盟（WFME）グローバルスタンダード2012年版準拠）に基づく外部評価）の受審、など、各分野の教育・学修の充実に必要な取り組みを進めている。



このような千葉大学の大学教育改革の取組は、教育・学修支援専門職の育成教材として活用・提供することができる。すなわち、アカデミック・リンク・センターが中心として運営する体系的なSDプログラムのなかで、大規模総合大学における全学的教育改革の実践・具体化を教材に実務的に学ぶことができるのである。また、このことは、大規模総合大学の事例を、参加職員が自らの本務先大学で進行している教育改革課題を多角的に比較検証することなどを通じて、参加職員が自らの勤務大学の教育改善に具体的につなげることにも活用できる。このように大規模総合大学における具体的な大学教育改革の実践に基づきつつ、教育・学修支援専門職の育成プログラムを新たに構築し、実施できる組織は、千葉大学アカデミック・リンク・センターをおいて他にない。

したがって、本事業は、アカデミック・リンク・センターが中心となり、新たな専門人材である教育・学修支援専門職の養成のための研究開発に取組み、体系的SDプログラム実施運営を行うとともに、千葉大学全体を教育・学修支援専門職としての研修の場として活用し、教育関係共同利用機関として日本の大学職員の能力向上に役立てることで、日本の大学教育全体の向上に貢献していくものである。

## 2) 認定後の実施内容・施設の利用計画

### ①教育・学修支援専門職に必要な能力ルーブリックの開発と段階的研修プログラムの構築

現在、政策的・実践的観点から大学職員の専門性の向上が求められている。本事業では、このような政策的・実践的要請を背景に、これまでOJTを中心に職務能力が形成されてきた学務・教務担当の大学職員の役割を、「教育・学修支援専門職」として高度化するにあたって必要な能力を、段階を踏まえて体系化・可視化する。また、国立大学では図書系職員として採用され、学務・教務担当とは区分されていた図書系職員について、図書館職員の枠をこえて、教育・学修支援専門職として複合的な専門性を持ち、学生の学修支援にもその能力を発揮するために必要な能力を体系化・可視化する。これらの新しい「教育・学修支援専門職」として必要な能力項目を、「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」として体系的に開発する。この「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」は、専門職としての求められる標準的スキルを項目化し、その能力項目ごとに最低限、共通して求められるスキル標準と、教育・学修支援の実務能力として、教育課程運営・開発、教育支援・教材開発、学修支援・学生支援、留学支援・協定校との交渉など、細分化された専門領域ごとに、その実践的専門性を発展的に高度化させていくにあたって求められる領域特化型発展的・高度化スキルを段階的・体系的に示す内容で構成される。

このような「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」の具体的内容は、①高等教育についての全般的理解（大学教育における現代的課題の理解、高等教育政策の動向・経過、大学教育の将来動向など）、②各専門領域の特性を含めた大学教育の構造的・体系的な理解（大学で教育研究されている学問領域の全体の体系・内容・構造の理解、各専門分野領域の教育課程の特徴や教育改革課題の理解など）、③学生・学修の理解・実践的方法論（学生理解、障がい学生支援、アカデミックアドバイスのあり方、学習の認知的理解、支援者としての在り方・コーチング、IR・評価による教育改善、LMS等のシステム運営など）、④領域特化型発展的・高度化スキル（教育課程運営・開発、教育支援・教材開発、学修支援・学生支援、留学支援・協定校との交渉など）などが想定される。これらの能力項目を、教育・学修支援専門職としてのキャリア形成と高度化に必要な学習内容として、段階的に習得できる能力指標と項目によって構造化・体系化することで、各能力項目の具体的内容を段階化し、教育・学修支援専門職の専門職として求められるスキルや能力を可視化する。

この「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づいて、教育・学修支援専門職の教育研修プログラムを開発し、それを実施・普及することで、日本の大学職員の「教育・学修支援専門職」への転換を図り、大学教育の質的転換を促進していく。具体的には、「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づく、公開セミナー・研修会を開催し、「教育・学修支援専門職」としての専門性を広く普及していく。

### ②教育・学修支援専門職を養成する実践的SD教育プログラム（履修証明プログラム）の運営

「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づいて、「教育・学修支援専門職」を養成するために、履修証明書を発行する実践的内容による体系的なSD研修プログラムを開発、実施する。

この研修プログラムの想定対象者は、全国の国公立大学の若手から中堅の職員・係長級（20代後半～40代前頃）である。また、これから大学職員になろうとする者や、大学教員をめざす若手研究者の参加も排除しない。教育・学修支援の専門的能力を有することは、教育研究職としてのプレFDとしての位置づくもの

であるためである（ただし、あくまでも本事業は実践的SD教育プログラムと位置付ける）。

この研修プログラムは、各参加者が本務大学に勤めながら受講する集中講義方式によるSDプログラムとして開発する（イメージとして、図書館司書の養成のために行われている夏季の司書講習もしくは、大学図書館職員長期研修を類似した取組として挙げるができる。ただし、教育・学修支援をその内容とすることから、これらの既存講習より長期にわたることを想定している）。このことが実現できるように、講義のオンライン受講を可能とする仕組みを整える。

この実践的SD教育プログラムは、アカデミック・リンク・センターや高等教育研究機構を中心とする千葉大学の学修支援や教育改革の経験を具体的事例として用い、また、国内外の諸大学の教育改革の状況をケーススタディとして学ぶとともに、参加者が自らの所属大学の教育上の課題や他の参加者の所属大学の状況を比較検討、融合しながら事例分析を行うことを通じて、教育・学修支援専門職として必要な経験と知識を、具体的実践のなかから修得していく。そのため、研修内容は、講演型SDや理論学習が中心となるのではなく、参加者が有する実務課題を基にした比較研究、具体的な現実の授業のなかでの能動的学修の支援・実現、具体的な授業で利用する教材開発など、教育・学修支援専門職としての多様な実践的経験をj得ることができるとして構築する。参加者にとって、インターンシップ的な機能を持つ研修プログラムとして開発する。

アカデミック・リンク・センターでは、これまで大日本印刷株式会社、丸善株式会社、コクヨ株式会社等の民間事業者、一般社団法人学術著作権協会との協力関係の中で新たな学修環境や教材開発に取り組んでおり、また、大学学習資源コンソーシアム（CLR）における中心的な役割を果たしている。これらの学外機関との協力経験や関係をこのプログラム構築に活用することで、このような実践的な研修内容を具体化することが可能であり、その基盤をすでに有している。

この実践的SD教育プログラムは、履修証明書を発行する単位制による体系的な教育プログラムとして構築する。そして、実践的SD教育プログラムは、現在、千葉大学が進めている大学院人文社会科学部研究科の改組計画において新たに設置を構想しているコースの教育課程の一部として位置づける。この実践的SD教育プログラムが新しい大学院教育の実践的教育部分を担当することで、実践的な教育課程としての内容を持つこととなる。（したがって、このSDプログラムのみの場合は履修証明書を交付し、あわせて大学院人文社会科学部研究科において所定単位を修得することで「修士学位」を得ることが可能となる。）

### ③教育・学修支援実務の全国拠点としての情報発信と教育・学修支援専門職によるネットワーク形成の推進

このような「教育・学修支援専門職」を体系的に養成することによって、国公私立の設置形態をこえた、教育・学修支援専門職のネットワークの全国拠点の形成を積極的に推進していく。専門職が成立するためには、職能団体・ネットワークの形成が不可欠であるためである。アカデミック・リンク・センターは、教育・学修支援専門職のネットワーク拠点として、ポータルサイト機能を構築・提供し、本プログラムの修了生が各大学で教育改革を推進していくことを継続的に支援するとともに、大学教育改革事例や関連する情報発信を推進することで広く大学教育改革・成功事例の共有化や浸透を進めることを通じて、我が国の大学教育全体の質的向上に貢献していく。

そして、拠点形成支援期間のなかで本プログラムの修了生を中心とする「教育・学修支援専門職」の専門職能団体の形成を促進し、その母体的全国拠点として、専門職能団体が行う年次大会や研究会、課題報告会などを実施に協力することで、専門職としての自律的・継続的な資質向上を支援していく。また、修了生が本事業で取り組む研究会や実践的SD教育プログラムにおいて講師役として後進を指導することや、自らの大学で大学教育の質的向上のための諸活動を実践していくなかでの諸課題の克服を支援することなどを通じて、これまで個々の大学の取組に断片化されていた大学教育改革や質的向上を、我が国の高等教育の共有財産として位置づけ、大学教育改革の好循環が生まれる体制を構築する。教育・学修支援専門職の諸活動について具体的取組の事例集や事例普及の活動を通じて、大学教育の質的転換を、大学教育の現場から推進していく。

### 3) 見込まれる教育効果

本事業によって、大学職員の教育・学修支援専門職への専門職化を図ることで、大学教育に対して、次のような教育効果をもたらすことができる。

①大学職員の役割を教育・学修支援専門職としての専門性を高度化するとともに、その成長段階を体系化し具体的な養成プログラムを実施することは、大学職員の新しいキャリアモデルを示す意味がある。このことは、大学職員の能力と意欲の向上につながる。

②「高度な実践力」と「体系された関連知見」と「新しい教育の開発・企画力」を有する教育・学修支援専門職によって、学生への学習支援が充実することで、大学教育と大学生の学習成果の質的向上を図ることができる。このことにより、大学教育の質的転換を推し進めていく。

③教育・学修支援専門職による教育支援により、教職協力の一層の進展を図ることができる。教育・学修に専門的知見を有する教育・学修支援専門職による教育支援が、各専門領域の教育研究という専門特化した大学教員の既存の教育活動に対して、他領域の教育手法や学修支援、新しい教材開発の動向などの知識と経験を通じて支援・協力することで、大学教育の質的向上を図ることができる。幅広い大学教育実践の専門的知見を有する新たな専門職の創設は、我が国の教職協力を新たな段階に引き上げることを意味し、大学教育への教育効果が見込まれる。

#### 4) 大学間連携への貢献等

本事業は、国公立大学の設置主体の枠をこえた、大学における教育・学修支援専門職を養成するものである。実践的 SD 研修プログラムを通じて、教育・学修支援専門職による専門職ネットワークを形成し、大学職員が個人としてつながりを構築するだけでなく、千葉大学を拠点として大学間連携につなげることも想定している。このような教育・学修支援の実務専門職のネットワークは、我が国の大学教育の実務を推進していく基盤的な大学間連携組織となる。

また、アカデミック・リンク・センターが、これまで培ってきた大日本印刷株式会社、丸善株式会社、コクヨ株式会社等、民間事業者との協力関係や、一般社団法人学術著作権協会との協力関係、大学学習資源コンソーシアム（CLR）の既存の大学間連携を、この事業のなかで活用していくことで、大学間のみでなく関連する民間事業者との連携も含めた、大学教育の質的向上の基盤的連携体を構築していく。また、この取り組みにより開発する「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」を、教育・学修支援専門職に求められる標準スキルとして提示し、政策課題に対して具体案を提案するとともに、研修会等の活動を通じて、広くその活用を促すことにより、それを通じて我が国の高等教育における質の向上に貢献することも大学間連携への貢献となる。

#### 5) 成果指標

教育・学修支援専門職の養成を目的とする本事業の成果指標として以下の項目を設定する。

##### ①「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づく研修会開催数

・本事業で開発する「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づいて、その普及を図る為に、研修会を実施する。参加者の便宜を図るために、国立大学協会等の既存団体と協力し、普及を図る。したがって、この研修会開催数が成果指標となる。

##### ②実践的 SD 教育プログラムの参加者数と参加者の所属大学の多様性

・「教育・学修支援専門職能力ルーブリック」に基づく、実践的 SD 教育プログラム（履修証明プログラム）への参加者数が成果指標となる。  
・また、実践的 SD 教育プログラムに多様な大学職員が参加し、各大学の教育課題を共有・分析することもひとつの指標となる。したがって、参加者の所属大学の多様性も指標となる。

##### ③国内外の大学における大学教育改革の取組事例の収集数とその情報発信状況

・本事業として実施する研修会や実践的 SD 教育プログラムでは、参加者からそれぞれの大学の大学教育の改革、学修支援や学習成果向上のための取り組み事例を収集する。また、全国拠点としての活動として、国内外の大学教育改革の取組事例を収集・整理し、その状況を参照事例として情報発信していく。これらの改革事例の収集数と情報発信状況は、大学教育の様々な改革を可視化するとともに、教育・学修支援専門職の活動の充実に活用するために参照することができるものである。したがって、これらの改革事例の収集数も成果指標となる。

#### ④実践的SD教育プログラムの修了者・参加者の諸活動による大学教育改革の波及効果

- ・本事業の中核をなす実践的SD教育プログラムの修了者・参加者が、この履修証明プログラムを受けた後、教育・学修支援専門職として、自らの所属機関で大学教育の改革や教育開発に取り組んでいる状況や、各種の職員研修会等でその成果を報告するなど、各大学で指導的役割を果たしていく状況も本事業の成果指標となる。本事業の修了生は、所属大学の大学教育の質的向上を推進するとともに、職員の能力向上のための中心的・指導的役割が期待されるためである。
- ・また、本事業により履修証明を得た新しい教育・学修支援専門職が、新しい専門職として職能団体を組織し、年次大会や研究会、課題報告会を開催すること、また、その開催状況も本事業の成果指標となる。本事業によって創設される新しい専門職「教育・学修支援専門職」が、実践の現場から大学教育改革を推進していくことは、本事業の波及効果として位置付けることができるためである。

## 2. 申請施設の概要（告示第二条第二号及び第三条第二号、第三号関係）

### （1）これまでのアカデミック・リンク・センターの利用実績

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、2011年4月に学内共同利用機関として設置されて以降、「アカデミック・リンク・セミナー」として大学教職員を主な対象としたセミナー（研修会）を開催してきた。その開催回数は、2011年度以降、4年間で25回にわたっている。このセミナーの参加者を千葉大学の学内者/学外者で整理すると、次のような参加状況になる。総参加者1188名のうち、学外者の参加が4分の3を占めており、学外者から非常に高い注目を集めていたことがわかる。

#### アカデミック・リンク・セミナーの参加状況（学内者・学外者別）

- ・2011年度（9回開催）参加者 学内者：200名、学外者391名
- ・2012年度（5回開催）参加者 学内者：41名、学外者220名
- ・2013年度（5回開催）参加者 学内者：24名、学外者188名
- ・2014年度（5回開催）参加者 学内者：32名、学外者92名

また、千葉大学の学修支援の取り組みが、学外者から注目を集めていることはアカデミック・リンク・センター及び附属図書館の見学者の動向にも表れている。2012年3月に、附属図書館の改修工事が終了したのち、新しい学習空間と学修支援を実施してから、毎年1000人規模の学外からの見学者を受け入れてきた（2012年度100件1024人、2013年度110件977人、2014年度93件、1096人（高校生のぞく））。

本事業は、このように、これまで対外的に注目を集めてきたアカデミック・リンク・センターの主催するセミナーの蓄積や施設環境の活用状況への関心を体系的に再整理し、履修証明を発行する研修プログラムに発展させるという側面を有している。

アカデミック・リンク・センターがこのように対外的に広く注目を集め、高い利用実績を持つことの背景には、センターの研究開発の取組を、図書館や大学教育の実践現場にフィードバックすることを常に意識して活動してきたことがある。例えば、調査研究活動は、研究活動としてのみ行うのではなく、研究成果をもとにした業務改善や意識改革につながるようなセミナーやワークショップの開催に取り組んできたためである。

### （2）アカデミック・リンク・センターの組織体制・関連規程

アカデミック・リンク・センターの組織体制は、下記のとおりである。平成27年4月1日時点では、教員組織は、センター長1名、副センター長1名、兼務教員2名（准教授）、特任助教3名となっている。事務体制は、附属図書館事務部に依拠しつつ、センターによる雇用職員2名により運営している。

なお、本拠点化にあたり、事業を実施していくために学内措置等により、教職員体制の拡充を図る。

- ・国立大学法人千葉大学の組織に関する規則（資料1）及びアカデミック・リンク・センター規程（資料2）
- ・アカデミック・リンク・センターパンフレット（資料3）

人員（平成27年4月1日現在）

教授	准教授	講師	助教	助手	小計	技術職員	事務職員	合計
							1	1
( 1 )	( 2 )	( )	( 3 )	( )	( 6 )	( 1 )	( 1 )	( 8 )

(注) 上段には専任の教職員数を記入し、下段には兼任教職員や非常勤教職員等の人数を、( ) 書き、外数で記入して下さい。

### (3) アカデミック・リンク・センターの運営経費

- ・アカデミック・リンク・センター運営経費一覧（資料4）

なお、平成29年度より実施予定の実践的SDプログラム（履修証明プログラム）については、受講料を徴収することを検討しており、そのために必要な規程類については今後整備する。

## 3. 教育関係共同利用の状況

### (1) 運営委員会の状況

設置規則及び委員名簿を別途添付して下さい（告示第二条第三号及び第三条第四号関係）

#### アカデミック・リンク・センターの設置規則・運営委員会

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、「千葉大学学則」の第8条に基づいて設置されている学内共同利用機関である。「千葉大学アカデミック・リンク・センター規程」に基づいて運営されている。

千葉大学アカデミック・リンク・センター規程では、千葉大学教授会規程第4条の規定に基づき、センターの業務に関する重要事項を審議するために教員会議を置くことを定めている（千葉大学アカデミック・リンク・センター規程6条）。日常的な業務運営については、アカデミック・リンク・センター教員会議の議に基づいて行っている（千葉大学アカデミック・リンク・センター教員会議規程）。

また、国立大学法人千葉大学点検・評価規程第4条第1項に基づき、千葉大学アカデミック・リンク・センターの活動について第三者の立場から評価し、センターの活動の発展・充実に資するために、センターに評価委員会を設置し、定期的な評価を実施している（千葉大学アカデミック・リンク・センター評価委員会規程）。これらの運営に関する規程及び評価に関する規程に基づいて、アカデミック・リンク・センターの諸活動を恒常的に改善しながら、その質的向上を図る体制が整備されている。評価委員会は、毎年、評価報告書を作成し、その評価結果は、ウェブサイトを通じて公表されている。

なお、現在、学内共同利用機関としての位置づけであるため、運営委員会は設置されていないが、今回、教育関係共同利用機関の採択を得ることにより、現在の評価委員会を学外者を含む運営委員会へ再編し、教育関係共同利用機関としての運営体制の拡充を図る。

- ・アカデミック・リンク・センター規程（資料2）

- ・アカデミック・リンク・センター教員会議規程（資料5）

- ・千葉大学アカデミック・リンク・センター教育・学修支援専門職養成部門運営協議会についての基本的な考え方（資料6）

- ・アカデミック・リンク・センター教育・学修支援専門職養成部門運営協議会規程（案）（資料7）及びアカデミック・リンク・センター部門運営協議会名簿（資料8）

### (2) 教育関係共同利用の公募方法（告示第二条第四号及び第三条第五号関係）

#### ①施設利用における募集方針

これまで、アカデミック・リンク・センターの主催する諸事業（「アカデミック・リンク・セミナー」

その他)は、国公立大学、民間事業主体を問わず、広く参加を募集し、開かれた参加機会を提供してきた。今回の事業においても、基本的方針に変更はなく、本事業において行う研修や実践的SDプログラムは、国公立大学、民間事業主体を問わず、開かれた募集を行う。

## ②ふさわしい実績・資源・体制による実践的SDプログラムの質の保証

本事業は、アカデミック・リンク・センターの学修支援事業を拠点にしながら、高等教育研究機構を中心とする千葉大学全体の教育改革の取り組みを活用し、教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムを構築・運営するものである。

アカデミック・リンク・センターは、過去4年間に25回のセミナーを開催し総計1,000名をこえる参加者があったほか、また、毎年1,000名の見学者を受け入れており、これまでの実施事業の先駆性と質的内容は高く評価されている。このように高い注目を集めてきたアカデミック・リンク・センターの質の高い学修支援事業とともに、これまで政策的に求められてきた様々な大学教育改革を全面的に推進してきた千葉大学全体の取組を組み合わせることで、政策課題を踏まえた教育改革を推進する教育・学修専門職を養成していく。取組の基盤的組織となるアカデミック・リンク・センターを全学的に支援することにより、全国的拠点として質の高い実践的SDプログラムを構築する体制ができている。(資料9参照)

## (3) 教育関係共同利用に供する施設、設備及び資料等の状況 (告示第二条第五号及び第三条第六号関係)

※ 共同利用に供する施設、設備及び資料等の状況【別紙2】

## (4) 共同利用する大学や利用者に対する支援体制(告示第二条第六号及び第三条第七号関係)

### ①実践的SDプログラムを運営するために必要な専門性を備えた担当者の配置状況

アカデミック・リンク・センターの構成教職員は、これまで、各種研修会の講師として派遣依頼を受けるとともに、研究開発活動の成果を学会に報告してきた。例えば、アカデミック・リンク・センターの取組成果は、これまで、2011年から2014年12月までの間に、17本の学術論文、図書1冊、その他著作3件、13件の学会報告として公表している。このような学術活動は、アカデミック・リンク・センターが実践的取組を行うだけでなく、研究開発組織であることによるとともに、実践的取組と研究開発活動が相互に対応しながら運営してきたことによる。このような研究開発活動を背景に、アカデミック・リンク・センターの教職員は、他大学のSDや団体の研修会の講師を務めている。(資料10参照)

### ②他大学からの相談への対応・講師派遣の対応体制

アカデミック・リンク・センターを構成する教職員は、これまで、他大学・学会・団体等の依頼に応じて研修会の講師や依頼講演に対応することで、その取組内容を広く伝達してきた。アカデミック・リンク・センターは、2011年12月から2014年11月までの間に、39回の研修会・セミナーへ教職員を講師として派遣している。このような講師派遣は、今後とも継続的に可能であり、他大学に普及していく経験と体制が整っている。(資料10参照)

## (5) 教育関係共同利用に関する情報提供・情報発信(告示第二条第七号及び第三条第八号関係)

### 実践的SDプログラムとしてのポータルサイトの構築と情報提供

本事業では、実施する研修会や実践的SDプログラムをオンラインで提供するために、アカデミック・リンク・センターのウェブサイト、我が国の教育・学修支援の質的向上のためのポータルサイトへの移行・拡充することを推進する。アカデミック・リンク・センターは、これまでも授業コンテンツの動画作成やセミナー動画のYouTubeでの公開など、コンテンツ制作・発信に取り組んできた。これらの経験から、ポータルサイトでの情報提供の基盤はすでに整っている。

具体的には、本事業で実施する研修会やセミナー内容、SD プログラムの授業内容等をオンデマンドで提供するとともに、「教育・学修支援専門職」のネットワーク拠点として、開発教材の相互提供や、各大学の大学教育改革、学修支援や学習成果向上のための取り組み事例の情報提供を行う。

また、「教育・学修支援専門職」の全国的拠点として、ポータルサイト機能を構築・提供することにより、専門職としての結びつきを強めるとともに、修了後のさらなる能力向上の基盤、修了生が自らの大学で教育の質的向上や、SD における中心的役割を果たしたくための諸活動を継続的に支援していく基盤として活用していく。

**(6) 単年度又は複数年度の教育関係共同利用への利用見込み大学、利用見込み者数等  
(告示第二条第八号及び第三条第九号関係)**

**他大学に対する講師派遣や相談対応の見込み件数・利用見込み者数**

アカデミック・リンク・センターは、これまで、過去3年間(2011年12月～2014年1月)に39回の各種研修会への講師派遣を行ってきた。また、年間1000名の見学者を受け入れてきた。これらのことを根拠に、下のような利用見込みを想定している。その根拠は、本事業がアカデミック・リンク・センターの学修支援を中心的主体にしつつ、千葉大学全体の教育改革や学修支援を対象とするものであることから、これまでの参加者数の増加が見込まれるためである。

- ①他大学に対する講師派遣・相談の件数 年間20件
- ②研修会の参加人数 年間300名
- ③実践的SDプログラムの参加者数 年間30名
- ④アカデミック・リンク・センターの実施事業への見学者・視察者 年間1,500名

**4. その他(告示第二条第一号から第八号及び第三条第九号関係)**

拠点認定の継続を希望する施設のみ記載して下さい。

事務担当責任者	フリガナ	スギタ シゲキ	所属部署	附属図書館
	氏名	杉田 茂樹	役職名	利用支援企画課長
	所在地	〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33		
	TEL	043-290-2242	FAX	043-290-2255
	E-mail	*****		

【別紙 1】

申請施設におけるこれまでの主な利用実績  
(平成 24 年度～平成 26 年度)

千葉大学アカデミック・リンク・センター

利用実績の概要
平成 24 年度 セミナー参加者数 (5 回開催) 学内者：41 名、学外者 220 名 見学者数 100 件、1,024 名 依頼講演 15 回
平成 25 年度 セミナー参加者数 (5 回開催) 学内者：24 名、学外者 188 名 見学者数 110 件、977 名 依頼講演 14 回
平成 26 年度 セミナー参加者数 (5 回開催) 学内者：32 名、学外者 92 名 シンポジウム参加者数 学内者：49 名、学外者 103 名 見学者数 93 件、1,096 名 依頼講演 8 回

※ 過去 3 年度分（平成 24 年度～平成 26 年度）の主な利用実績を記入すること。その際、公募通知の各申請施設の留意事項（別紙 1～6）を踏まえた利用実績がわかるよう留意するとともに、共同利用以外の通常の利用についても状況がわかるように留意すること。

※ 新設される施設については、記入は不要です。



## 【別紙2】

### 共同利用に供する施設、設備及び資料等の状況

#### 千葉大学アカデミック・リンク・センター

※ 現在共同利用者が利用することが可能な設備・資料等について記入すること。

※ 新設される設備については、予定を記入すること。

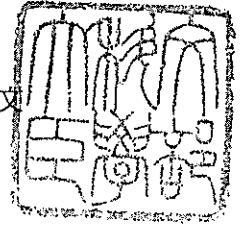
施設、設備及び資料等名	概 要
コンテンツ制作室	動画編集・画像作成などのサポートを行う技術補佐員が常駐 Windows 3台, Macintosh 3台, スキャナ1台
セミナールーム	収録設備付きセミナールーム 3室(利用可能人数:88名, 45名, 40名)
学術文献データベース	千葉大学附属図書館のデータベースをオンラインで使用可能 (Web of science, CiNii Articles, EBSCOhost 他)
附属図書館コンテンツ	電子ジャーナル 22,455タイトル, 電子ブック 21,372タイトル, 図書 1,396,387冊, 雑誌 24,270タイトル



27文科高第439号  
平成27年7月30日

千葉大学  
学長 徳久 剛史 殿

文部科学大臣 下村 博文



### 教育関係共同利用拠点の認定について（通知）

学校教育法施行規則第143条の2の規定に基づき、貴学の「アカデミック・リンク・センター」を、下記により「教育関係共同利用拠点」に認定します。

なお、教育関係共同利用拠点審査委員会等における審査において、下記3のとおり意見がありましたので、今後の拠点活動の際に留意してください。

#### 記

#### 1. 教育関係共同利用拠点名

「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）（アカデミック・リンク・センター）」

#### 2. 認定の有効期間

平成27年7月30日 ～ 平成29年3月31日

#### 3. 特記事項

すでに実績のある施設であり、本拠点ならではの実践的SDプログラムの展開が期待され、評価できる。

しかしながら、教育・学修支援専門職を養成するプログラムの実現可能性や他大学の利用見込みという点で、今後の成熟過程を確認したいため2年間の認定とし、次回申請時に示される実績に期待する。

その際、以下の点に留意し、次回申請時に実績を示されたい。

- (1) 国内外の事例・先行研究等を踏まえ、我が国における教育・学修支援職の確立に寄与し、全国に普及しうる研修プログラムの開発・提案を行うこと。
- (2) 研修プログラムの共同利用計画を確立し、利用者数・利用大学数を拡充すること。
- (3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるよう努めること。

以上

【教育・学修支援専門職養成部門 運営委員会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
山田 礼子	同志社大学	社会学部教授	教育学
杉谷祐美子	青山学院大学	教育人間科学部教授	高等教育論, 教育社会学
篠田 道夫	桜美林大学 (中央教育審議会大学分科会大学教 育部会臨時委員)	大学アドミニストレーション研究科教授	高等教育論, 大学職員論
土屋 俊	大学評価・学位授与機構	研究開発部・評価研究主幹(兼) 教授	哲学, 高等教育質保証
銭谷 眞美	東京国立博物館 (千葉大学経営協議会委員)	館長	教育行政
工藤 潤	公益財団法人大学基準協会	事務局長	高等教育論
竹内 比呂也	千葉大学	副学長・アカデミック・リンク・センター長	図書館情報学
山中 弘美	千葉大学	アカデミック・リンク・センター副センター長	著作権
白川 優治	千葉大学	アカデミック・リンク・センター副センター長 (国際教養学部准教授)	教育社会学, 高等教育論
川本 一彦	千葉大学	アカデミック・リンク・センター兼務教員(統 合情報センター准教授)	情報学, 知覚情報処理・知 能ロボティクス

## 平成 27 年度第 1 回千葉大学アカデミック・リンク・センター 教育・学修支援専門職養成部門運営委員会 議事要旨

日時：平成 27 年 12 月 7 日（月）10 時 30 分～12 時

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟 3 階セミナー室きわみ

出席：川本委員、工藤委員、篠田委員、白川委員、杉谷委員、銭谷委員、竹内委員長、山中委員

欠席：土屋委員、山田委員

議事に先立ち竹内委員長から、資料 1 に基づき、委員の紹介が行われた。

### 議題

#### 1. 教職員の組織的な研修等の共同利用拠点の今後の進め方について

竹内委員長より、資料 2～6 に基づき、教職員の組織的な研修等の共同利用拠点の概要について説明があった。以下の意見交換があった。なお、「・」は学外委員からの意見や質問、「→」はそれに対する学内委員の応答を示す。

- ・ 教育・学修支援専門職のコンピテンシー、スタッフ像について、アカデミック・リンク・センター（以下、「ALC」という。）のこれまでの活動を踏まえ、もう少し想定するところを説明願いたい。
  - ALC の活動のひとつに、図書館をベースにした学修支援がある。米国のブレンディッド・ライブラリアンやリエゾン・ライブラリアン（教員との連携の下に、学生に対しては論文のテーマ選択やレポート執筆のサポートなどを行う図書館職員）をイメージしている。「アカデミック・アドバイス」（資料 4）がその延長に相当する。これを核としつつ、より広範な教育・学修支援を視野に入れたい。
  - また、千葉大学では、教育 IR、コースナンバリング導入、6 ターム制の採用など、高等教育研究機構を中心とした全学的な教育改革に取り組んでおり、そうした経験・知識をこのプログラムに含めることを想定している。それによって、各大学における教育改革立案に寄与するようなプログラムにできるのではないかと考えている。
  - 当方（当該委員）もライティング支援の研究・研修に取り組んでおり、こうした専門的職能を持つ職員の必要性は認識している。しかし、日本の大学教育全体を見た場合、専門職の需要をどれだけ喚起できるか。また、そうした専門職が授業の中身に踏み込んで関わっていくことについて、どの程度教員側の理解を得られるかが懸念される。

- 日本の高等教育文化にこのような専門職がうまく根付くかどうかは予断できないがチャレンジの価値があると考えている。日本には約 780 の大学があり、その中には、このような専門職を必要としている大学がすでに一定程度あるはずである。また、現在各大学がまさに教育改革をすすめている途上であり、このタイミングで専門職の必要性が認識されてくるケースもあるだろう。
- ・ 専門職の確立に向けた具体的戦略を次回申請に向けて練っていく必要がある。
- ・ 学生（とくに初年次学生）にとっては、教員、事務職員、上級生のサポートは心強いものと思われる。千葉大学のような大規模総合大学ほど、教員と学生の距離を埋める支援人員の必要性は強いだろう。従来、助手や院生がそうした役割を担っていたが、そこに教育・学修支援専門職として事務職員や図書館職員が加わることはたいへん望ましいことである。
- ・ 大学の既存の職員が SD を経て教育・学修支援専門職となるのか、あるいは、新たな職種として雇用するのか。いずれにしても、既存の職員と教育・学修支援専門職との、職制上の整理が必要であろう。
- ・ （策定予定の能力ルーブリックについて）「能力」の語は資質、能力を抽象的に示すに留まる恐れがある。例えば、必要なコンピテンシーとして、漠然と「コミュニケーション能力」を挙げるだけではその指し示すところが明確にならない。職務の実態に根差し、眼前に必要な知識等に配慮した具体的な要件を求めるべきだろう。
  - 能力ルーブリックの開発のために、学内の現職事務職員へのインタビューを進めている。対象者の実際の実務経験等についてのヒアリングから、例えば「コミュニケーション」のあり方ひとつにしても必要と感じている内容が違うことが分かってきている。具体的実務に即したルーブリックとなるようつとめる。
- ・ 教育・学修支援専門職へのニーズは今後高くなるだろう。大学評価においても、学習効果をいかに高めるかが課題となっているところであり、専門職の寄与が期待できる。一方で、教員に対する支援についても考慮していく必要があるだろう。
- ・ 特定非営利活動法人実務能力認定機構が「大学マネジメント・業務スキル基準表」を公表しており、ルーブリック検討の参考になるかもしれない。
- ・ 履修証明プログラムのカリキュラムは、年間を通じたものとするのか、短期的な研修会とするのか。また、対象は現職か。
  - これから検討する。検討にあたっては、他の教育関係共同利用拠点等の活動を参考にしつつ、履修証明プログラムに要求される 120 時間の履修を満たし、かつ、現職の人も参加しやすいプログラムとしたい。
- ・ 内容的には、コンピテンシーの図（資料 4）の中の「教務・カリキュラム・授業運営支援」が最も重要であり、教員を動かし、変えていく必要がある。
  - 教員はそれぞれの学問領域の専門家だが、新しい教育スタイルの専門家ではない。それを一緒にやっていくスタッフとして、こうした専門職が必要であろう。すな

わち、従来の授業支援というよりも、新しい教育と一緒に考えていく役割になるのではないか。

- ・ SDプログラムの開始はいつ頃を予定しているか。
  - 能力ルーブリックの初版を来春をめどに完成させ、平成 28 年度後半に一部実施を考えたい。履修証明プログラムとしての本格実施は平成 29 年度を予定している。
- ・ 他の教育関係共同利用拠点が行う SD プログラムとの棲み分けと同時に、連携を考えてはどうか。
  - 他の教育関係共同利用拠点は、大学のマネジメントをテーマとしたものが多く、内容的な重なりはあまりないものと考えられるが、東北大学における教育関係共同利用拠点である高度教養教育・学生支援機構大学教育支援センターが主宰する拠点相互の連絡会に参加し情報交換をすすめているところである。
- ・ 次回の再認定申請時期はいつか。
  - 平成 28 年度前半となることが想定される。1 年に満たない実績で申請にあたることになる。
- ・ 全国拠点としての情報発信や、専門職相互のコミュニケーションの形態についてどのように想定しているか。
  - 基本的にはインターネット上での活動、例えば SNS を使った交流を考えている。また、受講者が次回の講師になるような循環を生み出していきたい。

## 2. その他

特になし。

## 報告事項

### 1. キックオフシンポジウムの開催について

竹内委員長より、キックオフシンポジウムの開催について報告があった。

### 2. その他

特になし。

以上

アカデミック・リンク・センター 教育関係共同利用拠点 企画ワーキング・グループ名簿

平成28年5月16日

	所属	職名	氏名
1	アカデミック・リンク・センター	特任助教	姉川 雄大
2	人文社会科学研究科	人文社会科学研究科長	石井 正人
3	附属図書館	利用支援企画課長	大山 努
4	高等教育研究機構	高等教育研究機構特任助教	岡田 聡志
5	留学生課留学生交流推進係	留学生交流推進係長	奥田 聡子
6	国際教養学部	教育改革担当副学長・国際教養学部長 (教授)	小澤 弘明
7	高等教育研究機構	高等教育研究機構教授	織田 雄一
8	統合情報センター	アカデミック・リンク・センター兼務教員 (准教授)	川本 一彦
9	国際教養学部	アカデミック・リンク・センター副センター長 (准教授)	白川 優治
10	アカデミック・リンク・センター	学修支援担当副学長・アカデミック・リンク・センター長 (文学部教授)	竹内 比呂也
11	教育企画課教務係	教務係長	多田 伸生
12	附属図書館	亥鼻分館職員	谷 奈穂
13	教育企画課	教育企画課長	堀内 伸也
14	国際教養学部	国際教養学部教授, 中教審大学分科会委員	前田 早苗
15	附属図書館	利用支援企画課副課長	三角 太郎
16	アカデミック・リンク・センター	特任助教	御手洗 明佳
17	アカデミック・リンク・センター	アカデミック・リンク・センター副センター長	山中 弘美
18	附属図書館	アカデミック・リンクグループリーダー	米田 奈穂

平成27年度第1回千葉大学アカデミック・リンク・センター  
教育関係共同利用拠点企画ワーキンググループ 議事要旨

日時：平成27年10月9日（金）15時00分～16時30分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟1階セミナー室まなび

出席：竹内、織田、岡田、山中、川本、白川、姉川、多田、杉田、木下、米田、谷

欠席：小澤、前田、石井、堀内、奥田（敬称略）

配布資料：

資料1 教育関係共同利用拠点企画WG名簿

資料2 教育関係共同利用拠点申請書

資料3 教育関係共同利用拠点認定通知書

資料4 教育関係共同利用拠点 「教育・学修支援専門職養成のためのSDプログラム」

資料5 教育・学修支援専門職とそのコンピテンシーのイメージ

資料6 URA スキル標準

資料7 ロードマップ

資料8 拠点SD関係文献リスト

#### 議題

1. 「教育・学修支援専門職養成のためのSDプログラム」の今後の進め方について

- ・竹内より、資料2、3に基づき、教育関係共同利用拠点「教育・学修支援専門職養成のためのSDプログラム」（以下、本プログラム）の概要について説明がなされた。
- ・白川より、資料4～8に基づき、本プログラムにあたるための基本的な方針と、具体的な実施内容について説明がなされた。
- ・竹内より、資料4に基づき、実施内容の今後の進め方として以下のように提案され、了承された。

- (1) 文献調査については、主担当を白川と岡田とし、資料8に基づいておこなう。ただし文献の読み込みや分析などは本ワーキンググループメンバーで適宜分担する。
- (2) 先行事例調査については、主担当は追って連絡する。①は文献やウェブページ等での調査、②～④は実際に先行的な取り組みを実施している機関に行き調査する。また、特定の個人で能力の高い職員に聞き取り調査に行くことも考えられる（織田より、例として豊橋技術科学大学入試課長（参考：IDE：現代の高等教育（569），45-49，2015-04の著者情報）の上西浩司氏、愛媛大学教員（参考：<https://sites.google.com/site/nakaitoshiki/>）の中井俊樹氏、関西国際大学事務局長（参考：大学マネジメント研究会ウェブサイト <http://www.anum.biz/cont9/main.html>）の横田利久氏が挙げられた）。実際の調査は本ワーキンググループメンバーで適宜分担する。
- (3) 関係する資格において求められている能力要件の確認については、主担当を白川と岡田とする。
- (4) 大学職員（学内・学外）について、担当は追って連絡するが、主に職員でおこな



うこととなった。白川、岡田もかかわりながら進める。①アンケート調査（量的調査）については、織田より、国立大学協会主催の若手向けの研修会でアンケートの協力を依頼することが提案された。

（参考：国立大学法人等若手職員勉強会（平成26年12月18～19日）

<http://www.janu.jp/seminar/26/2014wakate.html>）同様の協力依頼を、日本私立大学協会主催の研修会にもおこなうことが提案された。

（参考：日本私立大学協会 平成27年度研修会・協議会

<https://www.shidaikyo.or.jp/apuji/activity/training.html>）

②フォーカスグループインタビュー調査については、学内で対象となる職員を集めてインタビューをおこなう。学外については、適当な職員の推薦を依頼する、こちらで調査をするなどして、協力してもらう職員を集める。（4）の②に関連して、織田より、例えば学内で「優秀な職員」とはどのようなものかを考えるSDを実施し、職員が考える「優秀さ」を調査することもできるのでは、との提案があった。

・今年度は以上の（1）～（4）を進めながら、「教育・学習専門職」として必要なコンピテンシーの抽出と、コンピテンシーに基づく能力ルーブリックの初案作成を目標とすることとなった。

## 2. その他

・竹内より、12月7日（月）に本プログラムのキックオフセミナーが開催されることが報告された。また11月から今年度末まで複数回セミナーを開催する計画なので、それらのテーマや講師についても提案があれば出してほしいとの発言がなされた。織田より、横浜市立大学の出光直樹氏が候補として挙げられ、登壇を依頼する方向で進めることとなった。

（参考：出光氏ウェブサイト <http://www.idemitsu.info/>）

次回開催日程：12月を予定

以上

平成27年度第2回千葉大学アカデミック・リンク・センター  
教育関係共同利用拠点企画ワーキンググループ 議事要旨

日時：平成28年1月8日（金）14時30分～16時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟1階セミナー室まなび

出席：竹内、前田、織田、岡田、山中、川本、白川、姉川、奥田、杉田、木下、米田、谷、片山

欠席：小澤、石井、堀内、多田（敬称略）

配布資料：

資料1 平成27年度第1回千葉大学アカデミック・リンク・センター 教育・学修支援  
専門職養成部門運営委員会 議事要旨

資料2 調査実務WG活動

2-1 調査実務グループの進捗状況について

2-2 教育関係共同利用拠点 調査実務グループ打合せ（第1回～5回議事録）

2-3 インタビュー調査実施状況

2-4 拠点事業訪問調査について

2-5 ACPA実務能力基準表（目次）

2-6 Professional Competency Areas for Student Affairs Educators

資料3 アカデミック・リンク・センター拠点事業 訪問調査予定

3-1 アカデミック・リンク・センター拠点事業 訪問調査について（分担案）

3-2 教職員の視察訪問について（依頼）

3-3 拠点事業 訪問調査予定

資料4 ALPSプログラムホームページ案

4-1 トップページA案

4-2 トップページB案

4-3 トップページC案

4-4 A案の下層ページ

議題：

・議題に入る前に、竹内より、拠点のプログラムコーディネーターをお願いする予定であった1/1採用の山本先生が辞職されることになったため、直ちに教員選考委員会を立ち上げて後任の選考をすすめることになったとの報告がなされた。

1. 第1回教育学修支援専門職養成部門運営委員会開催について

・竹内より、資料1に基づき、平成27年度第1回（12/7実施）教育・学修支援専門職養成部門運営委員会の議事要旨について説明がなされた。運営委員会は過半数が学外委員で構成されており、様々な助言をいただき有益なものであったとの発言がなされた。

## 2. 調査実務 WG 活動の進捗状況について

・白川より、資料 2-1 から 2-6 に基づき、調査実務 WG の進捗状況について、これまでの経過と今後の見通しについて説明がなされた。

- (1) 職員インタビュー調査については、30 名程度を目標に実施中であり、現在 20 名程度が終了、1 月中に残り 10 名程度を実施する予定である。インタビュー対象者は資料 2-3 のとおりで、千葉大学の学生に関わる組織的な部・課・学部を網羅して実施している。学外インタビューについては、キックオフシンポジウムのアンケートの中で、インタビューに協力していただけると回答した方の中から 5 名に実施予定である。分析結果については次回の WG での報告を予定している。
- (2) 職員アンケートについては、職員インタビュー調査の知見をもとに質問項目を設定することを考えているため、2 月後半～3 月中の実施を予定している。学内職員や、学外の過去のセミナー参加者等に協力をお願いする予定である。
- (3) 訪問調査については、資料 2-4 のとおりであるが、「(5) 共通して尋ねる内容」については訪問先の比較一覧を作成する予定であるため、確認していただきたい。
- (4) その他 (参考)、資料 2-5 は運営委員会の工藤先生からご紹介いただいた大学職員として必要な知識を分野別にまとめた資料の目次、資料 2-6 はキックオフシンポジウムで講演された羽田先生にご紹介いただいたアメリカの学生に関わる職員に必要な知識についてまとめた資料の一部である。これらも参考にしながらすすめていきたい。
- (5) 学内職員を集めた集会的 SD については、今年度は実施見送りとし、来年度に実施したい。

## 3. 拠点事業訪問調査について

・白川より、資料 3-1 から 3-3 に基づき、訪問調査のすすめ方について説明がなされた。資料 3-3 のとおり、訪問日程については遠方から調整を行っており、メンバーについては拠点 WG のメンバーの他に、図書館及び学務部の若手職員にも SD を兼ねて参加してもらう予定である。追加で訪問したい方がいれば手を上げていただきたい。

・議題 2 および 3 について、竹内より「昨年の文科省のヒアリング時に九大の川島先生より、海外の大学院の事例やプログラムについて調べたかという質問があった。可能であればあと 1, 2 つでよいので、海外事例を入れてほしい。」という発言がなされた。

・議題 2 (1) 職員インタビュー調査について、織田より「千葉大の学務系には国際分野が入っていないため、国際企画課などの経験がある人を入れてはどうか。また、民間企業の視点、財務の感覚を持って学務を行えるような転職キャリアのある人も入れてはどうか。」という発言がなされた。これについて白川より「インタビューした職員の中に転職キャリアを持つ人はいる。また、留学生課のインタビューの中で語学の話はでてきている。これから学外のインタビューをすすめる上で、千葉大でやっていない仕事の中で必要とされる能力が出てくることを期待している。」という発言がなされた。

#### 4. ALPS プログラムのホームページについて

・竹内より、資料4-1から4-4に基づき、ALPS プログラムのホームページ案について説明がなされた。アカデミックリンクの内部会議では、「トップページに文科省の教育利用拠点に認定されたことが書かれていない」「お知らせが少ししか見えていない」「タブをデザインの中に入れてしまうと、タブを増やしたい時に苦勞するのではないか」との意見が上がっており、これらを改善したホームページを作成する予定であるとの発言がなされた。

#### 5. その他

・次回開催日程：未定

以 上

平成27年度第3回千葉大学アカデミック・リンク・センター  
教育関係共同利用拠点企画ワーキンググループ 議事要旨

日時：平成28年3月29日（火）14時00分～15時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟1階セミナー室まなび

出席：竹内センター長、前田教授、織田教授、岡田特任助教、山中副センター長、川本准教授、白川准教授、姉川特任助教、御手洗特任助教、堀内課長、奥田係長、三角副課長、木下副課長、米田GL、谷職員、片山事務補佐員

欠席：小澤教授、石井教授、多田係長

配布資料：

資料1 平成27年度第2回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用  
拠点企画ワーキンググループ 議事要旨

資料2 平成28年度第1回ALPSセミナーについて

資料3 大学教育学会第38回大会でのラウンドテーブル, 自由研究報告について

資料4 平成28年度教育関係共同利用拠点実施計画書

資料5 第2回教育学修支援専門職養成部門運営委員会議事次第（案）

資料6 調査実務WG活動進捗状況について

6-1 教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査

6-2 大学職員調査依頼文書

6-3 インタビュー調査の記録分析（ラベル作成作業）

6-4 調査実務WG打ち合わせ議事要旨（第5回、6回、7回）

6-5 学外インタビュー調査実施者

資料7 拠点事業訪問調査報告

資料8 ALPSプログラムホームページ案

議題：

・議題に入る前に、竹内センター長より、3/1 付けで、御手洗明佳氏が本学運営基盤機構より本拠点に、プログラムコーディネーターとして就かれたことが報告された。

1. 平成28年度第1回ALPSセミナーについて

・竹内センター長より、資料2に基づき、平成28年度第1回ALPSセミナーについて、愛媛大学の清水栄子講師に「アカデミック・アドバイジング専門性と実践」をテーマに登壇を依頼、内諾も得ていると報告された。今後は白川准教授から清水氏に連絡をとり、準備をすすめることが了承された。

2. 大学教育学会第38回大会でのラウンドテーブル, 自由研究報告について

・竹内センター長より、資料3に基づき、6/11, 12 に立命館大学で開催される大学教育学会について、ラウンドテーブル1件・自由研究報告2件の申込みが受理されたと報告された。

ラウンドテーブルでは竹内センター長が報告と司会をつとめる他、現職大学職員（玉川大学の山崎千鶴氏、同社社大学の井上真琴氏）にコメントをもらう予定であるとの説明があった。

### 3. 平成28年度教育関係共同利用拠点実施計画書について

・竹内センター長より、資料4に基づき、教育関係共同利用拠点の実施計画書について、3/22が学内提出期限であったため既に提出済みであると報告された。堀内課長より、拠点の再申請の時期は昨年度の申請時期より少し遅れる見込みであるとの説明があった。

### 4. 第2回教育学修支援専門職養成部門運営委員会開催について

・竹内センター長より、資料5に基づき、運営委員会の開催が5/18の10時～12時に決まり、運営委員は全員出席できる見込みであると報告された。また主旨として、第一に平成27年度のアカデミック・リンク・センターの活動報告をする機会であるとの説明があった。

### 5. 調査実務WG活動の進捗状況について

・竹内センター長より、資料6に基づき、調査実務WG活動の進捗状況についての報告があり、アンケート調査については、回答数が少ない大学もあるため、リマインドメールを出すこととなった。また回答率をできるだけ正確にするため、各大学に調査結果を報告する際に、協力を依頼した対象職員について確認することとなった。

・白川准教授より、資料6の参考資料1について、「Ⅱ. 大学職員としての仕事について、あなたの行動、態度、認識についてうかがいます」の質問項目（4ページ）は、一通り目を通していただきたいとの説明があった。また参考資料3について、現在インタビュー内容へのラベル付けの作業を行っており、4月上～中旬に大学職員調査とインタビュー分析の結果をまとめる予定であるとの説明があった。

### 6. 拠点事業訪問調査について

・竹内センター長より、資料7に基づき、拠点事業訪問調査について、学務部にもご協力いただき、10拠点の訪問調査を行ったとの報告があった。木下副課長より、赤字の部分はオフレコとして報告書には記述しないこと、報告書の内容についてはこれから訪問先に確認してもらうとの説明があった。

### 7. ALPSプログラムのホームページについて

・竹内センター長より、資料8-1、8-2に基づき、ALPSプログラムのホームページについて、4/1公開予定であると報告された。

### 8. その他

・竹内センター長より、以下2点について報告があった。

#### (1) eラーニングプラットフォームについて

どのプラットフォームを使うかについて、川本准教授が商用サービスを調査したが、利用人数やコンテンツの量で価格が異なるため、コースの内容が確定する秋以降にあらためて検討することとした。

(2) 防音室の設置について

コンテンツ制作室内に防音のミニスタジオを設置したので、今後活用していきたい。

以 上

千葉大学アカデミック・リンク・センター 教育関係共同利用拠点 調査実務グループ名簿

平成28年5月16日

所属	職名	氏名
国際教養学部	アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）	白川 優治
高等教育研究機構	高等教育研究機構特任助教	岡田 聡志
アカデミック・リンク・センター	特任助教	御手洗 明佳
留学生課留学生交流推進係	留学生交流推進係長	奥田 聡子
教育企画課教務係	教務係長	多田 伸生
附属図書館	アカデミック・リンクグループリーダー	米田 奈穂
附属図書館	亥鼻分館職員	谷 奈穂



平成27年度第1回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成27年10月20日（火）11時00分～12時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

出席：白川、岡田、奥田、多田、米田、谷

配布資料：

資料1 拠点 大学職員調査の進め方について スケジュール案

資料2 職員インタビュー調査の進め方について

内容

1. 大学職員調査の進め方のスケジュール案について

・白川より、資料1に基づき、大学職員調査の進め方について、年内のスケジュール案の説明がなされた。

2. 職員インタビュー調査の進め方について

・白川より、資料2に基づき、職員インタビュー調査の進め方について説明がなされた。説明後、調査の進め方について出席者で意見交換し、次のような提案がなされた。

方法について

・インタビュアーとインタビューイの人数について、インタビューイが一人、インタビュアーが二人とするのがよいのではないか。インタビューイが複数だと、質問の内容によっては（例：仕事のなかでうまくいかなかったことは？など、ネガティブな内容）話しづらい可能性もある。また、インタビュアーは二人で、例えば教務系と図書系のように、異なる職務の者同士がペアでおこなうのがよいのではないか。

質問事項について

・質問内容として資料2に挙げられている項目に追加する内容や、インタビューにあたって必要と考えられる事柄、留意したほうがよいこととして、次のものが挙げられた。

（前段階として）

- ・質問の順番が重要ではないか。話しやすい順番、共感的に進めるための進め方。
- インタビュアーの自己紹介は必要だろう。
- インタビューの趣旨説明
- アイスブレイキング的な何か（例：現在の部署での仕事内容を説明してもらう）

（質問内容として）

- 自分の専門性についてどのように考えているか

- 自分の能力を上げるため（キャリアアップ）にどのようなことをしているか
- ・自分の成長のために心掛けていること、大切だと思うことは何か。
- SD や共同利用拠点といったものについてどのように考えているか
- 学内外でのこれまでの研修等への参加状況  
(インタビューでの表現として)
- どのような聞き方で質問するかが重要ではないか。たとえば「仕事の中で「困ったこと」は何か?」という質問は、「困った」という言葉を「時間がかかった」や「誰かの手を借りる必要があった」のように言い換えることで答え易くなるとも考えられる。  
(その他関連すること)
- ・仕事の内容等については、インタビュアーの側でわかることはあとで補完するなど、対象に応じて柔軟に対応することもできるのではないか。
- ・インタビューの内容は、対象者に事前に伝えておいて、考えてきてもらうことがよいのではないか。

#### 職員への依頼について

- ・事前に、今回のインタビュー調査の趣旨説明や、結果を匿名で扱うことなど個人情報への配慮、インタビューの回答内容が人事評価等に影響しない等の文書を用意し、同意してもらうことが必要である。
- ・インタビュー時間として、一人 30 分から 1 時間として依頼すると、協力してもらいやすいのではないか。

#### 3. 次回打ち合わせにあたって

- ・今回の打ち合わせをもとに、質問事項、進め方その他について、さらに気づいたことを持ち寄る。
- ・職員インタビューのインタビュイー候補者を各自考えてくる。

#### 4. 次回打ち合わせについて

- ・日時：10月26日（月）9：00－10：30
- ・場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

以上

平成27年度第2回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成27年10月26日（月）9時00分～10時30分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

出席：白川、岡田、奥田、多田、米田、谷、片山

配布資料：

資料1 職員インタビュー調査の進め方について（修正版）

資料2 徹底調査Ⅲ 専門分野別 独自のプログラム（「大学の實力2016」P108～P147）

内容

1. 職員インタビューの進め方についての確認

質問事項について

資料1に挙げられている質問項目に追加・修正する内容として、次のものが挙げられた。

<追加したい内容>

- ・一緒に働きたい人はどんな人か
- ・どのような研修プログラムを受けたいか、時期、期間の希望はあるか
- ・あなたの強み（今の業務の中で得意なこと、役立っていると思うこと）は何か

<修正したい内容>

・「SDや共同利用拠点といったものについてどのように考えているか」と聞かれても、なかなか答えられないのではないか。SDと聞いてもすぐにわからないのではないか。そのため、この項目は削除することとした。

質問時間について

・1時間しかないため、「現在の部署での仕事内容」や「これまでの異動の状況…」について事前に聞いておくという方法もあるが、インタビューの始めに話してもらうことで話が進めやすくなること、事前アンケートの記入は対象者の負担になることから、学内ホームページで事前に現在の部署と業務について調べておくこととなった。

・質問項目毎に、時間の目安を決めておくことよいのではないか。最初の仕事内容等については5分程度など。

質問の順番について

・大きな流れだけ決めておいて（①現在の仕事内容や異動状況 ②自分の強み弱み ③研修について）、細かい質問の順番は、すべてを内容に含んでいけば、その場で臨機応変に対応していくことになった。

### 職員への依頼について

- ・対象者本人とその上司宛の依頼文書の文案を作成し、竹内先生はじめ必要な人に確認してもらい、確定させる（今週中を目安）。
- ・インタビュー日時の調整は、インタビュー担当者が対象者に連絡して行う。

### 2. インタビュー候補者

インタビュー対象候補者を挙げ、来週中にプレインタビューを行うこととした。なお、専門員クラスは、当初対象にはしていなかったが、幅広い視点から意見をもらえることを期待し、プレインタビューの対象とした。

### 3. 調査実務グループの資料の共有について

- ・Moodleで資料の情報共有を行うことを検討する。

### 4. 次回打ち合わせについて

- ・プレインタビューの日程決定後、次回打ち合わせの日程を調整する（プレインタビュー実施後に）。

以上

平成27年度第3回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成27年11月9日（月）13時00分～14時30分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

出席：白川、岡田、奥田、米田、谷、片山

配布資料：

資料1 実務調査グループ第3回打ち合わせ

資料2 第2回調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

資料3 職員インタビュー調査の進め方について（修正版）

資料4 インタビュー調査についての依頼文書（説明資料・対象者本人宛て依頼文書・上長宛て依頼文書）

内容

1. プレインタビューの概要とインタビュー項目の見直しの要否

プレインタビューの概要・感じたこと

<担当：米田・多田>

- ・11/5（木）11:00～、インタビュー時間は40分程度。依頼文書の主な質問内容への回答を考えてくださっていた。
- ・はじめに調査参加の同意書を読み、署名をしてもらったが、場の雰囲気はほぐれなかった。同意書の渡し方が難しいと感じた。
- ・インタビュー後の雑談でも関連する話があったため、それも録音しておけばよかった。
- ・質問の回答に対して、さらに深くつっこんだ話を聞けなかった。具体的にどんな時にそう思うのか、聞けばよかった。

<担当：奥田・谷>

- ・ご自分の個人調書を事前に準備してくださっていたので、これまでの職務経歴等を尋ねる必要がなかった。
- ・教務や学生支援を経験してこなかった方の場合、概念的な話が多くなるが多いため、人選を考えた方がよいと感じた。
- ・インタビュー中に研修プログラムの構築について、以下のようなご意見をいただいた。
  - －大学によって学生の層が違うので、それを意識した内容にしたほうがよい。
  - －学生に講師をしてもらうのはどうか。
  - －コミュニケーション力が重要である。研修に接遇を入れたほうがよい。

### インタビュー項目の見直し・改善点

- ・課長クラスの方に質問する場合は、一部の質問項目で自分の能力を「部下の能力」に置き換えて質問したほうがよいのではないかと。
- ・説明資料、同意書は事前に渡しておき、インタビューでは口頭でポイントを確認する程度にする。同意書は、事前にサインして持参していただいても、当日サインしていただいても、どちらでもよい。
- ・インタビュー対象者は原則、教務・学生支援の経験がある方とする。（ただし、打ち合わせ後のメールのやりとりで、経験のない方でも、能力指標や研修プログラムの参考になる場合は対象とすることになった。）

### 2. インタビューの本格実施にあたって（対象者、スケジュールの確認）

第2回の打ち合わせで挙げられた候補者の中で、教務・学生支援の経験の有無を確認し、経験がない方は原則対象外とした。また、教務・学生支援の経験がある方で、適任と思われる方を更に追加した。なお、課長・専門員クラスは、当初対象にはしていなかったが、様々な経験をした人から意見をもらえることを期待し、対象に含めることとした。課長・専門員クラスの依頼・インタビューは、白川先生・岡田先生が担当することとなった。

インタビュー対象者名リスト表は省略

### 3. 職員以外の学内インタビュー対象者

#### 学生相談室

学生相談室の臨床心理士の先生の話も参考になると思われるため、インタビュー実施を検討する。

#### 学生団体

学生コミュニティ支援団体ピアの学生へのインタビューについては、今回の調査の中で位置づけが少し異なるため、同じ質問項目でのインタビューは難しい。ただ、学生のニーズを把握する観点から、「学生履修相談に乗っている」という部分に特化した、別枠でのインタビューならよいのではないかと。

### 4. 職員以外の学内インタビュー対象者

11月19日（木）第2回ALCセミナー、12月7日（月）キックオフシンポジウムに申し込んだ方の中から1、2名にインタビューの依頼する方法が考えられる。このことについては、まずは竹内先生に相談してみることにした。

## 5. 次回日程

次回の日程は、再来週を目処に改めて日程調整をすることとなった。

以 上

平成27年度第4回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨（案）

日時：平成27年12月4日（金）15時00分～16時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I棟3階302

出席：白川、岡田、奥田、多田、米田、谷、片山

配布資料：

資料1 実務調査グループ第4回打ち合わせ

資料2 第3回調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

資料3 拠点大学職員インタビュー調査一覧

資料4 千葉大学 学習状況・情報利用環境調査2015

内容

1. 連絡事項・状況確認

① 進捗状況確認

・インタビューの実施状況や音声反訳の確認状況を「インタビュー調査一覧表」で管理できるようにした。今後この一覧表を更新する。

② moodle 利用について

- ・打ち合わせの議事録とインタビューの反訳原稿を moodle に掲載した。
- ・インタビューの反訳原稿はテープおこしの段階から掲載し、担当者、対象者の内容の確認が済んだら確定版と差し替える。
- ・インタビュー原稿には氏名が入っているが、分析する際は記号（Aさん Bさん）に置き換える。
- ・依頼状、同意書（様式）も掲載する。

2. インタビューの進捗状況とインタビュー項目の見直しの要否

インタビューした中で思うこと、共有したほうがよいと思ったこと

<米田さん>

結局、組織・体制が大事で、組織全体として考えなくてはいけないのではないかと感じた。

<谷さん>

インタビューの中で出てきた要素として、「コミュニケーション力」「業務知識」「情報収集能力」「語学力」があったように思う。

どこの段階で分析に入るのか、このままインタビューを続けていいのか。

<多田さん>

学生との接し方、メンタル面、事件・事故の負担や比重が大きいと感じた。警察沙汰になるような場合の対応についても学ぶのか。



<奥田さん>

インタビューをお願いした人の中で、このプログラムを検討していく上で協力を仰いだ方がよいと思う方もいた。そのような人を発掘することもこのグループの使命なのではないか。

インタビューの中で、医療・メンタル系の研修があってもよいのではないかと、広く浅くでも知っているのと知らないのでは違う、という話があった。

<白川先生>

谷さんの要素の話については、インタビューを続けていくと、重なるものと広がっていくものが出てくるはずなので、今後マッピングする作業が必要となる。

奥田さんのインタビューをお願いした方に協力を仰ぐことについては、企画ワーキンググループに入ってもらい、ということで竹内先生と相談できるかもしれない。

### 3. 今後のインタビュー計画

- ・学生支援、教務、就職支援、留学生、亥鼻（医学・医療）など、一通りの所属の方から話を聞く必要があるため、今後もインタビューを継続する。
- ・インタビューをお願いした方からご紹介いただいた方を候補者に加える。また新採用の方にも質問項目を変えてインタビューを行う。
- ・これまでは担当者 2 名：対象者 1 名でインタビューを行ってきたが、来週以降は担当者 1 名で実施する。（1 名で実施してみて、やりにくい場合は、2 名に戻してもよい）
- ・各自、2 週間（～12/18）で、対象者 2 名にインタビューを行う。

インタビュー対象者名リスト表は省略

### 4. 職員以外の学内インタビュー対象

#### ① 学内の対象

学生相談室の先生には、次回の調査実務グループ打合せに来ていただいて、お話を何う方向で調整する。

#### ② 千葉大学外の職員

キックオフシンポジウム（12/7 開催）の参加者アンケートの中で、インタビューに協力してくださる方を募集する。

### 5. 今後の計画

12 月中（もしくは 1 月上旬）に企画ワーキンググループを開催予定。

調査実務グループの次回打ち合わせも、年内開催で調整する。

### 6. 千葉大学学習状況・情報利用環境調査について

追加項目案について、皆さんからの意見を整理して反映する。

以 上

平成27年度第5回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成27年12月28日（月）10時30分～12時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

出席：白川、岡田、奥田、多田、米田、谷、片山

配布資料：

資料1 2015年12月28日（月）拠点調査実務グループ打ち合わせ

資料2 第4回調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

資料3 運営委員会 議事要旨（案）

資料4 キックオフシンポジウム配布資料

資料5 キックオフシンポジウムアンケート結果

資料6 学外職員インタビュー候補者リスト

資料7 拠点打ち合わせ資料\_今後のスケジュールについてのイメージ（岡田先生作成）

内容

1) これまでの経過について（確認）

- ・インタビューの進捗状況、気づいたこと

<白川先生>

対象者と連絡がとれず、まだインタビューを実施できていない。

<奥田さん>

新人の方へのインタビューは短時間で終わった。あまり困ったことはなさそうで、周りのサポートがよいのかもしれない。

就職支援課の方のお話は面白く、2種類の資格をとられていること、学生からの一言（支援とはなんですか？）からの心境の変化、たくさんの相談を受けている（月平均120～130件近く）こと、など様々なお話を聞くことができた。

<多田さん>

2名のインタビューを行ったが、担当者が1名だったこともあり、30分程度で終わった。質問項目に沿って話を聞いたが、よく知っている方で、話が淡々とすすんだ。

<岡田先生>

入試課の方は様々なキャリアパスをお持ちだった。

一方、もう一方はずっと学務系の仕事をされているということだった。

<谷さん>

今年、係長になったばかりの方は、なったばかりで色々と大変な様子だった。  
医学部の方は、試験に落ちた学生のケアができなかったという失敗談や、授業や実習のお手伝いをするため学生・先生とのつながりがある、というお話があった。

<米田さん>

学生支援課の方は、学費免除の申請で、学生や保護者の対応にとっても苦労されているというお話だった。法務、税務、メンタルなど色々な知識が必要と感じた。

## 2) 12月7日の拠点運営委員会とキックオフシンポジウムでの議論について (情報共有)

### ・運営委員会での指摘事項

運営委員会 議事要旨 (案) P2、能力ルーブリックの「能力」について、「コミュニケーション能力」だけでは抽象的であり (例えば対学生、対教員でも違う)、より実態にあわせた具体的な要件が必要である、というお話があった。

また、コンピテンシーの図の中の「教務・カリキュラム・授業運営支援」について、従来の学務の仕事を超えて、新しい教育と一緒に考えていく役割になることが必要、というお話があった。

### ・シンポジウムでの指摘事項

篠田先生の A3 資料「中教審で審議が進む職員の新たな役割と専門性の向上」は読んでおいたほうがよい。(図表 1 -2「事務組織」の見直し 3「専門的職員」の配置、図表 3 専門的職員の 2 つの型)

## 3) 1月以降の進め方

### (1) 特任講師の着任について

1月4日から拠点の専任教員として、特任講師の方が着任される。国立大学は初めてとのことで、徐々に慣れてもらいながら、拠点の仕事をすすめていきたい。

### (2) 全体のマネジメントと進捗管理

3月までに成果を出すため、今後の全体 (インタビュー、アンケート、訪問調査) のマネジメントをどうするか。打ち合わせの定例化 (週 1 回など) が可能か。

→白川先生・岡田先生・山本先生・木下・米田・(竹内先生) のグループで全体のマネジメント案を作り、調査実務 G の意見を求めながらすすめていくのが現実的か。

### (3) 調査実務インタビュー調査

インタビュー数として 30 人程度が必要になるため (岡田先生作成資料)、今後追加で学内 4 名 + 学外 5 名のインタビュー調査を行うことになった。

<学内>

追加で 4 名のインタビューを行う。留学生課については、留学生課長にインタビュー対象者を推薦してもらうことにした。インタビュー時期は 1 月中で調整する。

インタビュー対象者名リスト表は省略

<学外>

キックオフシンポジウムのアンケートで、インタビュー調査のご協力に手を挙げていただいた方（18 名）の中から、候補者 5 名を挙げた。インタビューは白川先生、岡田先生が担当する予定。

インタビュー対象者名リスト表は省略

(4) インタビュー分析の進め方

2 月に半日程度かけて分析を行いたい。

4) 1 月 8 日拠点企画 WG への対応

調査実務 G の報告も行うため、資料ができれば確認してください。（白川先生）

以 上

平成27年度第6回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成28年2月9日（火）13時30分～15時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I棟3階302

出席：白川、岡田、御手洗、奥田、多田、木下、米田、谷、片山

配布資料：

資料1 2016年2月9日（火）拠点調査実務グループ打ち合わせ

資料2 コンピテンシー作成のためのインタビューの分析手順案について（岡田先生作成）

資料3 拠点大学職員インタビュー調査一覧（学内者）

資料4 拠点学外職員インタビュー候補者

内容

1) 特任助教着任予定者（3月1日付）について

3月1日から、御手洗明佳（みたらいさやか）先生が拠点の教員として着任される予定。

2月中も拠点WGや調査実務Gの仕事や打ち合わせに入っていた。

2) これまでの経緯

・学内者インタビュー調査については、23名のインタビュー調査とテープおこしが終了し、残り2名（担当：白川先生）となった。

・学外者インタビュー調査については、2月17日までに6名のインタビューを行う予定。

・全体で2月中にテープおこしを含めて、インタビュー調査が終了する。テープおこしが終わったものについては、順次分析作業をすすめていく。

3) インタビュー調査の整理の仕方について（資料2）

<分析手順・方法>

・「1. 理想的手順」では時間的に厳しいため、「2. 具体的手順案」ですすめる。

・「大学における教育支援および学修支援のために必要な資質・能力」（学務部・教務事務・図書館等、学生と関わる際に必要とされる能力）に、1次ラベルをつける。

・匿名化处理については、インタビューの発言者はIDで表記する。会話中の先生や職員の氏名はイニシャル等の表記にする。

・ラベルは1つのセルに複数入ってもよい。また、必ずしも「○○○力」のようにしなくてもよい（例を参照）。

<期限・分担>

2月29日（月）までに、1インタビュー：担当者1名でラベル付けの作業を行う。

担当者 2 名で実施したインタビューについては、分担して作業する。

<その他>

- ・匿名化の ID と Excel 表の雛形は、別途 Moodle にアップロードする。
- ・ラベル付けの作業が終わったファイルは、Moodle にアップロードする。ファイル名は匿名化の ID にする。
- ・作業中に迷うことがあったら、白川先生、岡田先生に聞いてください。(白川先生)

#### 4) その他

大学教育学会 (6/11,12 立命館大学) で拠点のことを発表する際に、職員の方に発表者に入っていただきたい。ただし、発表者になるには学会の会員 (会費 1 万円/年間) になる必要があるため、会員になって発表していただくか、発表はしないが名前を連ねていただくか、検討いただきたい。(白川先生)

以 上

平成27年度第7回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成28年3月3日（木）10時45分～12時00分

場所：アカデミック・リンク・センター I 棟3階302

出席：白川、岡田、御手洗、奥田、多田、米田、谷、片山

配布資料：

資料 インタビュー分析結果（1次ラベル付けしたもの）

内容

1) インタビュー分析についての情報共有

各自、インタビュー分析の1次ラベル付けの作業を行った際のラベル付けの仕方、気づいた点、どのようなラベルを付けたか（多かったもの、印象に残ったもの）をあげてもらった。

<岡田先生>

- ・文化的なことにもラベルをつけた。
- ・「人間関係」「英語」が多く出てきた。

<多田さん>

- ・能力というよりも、人としての資質や性格的なものが多いように感じた。
- ・「経験」「周りの人との連携」「学生への配慮」「メンタルヘルスや法律などの知識」「コミュニケーション能力」「タイムマネジメント」「語学力」など。

<奥田さん>

- ・「語学力」「慎重さ」「冷静さ」「情報収集力」「コミュニケーション能力」「メンタルや医療系の知識」「国際情勢に関する知識」など。
- ・能力以外で「用語集がほしい」「研修にロールプレイを入れたほうがよい」「自主的に英語のeラーニングを受講している」という話も出てきた。
- ・FDとして教員に対してのメンタル研修の機会はあるが、SDでもあるのか？（白川先生）→メンタル系の研修は、特に学務系の職員にはある。受講する場合は上司に了解を得ている。ただし、直接業務に関係のない人は手を上げづらいかもしれない。（奥田さん）→そもそも、その研修が自分に関係あると思えるかどうかも問題。（谷さん）

<白川先生>

- ・インタビューの発言そのものから抜き出す方法でラベル付けを行った。
- ・「コミュニケーション」がよく出てきた。

<谷さん>

- ・会話からそのままラベルをつけたものと、文脈から判断してラベルをつけたものの両方があった。
- ・「学生、教員のことを知る」「コミュニケーション能力」「チームワーク（自分が持たない能力を持っている人との協力）」「全体を把握する」「優秀な人だけでなく、職員全体の能力の底上げ」「他部署との協力体制」など。

<米田さん>

- ・ラベルの付け方が少なかった、知識に関するラベルが多かったと感じた。

## 2) 今後のすすめ方

### (1) アンケートについて

白川先生・岡田先生・御手洗先生で、1次ラベルを付けた分析結果を参考にしてアンケート項目を作成する。

### (2) インタビュー分析について

- ・各自、1次ラベルの見直しと付け直しを行いながら、2次ラベルを付ける作業をすすめる。
- ・2次ラベルは、1次ラベルで付けた具体的なスキルを抽象的なものに置き換える。
- ・2次ラベルをつけたら、そのスキルが「①教育・学修支援専門職に必要なスキル」「②大学職員に必要なスキル」「③社会人として必要なスキル」「④その他のスキル」のどれにあたるかを分類する。
- ・Excelシートへの入力方法については、別途岡田先生から連絡する。

## 3) 次回の打ち合わせ

3月22日の週で日程を調整することになった。

以 上



平成27年度第8回千葉大学アカデミック・リンク・センター教育関係共同利用拠点  
調査実務グループ打ち合わせ議事要旨

日時：平成28年3月28日（月）13時00分～14時30分

場所：アカデミック・リンク・センター I棟3階302

出席：白川、岡田、御手洗、奥田、多田、米田、谷、片山

配布資料：

資料 インタビュー分析結果（2次ラベル付けしたもの）

内容

1) インタビュー分析（2次ラベル）についての情報共有

各自、インタビュー分析の2次ラベルを付ける作業を行った感想、気づいた点等をあげてもらった。

<米田さん>

- ・2次ラベルの分類で、【1（教育・学修支援専門職に必要なスキル）】【2（大学職員に必要なスキル）】【3（社会人として必要なスキル）】のどれをつけるのかを迷うものがあった（ラベル「業務に必要な情報の収集」など）。→あとで、全体を見ながら調整するので問題ない（白川先生）。
- ・話を聞くことを「傾聴力」というラベルでまとめたが、「〇〇に対して話を聞く」のように具体的なラベルにすべきだったのか。
- ・「語学力」は、具体的な言語が出てきている場合はそのまま「英語」「中国語」とわけたほうがよいか。

<谷さん>

- ・分類【1】がつけられるものは、なるべく【1】をつける方針で作業をすすめた。
- ・「人脈づくり」というラベルをつけたが、「コミュニケーションスキル」とするべきだったのか。どのくらい抽象化すべきか迷った。→「コミュニケーション」だけではなく、もう少し具体的につけたほうがよい（白川先生）。
- ・自分の係の中での連携は「チームワーク」とし、「他の係との連携」とわけた。

<多田さん>

- ・ラベル名を簡単につけすぎたように感じた。→1次ラベルの時点で抽象的になっていると、2次ラベルの抽象度がさらにあがってしまう。（岡田先生）
- ・分類を【1, 2, 3】とつけたものが多かったが、文脈から判断して【1, 2】だけに修正すべきものが複数あった。

<奥田さん>

- ・分類の入力がラベルごとではなく、セルでまとめて入力してしまったので、修正する。
- ・2次ラベルはなるべく同じ用語（共通した言葉）でまとめようとした。
- ・1次ラベル「大人の完成度が違う」にどのようなラベルをつけるべきか迷った。→必ずしも全てにラベルをつけなくてもよい。（白川先生）

<白川先生>

- ・2次ラベルは、1次ラベルの抽象度を少しあげる程度とした。

<岡田先生>

- ・スキルを記述（「～する」と表記）するようにした。また、抽象度を上げる作業をした。

## 2) 今後のすすめ方

### (1) 全体のスケジュール

2次ラベルの重複を見る作業を、谷さん、白川先生、岡田先生、御手洗先生の4名で行う。その後、調査実務グループのメンバーで確認を行い、4月中旬～GW前に分析結果をまとめる。

### (2) 各自の作業

4月4日（月）までに、各自で2次ラベルの付け直しを行い、Moodle にファイルをアップロードする。（以下は谷さんからの確認事項）

- ・2次ラベルの分類【1, 2, 3, 4】は、できるだけ1つに絞る。
- ・インタビューアの発言に出てきたスキルでも、インタビューイが「そうですね」など同意している場合はラベルをつけてもよい。
- ・2次ラベルの修正がないファイルについても、ファイル名をバージョン3にして、Moodle にアップロードする。

以 上

# 教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査

(2016年3月)

千葉大学アカデミック・リンク・センターでは、2015年7月に文部科学大臣により教育関係共同利用拠点として認定されたことを受け、「教育・学修支援専門職」に必要な資質・能力を明らかにし、研修プログラムを構築するための取り組みを進めています。このアンケート調査は、大学職員を対象に、大学における教育・学修支援の専門性に関する資質・能力の在り方や、研修プログラムに対するニーズを把握することを目的としています。

本調査は匿名式の調査であり、回答して頂いた内容は統計的に処理され、個人が特定されることは決してありません。この調査の結果は、アカデミック・リンク・センターにおける教育関係共同利用拠点の事業やこの拠点事業を進めていくために関連する研究成果として、公表する予定です。なお、回答にかかる時間はおよそ15分程度です。

この調査は、教育関係共同利用拠点として千葉大学アカデミック・リンク・センターが行います。調査内容に関するご質問は、以下の連絡先までご連絡ください。

千葉大学 アカデミック・リンク・センター

< 1. あなた自身についてうかがいます。 >

Q1: あなたの性別について、あてはまるもの1つを選択してください。

1. 男性
2. 女性

Q2: あなたの年齢について、あてはまるもの1つを選択してください。

1. 25歳未満
2. 25～29歳
3. 30～34歳
4. 35～39歳
5. 40～44歳
6. 45～49歳
7. 50～54歳
8. 55～59歳
6. 60歳以上

Q3: あなたの最終学歴について、あてはまるもの1つを選択してください。

1. 高等学校卒業
2. 短期大学、高等専門学校、専門学校卒業
3. 四年制大学卒業
4. 修士課程/博士前期課程/専門職学位課程 修了
5. 博士課程/博士後期課程 (学位未取得)
6. 博士課程/ 博士後期課程 修了 (学位取得)
7. その他

Q4: あなたが現在勤務している大学は、あなたが卒業した大学ですか。あてはまるもの1つを選択してください。

1. はい
2. いいえ

Q5：あなたは現在勤務している大学にどのような経緯で採用（異動含む）されましたか。あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

【国立】

1. 国家公務員1種試験
2. 国家公務員2種試験
3. 国家公務員3種試験
4. 国立大学法人等職員統一採用試験
5. 大学の独自採用・公募（特任・非常勤を含む）
6. 非常勤職員からの登用
7. その他

【公立】

1. 地方自治体職員としての採用
2. 法人・大学職員としての独自採用
3. その他

【私立】

1. 新卒採用
2. 中途採用
3. 学校法人の他部門から配属
4. その他

Q6：あなたの現在の職務について、あてはまるもの1つを選択してください。（所属部署ではなく、担当職務の内容からご回答ください。また、学内での呼称が異なる場合、最もあてはまるものを選択してください。）（必須）

1. 総務・人事
2. 財務・経理
3. 経営企画
4. 教務
5. 学生支援（キャリア・就職支援含む）
6. 入試
7. 広報
8. 情報システム
9. 施設・管財
10. 国際交流（留学生関連含む）
11. 研究支援
12. 図書館
13. 病院
14. 附属学校園
15. その他

Q7：あなたが大学職員としてこれまで経験した職務について、それぞれの経験年数をあてはまるもの1つを選択してください。（勤務先にその職務の該当がない場合は、「経験なし」を選択してください。）（必須）

	経験なし	1年未満	1年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 15年未満	15年以上 20年未満	20年以上
1. 総務・人事	0	1	2	3	4	5	6
2. 財務・経理	0	1	2	3	4	5	6
3. 経営企画	0	1	2	3	4	5	6
4. 教務	0	1	2	3	4	5	6
5. 学生支援（キャリア・就職支援含む）	0	1	2	3	4	5	6
6. 入試	0	1	2	3	4	5	6
7. 広報	0	1	2	3	4	5	6
8. 情報システム	0	1	2	3	4	5	6
9. 施設・管財	0	1	2	3	4	5	6
10. 国際交流（留学生関連含む）	0	1	2	3	4	5	6
11. 研究支援	0	1	2	3	4	5	6
12. 図書館	0	1	2	3	4	5	6
13. 病院	0	1	2	3	4	5	6

Q8：あなたの現在の職位（役職）はについて、あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

1. 役員（理事等）      2. 管理職（部長・次長・課長・事務長等）
3. 初級管理職（課長補佐級・係長級・主任等）      4. 一般専任職員
5. 嘱託職員、臨時職員      6. 派遣職員      7. 事務補佐員      8. その他

Q9：あなたが「大学職員」としての仕事を選んだ理由について、あてはまるもの1つを選択してください。（必須）

	あてはまる	ある程度あてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1. 学校・教育業界に関心があったから	5	4	3	2	1
2. 自分の専門性や経験を活かせるから	5	4	3	2	1
3. 安定しているから	5	4	3	2	1
4. 地元で働けるから	5	4	3	2	1
5. 学生・若者と関わるのが好きだから	5	4	3	2	1
6. 親や先生等、人に勧められたから	5	4	3	2	1

Q10：あなたは、「大学教育」、「教育支援」、「学習支援」、「学生支援」の改革や改善、新しい取組をテーマとする研修（研修、セミナー等名称は問いません）について、過去1年以内に、参加したことはありますか。それぞれ、あてはまるものに1つ選択してください。（必須）

	複数回参加した	参加したことがある	参加したことはない
1. 所属大学や部局主催の研修	3	2	1
2. 他大学で開催される研修	3	2	1
3. 大学団体が主催する研修	3	2	1
4. 大学教育や大学運営に関する学会のイベント	3	2	1
5. 文部科学省等の行政機関の主催する研修	3	2	1
6. 大学職員等が主催する自主的なイベント	3	2	1
7. 民間企業や団体が主催するセミナー	3	2	1

Q11：あなたは、これまでに、次のような職務経験を持っていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 他大学への出向      2. 大学団体・関連団体・独立行政法人等への出向
3. 民間企業・団体での勤務経験      4. 海外での勤務経験（海外研修含む）
5. 大学職員を対象とした研修やセミナーでの講師      6. 文部科学省での行政職
7. 文科省以外の国の行政機関での行政職      8. 地方自治体等公共団体での勤務経験
9. 起業・自営等の事業経営

Q12: あなたは、大学職員としての職務を遂行するために、何らかの試験を受けたり、資格を取得していますか。

あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. TOEIC、英検など英語の試験・資格
2. 学生支援士など学生相談、学生支援の資格
3. キャリアカウンセラーなどキャリア相談の資格
4. IT パスポートなど情報技術の資格
5. 留学カウンセラーなど留学生支援の資格
6. 簿記など経理関係の資格
7. 大学マネジメントなどの大学院や履修証明プログラム
8. 図書館司書
9. その他

< 2. 大学職員としての仕事について、あなたの行動、態度、認識についてうかがいます。 >

Q13. あなたの日常の仕事の進め方について、それぞれあてはまるもの1つを選択してください。(必須)

No	項目	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	新しい企画・提案をする。	5	4	3	2	1
2	仕事に優先順位を付ける。	5	4	3	2	1
3	ルールや規則を遵守する。	5	4	3	2	1
4	ICT 等の新しいテクノロジーに対応する。	5	4	3	2	1
5	リーダーシップを発揮する。	5	4	3	2	1
6	自分の業務の進め方を絶えず見直している。	5	4	3	2	1
7	自分の業務の社会に対する意味や役割を意識している。	5	4	3	2	1
8	自分から進んで研修に参加する。	5	4	3	2	1
9	自分の個性や特徴を理解している。	5	4	3	2	1
10	チームワークが得意である。	5	4	3	2	1
11	話しかけやすい雰囲気を意識している。	5	4	3	2	1
12	学内の他部局の仕事に関心を持っている。	5	4	3	2	1
13	他部署との交流を積極的に行っている。	5	4	3	2	1
14	他大学の教職員と交流する。	5	4	3	2	1
15	人の顔や名前を覚えることが得意ではない。	5	4	3	2	1
16	他部局や他機関の事例を参照する。	5	4	3	2	1
17	分からないことがあれば他人に聞く。	5	4	3	2	1
18	英語等の外国語の学習を行っている。	5	4	3	2	1
19	周りの仕事を把握する。	5	4	3	2	1
20	人の成長を助けたいと思っている。	5	4	3	2	1
21	困った人を見たら進んで声を掛ける。	5	4	3	2	1
22	データや統計を使用した実態の把握を意識している。	5	4	3	2	1
23	相手の特徴や個性に合わせた対応をする。	5	4	3	2	1
24	問題を自分だけで解決しようとする。					
25	人と話すことが好きである。	5	4	3	2	1
26	他者の話を丁寧に聞く。	5	4	3	2	1
27	相手の立場で考えることを意識している。	5	4	3	2	1
28	教員との協働を意識している。	5	4	3	2	1

Q14. 大学における教育や学生について、あなたの行動、態度、認識として、それぞれ、あてはまるもの1つを選択してください。(必須)

No	項目	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	性、人種、国籍等の多様性を理解している。	5	4	3	2	1
2	学生が晒される危険やリスクへの対応を知っている。	5	4	3	2	1
3	現代の学生・若年者をめぐる課題や問題状況に関心がある。	5	4	3	2	1
4	個々の学生の家庭環境や家族関係が多様であることを理解しようとしている。	5	4	3	2	1
5	学生のメンタルヘルスに関する知識に関心がある。	5	4	3	2	1
6	学生が参加できる学内外の学習機会を把握している。	5	4	3	2	1
7	カリキュラムマネジメントについて関心がある。	5	4	3	2	1
8	単位制度について説明できる。	5	4	3	2	1
9	学生の学習や発達についての専門的な知識に関心がある。	5	4	3	2	1
10	学内の教育環境・設備を把握している。	5	4	3	2	1
11	様々な教育方法に関心がある。	5	4	3	2	1
12	文部科学省や中央教育審議会等の政策文書を読んでいる。	5	4	3	2	1
13	各専門分野の教育について動向に関心がある。	5	4	3	2	1
14	学校教育法や大学設置基準等の関連法規を理解している。	5	4	3	2	1
15	高等教育の制度や歴史を理解している。	5	4	3	2	1
16	学内規程を理解している。	5	4	3	2	1
17	障害をもつ学生へ支援のあり方に関心がある。	5	4	3	2	1
18	留学生への支援のあり方に関心がある。	5	4	3	2	1
19	資料収集や調査等の方法を理解している。	5	4	3	2	1

Q15：あなたは教育支援・学修支援の専門性を構成する能力として、どのような内容の知識や能力が必要だと思いますか。それぞれ、あてはまるもの1つを選択してください。(必須)

No	項目	必要である	ある程度必要である	どちらともいえない	あまり必要ではない	必要でない
1	大学教育における現代的課題	5	4	3	2	1
2	高等教育政策の動向	5	4	3	2	1
3	大学で教育研究されている学問領域全体の体系・内容・構造	5	4	3	2	1
4	各専門分野領域の教育課程の特徴や教育改革課題	5	4	3	2	1
5	学生の学習や発達	5	4	3	2	1
6	発達障害や障害学生支援	5	4	3	2	1
7	学生に対する学習上の助言のあり方	5	4	3	2	1
8	様々な教育方法・教育評価	5	4	3	2	1
9	カリキュラム運営・開発	5	4	3	2	1
10	授業改善・教材開発	5	4	3	2	1
11	海外留学・留学生支援のあり方	5	4	3	2	1
12	現代の学生・若者をめぐる状況や課題	5	4	3	2	1
13	接遇等の対人関係スキル	5	4	3	2	1
14	各種資格やその取得に関する情報	5	4	3	2	1
15	学生のキャリア形成や就職支援のあり方	5	4	3	2	1

Q16. 教育支援・学修支援の専門性について、あなたが必要と思う知識・能力・資質があれば、自由に入力してください。

Q17: あなたは、「教育支援」や「学修支援」に関して、どのような研修を受けてみたいですか。自由に入力してください。

< 3. その他、本調査について意見、感想などがあれば、自由に入力してください。 >

調査は以上です。ご協力頂き、ありがとうございました。

なお、本調査の Q.2～10 の質問項目は、東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センターによる「全国大学事務職員調査」(2010年)の調査項目を参考に作成しました。



2015年12月7日 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
教育関係共同利用拠点 ALPS プログラム キックオフシンポジウム  
「教育・学修支援専門職の確立に向けて」 参加者アンケート

当日参加者数： 110名（アカデミック・リンク・センター・附属図書館関係者を除く）アンケート提出数： 69件

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、教育関係共同利用拠点として、「教育・学修支援専門職」の養成のために必要な研修プログラムの構築・運営の準備に取り組んでいます。今後の活動のために、本日のシンポジウムに参加されたご意見・ご感想をお寄せください。なお、記載いただいたご意見・ご感想は、個人名・組織名が特定できないかたちで公開する場合があります。

1. 本日のシンポジウムで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- ・ 専門職制度の一方で、異動スパンの運用で改善できることは多いと感じていた。そのことに言及されている方が複数おられたのが、いい意味で意外だった。
- ・ 教職協働の新たな展開の方向性についてのヒントを得ることができました。
- ・ 「教職協働」の実現のためには、やはり職員の力量をアップするしかないという現実を再認識した。
- ・ 篠田先生のお話では、中教審で専門的職員の配置に関連して大学設置基準の改正を検討されているという点が非常に印象的でした。羽田先生のお話は、東北大学での事例を交えて、網羅的かつ具体的にお話いただき、大変刺激を受けました。
- ・ 中教審の動き、事務職員の可能性。
- ・ 学習（修）支援の専門職の必要性が図書館だけではなく学内全体に欠かせないもの、影響を与えるものなのだということがよく分かりました。コア・コンピテンシーの考え方や、事務職員の地位、あり方の向上、専門職スタッフの雇用形態などが初めての視点ばかりで、それでも全て、その必要性が明確に説明されていることに驚くと同時に、今、自分が携わっている業務をもっと広い視野で捉え直したいと思いました。
- ・ 趣旨が大変よくわかりました（竹内先生のお話）。篠田先生の「部分最適から全体最適への視野の広がり」が大事」というお話、その通りだと思いました。規程の改正という手段が必要だということも、理解できました。ゼネラルな基礎能力のあるスペシャリストの育成が図書館においても重要だと思いました。「学長を支える」というのは、以前から言われているスタッフも経営者の視点を持つということと同じことだと思います。羽田先生のお話では学生支援というものの幅広さ、深さを感じました。難しさも、おっしゃるとおり、全てを統括するのは、教育担当副学長しかないと思いますが、個々の部署の人材の育成について、より具体的に考えたいと思いました。
- ・ 中教審での論議の概略。大学職員のあるべき姿—具体例。羽田先生のお話では近代的大学教育の歴史から現況まで、具体例が興味深い。
- ・ 高等教育における教育・学修支援専門職の必要性を認識した。
- ・ 「教育・学修支援専門職は全体を見ることができる」という羽田先生のお言葉がすっとおちました。専門職業教育を行っている、国や諸外国の教育全体を見る力が弱いと日々感じておりましたが、認識として間違っていないことが理解できました。
- ・ 最近の大学教育部会では、3つのポリシーと認証評価の議論が中心となっているが、専門職も同様に重要であることがわかった。今後の教育部会でも、この問題は重要な課題であり、平成28年も継続して検討していただきたい。
- ・ 部・課・係を廃止し、プロジェクト型の組織という考えには共感いたします。SDは人をデザイン設計することであると勝手に定義して、経営を核にしていくものだと考えると自分としては整理できる気がします。

次頁に続く

- ・ 中教審で大学職員の専門性について議論が進んでいることがよくわかった。
- ・ 専門職を作る際のキャリアアップやリスクについて。学生支援の必要性。
- ・ 教育・学修支援が大学全体で進める必要があること、統一体としての支援であることがわかった。
- ・ 羽田先生の講演は、国立大学の現状がよく理解できた。私大職員と国立大職員の違い。組織風土改革と制度化。
- ・ 国立大学における人事政策の大変さ。
- ・ 篠田先生のご講演は、大学における行政職としての職員のあり方について語っていただき、羽田先生については、これからの大学の教育・学生支援的な動きの中での新たな職種とキャンパス等についての設計の問題点という課題の提示であったと思う。私立大学における喫緊の課題と国立大学の喫緊の課題という印象で、参考になった。
- ・ 教員と職員の任務がわかれているものであると認識していたが、昨今の状況の変化から、融合する必要があることがわかった。
- ・ FDと比べると、まだまだSDについては整備されていない部分が多く、また個人での自主的なSD中心であったため、組織的にSDを行うという考えは、新たな発見であった。
- ・ 「教育学修支援」と聞くと“学術的という面の”というイメージを抱いていましたが、それを覆されたことが大きかったです。
- ・ 本学では、まだ職員が教育面で学生に関与しているという認識が薄いですが、本日のシンポジウムで今後職員に求められる能力や可能性を再認識できたと思います。
- ・ 学生中心という意識を持つことで、日本は変わると感じております。大学という場での出会いが有意義だったという学生が増えるように関わっていきたいと思います。
- ・ これからの学修支援と組織のあり方
- ・ 大学職員の専門性に対する議論が部会等で進んでいること
- ・ 職員1人1人のマインドチェンジがいかに重要かということ。
- ・ 組織の組み方に対する羽田先生の話(プロジェクトベースのチーム)
- ・ 篠田先生のお話で、今後の方向性について見通しを得た。教育・学修支援専門職のコア・コンピテンシーについて示唆を得た。
- ・ 大学職員の専門的力量とは。資料や話の内容を通じて知ることが出来た。
- ・ スペシャリストやゼネラリストの育成と両立。教職協働の難しさについて改めて理解できた。
- ・ 教育学修(習)支援を必要とする分野の幅広さと、その職が担うべき(知識として持つべき)分野の広さと難しさ。
- ・ 教員のマンパワーで対処するのではなく、職員の力を借りて、さらにその力に磨きをかけて対処すべきである、という方針。
- ・ 教育・学修支援の専門職員としては、様々なキャリアを持った人材が各組織でこれにつくことばかり考えていましたが、羽田先生の「これからの全体を理解し、調整能力を持った人材」という言葉に視野が大きく開かれた思いがしました。

次頁に続く

- ・ 総合的な分析、解決、提案できる人材の必要
- ・ 羽田先生の大学の成り立ちからなる学習支援についてが、学習支援を考える上で、とても役に立つと感じた。
- ・ 大学職員の地位向上への道筋ができたと感じた。
- ・ 組織運営の際に国立大学では多くのルール・制限があり、改革の足かせとなっていることがわかり、だからこそこのような先進的な取り組みに熱心でおられることもわかりました。
- ・ 専門職に対する異動の考え方を知ることができた。
- ・ 個々の職員が能力をあげる研修を受けても、制度等を変えてそれを生かす場を作らなければ、そのような取り組みが広がらないこと。
- ・ 知識のみではなく、道理も身につけさせる教育が必要。大学全体の組織として全学的な取り組みが必須。
- ・ 今後の大学職員の展望。職員として大学への関わり方の方向性。
- ・ 国が中心になって進めてきていることがよく理解できました。
- ・ 大学院生・ポスドクについて考慮されていたことが良かった。
- ・ SD の従来のイメージや枠組みを超えて、歴史や国際的な動向をふまえながら求められる人材像について考えることができた。
- ・ 千葉大がやろうとしていることがよくわかりました。(不勉強で今まで存じ上げずすみません)千葉大の中で完結するものではないということに大きな期待を感じます。
- ・ 羽田先生の講演で、具体的な教育・学習支援専門職のあり方がわかった。ディスカッションの羽田先生の部課系の廃止という提案は目からウロコ。現在組織的に無理だが、気持ち的には様々なプロジェクトに取り組みたい。
- ・ 中教審で大学職員の資質の向上、事務組織の見直しについて議論されていることを不勉強ながら改めて理解しました。医学部単科大学としてどう取り組めるのかを考えさせられました。
- ・ 学修支援という概念の射程のかかなりの広さ。一体この広さをどのくらいの方が理解しているのか。
- ・ 大学として、学生の発達・人間力を育てるという目標・取り組みがあり、それに教員と職員が一緒に取り組んでいく必要があるという大枠の部分。
- ・ 個人ではなく、組織としてのSDの考え方
- ・ 職員として働き始め2年目ですが、大学の規模や経歴によって“職員としての在り方”が異なり、立ち位置がよく分からない状態が続いていました。今日の話の中で「身分の話」「中教審の教え」等を伺い、現状の把握ができました。

## 2. 本日のシンポジウムで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- ・ アドミニストレーターとアカデミックアドミニストレーターの違い
- ・ 「教職協働」を教員側がはたして必要と感じているか、という点については(これもやはり)あいまいな状態にあることは問題意識として残ったままであった。
- ・ 現行の組織改革の問題点

次頁に続く

- ・ 竹内先生より、現在検討中の ALPS プログラムのご紹介があり、まずは教育・学修支援専門職に必要な能力ルーブリックを開発され、段階的に研修プログラムを構築されるとのことでしたが、2016 年度中のプログラムを大変楽しみにしております。
- ・ 正課→教員主体、非正課→職員主体、と 2 極化していつてしまうのか？教職協働の事例をもっと知りたい。
- ・ 学習支援と学修支援、ご講演をされた先生方の中でも 2 通りありそうでしたが、どのように捉えていらっしゃるのか (ALPS としてはどちらかに統一されるのでしょうか…?) 気になりました。また、専門職の育成プログラムというのは具体的にどのようなものなのか知りたい(受けてみたい)と感じました。履修証明ということは受講すればよいという意味でしょうか？試験があるのでしょうか？
- ・ 教職協働は理解しているが、教員の職員に対する見方が変わらなければ教育・学修専門職は生きてこないのではないかと。専門職として必要な例示を知りたい点でした。
- ・ スペシャリティを持ったゼネラリストの養成を行う具体的な研修内容。会場からの質問が出ていましたが、自大学でどのようにすべきなのか、自分の課題でもあると感じました。
- ・ 例えば、千葉大学で履修証明プログラムを展開し、修了された職員のキャリアパス等を明確にしないと、いつまでも高度専門職のままではモチベーションが下がる心配がある。それらをどのように克服するのが必要ではないかと思う。
- ・ 職員と教育では労働条件が異なるので、人事異動・昇進だけでなく、そこも本学では課題と受け止めています。が、いかがでしょうか。
- ・ 専門職員が大学でどのように位置付けられるのか、身分保障やキャリアアップについてどこがマネジメントするのか、各部署で行うのか。
- ・ 大学職員をアドミニストレーター(専門職)として捉えるのか？もしくは、教育・学修支援のプロフェッショナル(専門職)として捉えるのか？
- ・ 個々の大学の教育目標(ディプロマシー)に応じた形になると思うが、人材に余裕がなく、もぐらたたきのような業務が続いている中では、困難であると考えた。
- ・ 本学の技術職員です。技術職員が ALPS の SD プログラムを経て、教育学修支援専門職になるような可能性はありますでしょうか？(大学運営等のスキルはありませんが)
- ・ 個人のレベルアップではなく、大学全体のレベルアップ
- ・ 職員がスキルの高度になることだけが強調されると、単なる職員のプレッシャーだけになってしまうと感じた。他施策と併せて進めることが重要であると思う。
- ・ 定型・定常的業務が少ない現状を鑑みた際、新たな業務(PJ 型、組織横断型、専門職)に対して、前向きに捉え、取り組むための仕掛け、意識付けのやり方を聞いてみたかった。
- ・ 職員のキャリア形成のあり方
- ・ 能力ルーブリックについて
- ・ 専門性を高めることと、人事異動をどのように実現させるか。
- ・ 実践的 SD プログラム(履修証明)の内容→シンポジウムというよりも、拠点事業として。千葉大プログラムのターゲット(対象者)。

次頁に続く

- ・ やはり、具体的に作業項目として、何を挙げるべきかです。
- ・ このプログラムで具体的にどういうSDを行うのかのポイントだけでも知りたかった。
- ・ 疑問として国立大学の新卒採用は現行のままで、本当に効率的であるのかという点。公務員と併願する人が多く、それこそ事務処理というイメージを持って応募する人が多いのではないか。
- ・ 教職員との協働を成功させることができるか疑問。
- ・ 教育・学習支援専門職確立の具体的な見通しについて。
- ・ 私立大学の職員です。国立との違いに戸惑いを感じます。世界の教育事情についても勉強になりました。
- ・ 教員が職員を低く見ているというか、職員は教員が言うことだけをやっていけばいいという風潮はまだありますか？
- ・ 教育・学修支援専門職という「職種」ができるのか、ということ。それと図書館員の関わり。図書館員という概念を捨てなければならないのかということ。(ディスカッションでおっしゃりたいことは大体わかりました)

### 3. 大学における教育・学修支援の在り方についてのお考え、ご所属先での取組事例やご存知の特徴ある事例などがあればお書きください。

- ・ ラーニングコモンズ運営プロジェクトを今年度より教員、職員で開始するところです。
- ・ 本学図書館は、キャリアカフェ、グローバルスタディコーナーといった「場」や、そこに備えているコンテンツを活用し、図書館の中で、キャリア支援、留学支援を行っています。(各センターの人が図書館で実施)また、LALA (Library Academic Learning Adviser)が、ラーニングコモンズで学修支援を行っており、更に、AO入試で図書館入試という新しいチャレンジをすることになっています。これらを体系化し、人材育成を行っていくという取り組みには大変共感しますし、ぜひ一緒に検討、実践していければと思っております。
- ・ 職員の人事異動の面からみると、10年入試、10年以上教務をしている者がいるとするなら、一歩進んだ専門職として次に学ぶことを示さなければ効果が生まれません。具体的に何が必要なのか魅力を見せることが大切だと思います。
- ・ 人的リソース不足(私の印象では)で、なかなか取り組みは難しい状況。ただし、留学生支援(受け入れ)については実績があり、宗教的文化的なケアは配慮している。
- ・ 本学では、大学の教育の質を向上させるため、教育職員協働で5つのプロジェクトを組んで活動しています。従前の教育は教員の領域という概念から、共に大学教育を礎いていくという活動を実践しています。ただ、教育支援専門職の育成はまだこれからと考えています。
- ・ 私共の学園は、教員・職員という呼び方を嫌い、「教職員」という言葉を使っております。その中でゼネラリスト・スペシャリストとしてのキャリアアップも枠組みはあるものの、理想を埋めるだけの現実とのギャップは難しく、コア・コンピテンシーの共有、育成ルーブリックの見える化が必要であると感じました。
- ・ 本学では、教授会のメンバー(構成員として議決権有)に事務職員(学部長補佐)が規程づけられています。また所属している教育開発機構は職員も構成員として研究員になっています。
- ・ 図書館職員として出来るレベルが越えそうな感想を持ちました。とても刺激的なシンポでした。
- ・ 今年度より学修支援専門スタッフを常駐させた。

次頁に続く

- ・ 教員によっては教育分野に事務職員が(入ることに)拒否反応を示す場合がある。教員の理解も必要があると思う。教育組織と図書館の連携の協議会を発足し、支援モデルを検討し始めた。
- ・ ICT やインストラクショナルデザイン等に関する教員・職員の協同プロジェクトが本学の課題であると考えている。
- ・ 6年制及び4年制の単科の薬科大学から来ました。本学の事務職は、大学等以外の職域からの定年退職者が多く採用されており、大学全体の方向性を組織として決定していくことは理解できるが、教育関連の専門性を深めていくことが課題であると考えた。大学それぞれが方向性を決める必要があると思料する。
- ・ 教職協働と企業協働が考えられると思う。いくつかの大学で委託されて入っている職員は、学修支援者として活躍されている。
- ・ これまで本学では新任者に対する研修が充実しているとは言えなかったが、今年から学内の各部課長によるオムニバス型の研修がはじまったため、専門知識を身につけるきっかけになっているかと感じた。
- ・ 附属(併設)校教員による学修支援(基礎教育センター)※授業復習、学び直し、TOEIC 対策 etc
- ・ お恥ずかしながら、対処療法的に、相談に来た学生に個別に対応しております。
- ・ 職員の質向上のため研修会を行っている。
- ・ 現在学内で教育・学修支援職に向けての動きがある。今回のシンポジウムの参加で具体的なあり方が理解できた。
- ・ 様々な視点で学内資源を理解した上で、分かりやすい例としては、各種補助金獲得等に結びつけている。
- ・ 私が現在所属している「学習センター」は、開設から9年目を迎え、課外の学習支援に留まらず、正課授業やFDとの連携を強化していくべきかと考えております。

#### 4. 本日のシンポジウムの内容について等、その他、自由にご意見をお書きください。

- ・ 消化や実践に時間のかかる内容でしたが、大小の実践を積み重ねていくことも大事だと感じました。
- ・ 本学は小規模大学で遅れていることばかりかと感じていましたが、教務をはじめとした各委員会は職員も正規メンバーとして参加しているなど、当たり前と思っていたことがそれほど当たり前でなかったことに逆に驚きを感じました。但し大きな問題点として、その状況を職員側で活用しきれていないように感じます。
- ・ 本日のシンポジウムをはじめ、取り組みについての発信と意見交換の機会を多く設けていただけるとありがたいです。
- ・ 「学修支援専門職」としては必要ないかもしれないが、ごく一般的なレベルでのSDは教員側にも課すことが必要ではないかと感じた。
- ・ 都内近郊では、教育・学修支援専門職に関するセミナー等が少ないので、このような機会を設けていただけて大変有難いです。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。
- ・ 今年度から職員研修担当となり、他大学とのSDプログラムの企画を考えており、参加しました。
- ・ 上記の内容は休憩時間に書いたものなので、パネルディスカッションと少しずれていたら申し訳ありません。ここには書ききれないほど刺激的で新しいヒントをたくさん頂きました。ありがとうございました！
- ・ 先進的な取り組みに刺激を受けました。

次頁に続く

- ・ 図書館での専門性を磨きながら、大学全体の必要とされる役割や状況把握も必要だと感じた。幅広い分野を展望できる人材が新しい教育・学修支援専門職として求められていると認識。
- ・ 西葛西というとても近い場所にある学園として、千葉大学さんの今後の情報をタイムリーにいただくことができると、とてもありがたいと思います。専門・大学関係なく、日本の高等教育機関としての成長に尽力したいと思います。
- ・ 充実した内容で、大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ ①学生の学修成果を把握測定するために「学生支援型 IR」を推進するためには、どのような事が重要視されるのかなどを ALPS で検討していただければ幸いです。②能力ルーブリックは、公開されていますか？
- ・ 参考になるお話をできると思います。是非本学までお問い合わせください。
- ・ 大学のトップに聞いてもらいたい内容であった。
- ・ 図書館関係者として本シンポジウムに参加したが、むしろ教務学生等の課に関係することがわかり、他部課と情報を共有ことにする。
- ・ メモを取りたいお話がたくさんある中で、イスだけという環境は厳しかったです。他の会場はなかったのでしょうか。
- ・ 理念、理想は大変よく分かりましたが、いかにそれを実践していくのが肝要かと思います。それが貴センターの目的の一つだと思いますので、今後の情報発信に期待しています。
- ・ 部局にこだわるのは主旨に反するものかもしれませんが、現状無視できないものかと思います。図書館として、図書館職員としてという内容も聞いてみたかったです。
- ・ これからの第一歩として、今後も本テーマを注視していきたい。
- ・ 人事異動のある日本の大学でどう「スペシャリティを持ったゼネラリスト」や「ゼネラルな知識を持ったスペシャリスト」を育成していくのか、に焦点を絞ったセミナーを企画していただきたいです。(パネルディスカッションの最後のトピックに関連したもの)
- ・ パネルディスカッションが深い内容で興味深かったです。特に羽田先生の「部署は不要である」という考え方は縦社会の大学組織で求められていることだと思いました。
- ・ 本日は貴重なお話をありがとうございました。私は入職 2 年目で、まだ大学についての知識の少なさに情けなく思いますが、自分のキャリアのことや大学を支える職員の 1 人として今後のあり方をしっかり考えようと思いました。
- ・ 図書館職員以外の教職員も参加すべき、良いシンポジウム内容であった。
- ・ 大変有意義な時間でした。
- ・ 具体的事例の紹介。文部科学省が目指している“大学像”。
- ・ シンポジウムに参加して良かった。
- ・ 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ テーブルがある方が良かった。
- ・ 部屋が暑かったです。机があればなお良かったです。
- ・ トップマネジメント(理事会)との連携をどのようにしていくべきなのかを課題として持っています。

次頁に続く





2015年11月19日 千葉大学アカデミック・リンク・センター 1棟1階コンテンツスタジオ  
千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPS セミナー  
「大学の新しい学修支援：ICUにおけるアカデミックプランニング・センターの事例から」  
参加者アンケート集計結果

当日参加者数： 45名（アカデミック・リンク・センター・附属図書館関係者を除く）アンケート提出数： 32件

千葉大学アカデミック・リンク・センターでは、「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成することを目的とし、デジタル時代における大学の学習教育環境の改革に取り組んでいきます。今後の活動のために、本日のセミナーに参加されたご意見・ご感想をお寄せください。

1. 本日のセミナーで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- ・メジャー選択の具体的イメージ
- ・アドヴァイジングの具体的内容
- ・ICUのリベラル・アーツ教育についてよく分かり、非常に共感する部分が大きかった。私自身の卒業大学（学部）がレイトスペシャライゼーションを採用しており、幅広い科目群から自ら学びを採択していくという類似が多かったからだと思う。
- ・教員と職員の信頼関係と職員自身の役割の認識、向上心が重要だと感じました。
- ・IBSのような組織の構想の前に「アドヴァイジングとは」から伺えたのは大切な機会でした。さらに勉強が必要と感じました。
- ・学生が動くまで、スタッフはじっと我慢をして待つことで自主性を育てる。
- ・アカデミックアドヴァイジングという領域があり、NACADAという組織があることが発見でした。
- ・時宜にかなった話をお聞きすることができありがたかった。
- ・本学が実施していくSULAにもとても参考になるお話でした。
- ・理念、プロフェッショナル意識、何が重要なのかを示していただいたと感じています。ありがとうございます。
- ・大学の理念を根底に、教員・職員・学生と協働するチームワークの良さを実感できた。
- ・ICUの事例をきき、APCについてよくわかった。
- ・学修支援について、非常に明確な説明をありがとうございました。
- ・ICUの教学システム、アカデミックプランニング・センターの運営について。
- ・教員・職員・学生と三者共同で成果をあげている大学、部署の事例を知ることができて参考となりました。
- ・APCにおけるアドヴァイジングが支援ではなく、教育であるという意識をもって行われていること。
- ・プランニングの重要性、大学全体の方針とのリンク、専門職員の大切さ。
- ・支援ではなく、「教育」ということ。
- ・学修支援というものが具体的にどんなことをするのか、ということがよくわかりました。
- ・モチベーションを持ち続けることの大切さに気付きました。
- ・学修支援における学生生活用、組織形成の方法。
- ・アカデミックアドヴァイジングという専門領域があることを初めて知った。
- ・熱のこもった講演ですばらしかった。学修支援についてのイメージがわきました。
- ・ICUではアカデミックプランニング・センターをはじめ、専門的な部署が多数あり、連携して学生を支援されていることがわかりました。大変参考になりました。

次頁に続く

- ・ICUの理念、アドヴァイジングについて。テクニカルライティングとは全くべつのサポートということ。
- ・学生スタッフの運用について
- ・学生との協働の仕方
- ・ICUさんの先進的な学生支援については全てが新しく、とても役に立つお話でした。
- ・APCの取り組みがよく理解できた。どのような形で本学に活かせるかを職員で検討したい。
- ・ICUの学生の学習計画の自由度の高さとそのためにもアカデミックプランニング・センターの重要性がよくわかりました。
- ・学生スタッフIBSの活動や位置づけが大変新しい情報として参考になりました。
- ・学生にアドヴァイジングに参画させることは本学でも実行すべきだと思った。(SULAの取り組みへ)

## 2. 本日のセミナーで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- ・IBS立ち上げに到るプロセスも具体的に伺いたいです。
- ・予算、IBSの採用方法。
- ・支援と教育の違いはよくわかりませんでした。
- ・どのくらいの経営規模でセンターが運営されているのか。(予算規模など)
- ・特にありません。有難うございました。
- ・大学院生の運用について。ただし、アドヴァイジングに限るのであれば、たしかに不要かとも考えた。
- ・教員がどう見ているのか。教員との関係。
- ・IBSを採用する際のポイントや、3年間皆継続されるのかなども、伺えるとよかった。⇒質疑応答の中でお話が伺えました。

## 3. 今後もアカデミック・リンクではセミナーやシンポジウムを企画していきます。そこで、取り上げてほしいテーマや講師があれば、お書きください。

- ・ラーニングコモンズの運営（ソフト面について）
- ・ラーニングコモンズの分析（成果面について）
- ・ラーニングコモンズにおける学習、アクティブラーニングを促進、発展させる方法
- ・授業改革や学修支援の必要性とあり方
- ・学生の探究的な学習を促進するための取り組みやしなひ（大学図書館や、大学の授業の中で等）
- ・ラーニングコモンズ設置は進んでいるので、それを一歩先に進めている事例を紹介してほしいです。
- ・社会人（特に退職後の人たち）が大学・大学院に入学している現状の把握について。
- ・12/7（月）のシンポジウムにも参加させていただきます。その際ALPSプログラムの全容（またはプラン）について伺いと嬉しいです。
- ・内容はICUの理念を前提とした取り組みであった。ICUさんはかなり特別なカリキュラムを組んでいらっしゃるようですので、他の“一般的な”カリキュラムの大学の事例があれば聞いてみたい。
- ・ラーニングコモンズの事例（導入の効果→効果的な運用のためのノウハウ等）
- ・アカデミック・リンク・センターを是非見学したい。（機会を設けていただければと思います。）
- ・ALPSプログラムの「新しい教育の開発・企画力」の点に興味があります。これらに関してどんな取り組みを考えているか紹介してほしいと思います。

4. 本日のセミナーの内容について等、その他、自由にご意見をお書きください。

- ・今までに何回か参加させて頂きましたが、いつも得るものが多く刺激を受けています。どうもありがとうございました。
- ・小林先生、大枝さまの中身の濃いお話ありがとうございました。
- ・とても貴重なお話をありがとうございました。
- ・学修支援というものが、何をどこまでやるものなのか、ということがわかり良かったです。
- ・学習支援の一つの在り方として非常に参考になった。
- ・事務畑と研究畑が出会う場、組織が今後必要なのだと思った。その際、学生も、学部生だけでなく院生（修士・博士）も参画する方が良さだろう。
- ・講演の内容はもちろん、質疑応答でも具体的なお話を伺うことができ、大変参考になりました。ラーニングコモンズ系の業務は先進的なため、担当職員同士で集まる機会が少ないので、今後もこのような場を作って頂けると嬉しいです。有難うございました。
- ・長く質疑時間をとっていただけたのが、大変良かった。
- ・楽しく学ぶことができました。

5. 次の（１）、（２）について、該当するものに○をつけてください。

- (1) a. 学外から参加 23名 b. 学内からの参加 9名
- (2) a. 学生 2名 b. 教員 4名 c. 大学職員(図書館職員を除く) 11名 d. 図書館職員 11名  
e. 出版関係 0名 f. その他 1名(回答なし3名)

6. セミナーを何で知りましたか？(複数回答あり)

- a. Web(アカデミック・リンク・センター) 4名 b. Web(図書館) 1名 c. Web(千葉大学) 2名  
d. 図書館内電子掲示 0名 e. ポスター 0名 f. センターからのメール 11名  
g. Facebook・Twitter 1名 h. その他 13名(部局からのメール、国大図協、私大図協からのメール等)  
(回答なし2名)

千葉大学 アカデミック・リンク・センターでは、セミナーの開催や関連する情報を提供しています。これらの情報を希望される方は、お名前・ご所属・メールアドレスをご記入ください。(既に登録されている方は引き続きお届けしますので、空欄で結構です)

お名前：( )

ご所属：( )

電子メールアドレス：  申込時に申請したもの  それ以外( )

ご協力ありがとうございました。

※12名が新規に継続的な情報提供を希望

2016年2月19日 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPS セミナー  
「障害者差別解消法と学修支援」 参加者アンケート集計結果

当日参加者数： 52名（アカデミック・リンク・センター・附属図書館関係者を除く）アンケート提出数： 38件

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、教育関係共同利用拠点として、「教育・学修支援専門職」の養成のために必要な研修プログラムの構築・運営の準備に取り組んでいきます。今後の活動のために、本日のシンポジウムに参加されたご意見・ご感想をお寄せください。なお、記載いただいたご意見・ご感想は、個人名・組織名が特定できないかたちで公開する場合があります。

1. 本日のセミナーで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- ・主として図書館への支援に興味があり参加しましたが、障害者差別解消法を多角的に理解できたとともに、実例を深く知ることができ有益でした。
- ・障害者への様々な支援について初めて聞くことばかりでした。
- ・著作権との関係がよくわかりました。
- ・大変参考になりました。
- ・障害学生への支援については、本学も委員会がありますが、それほど支援の実践がありません。4月からは聴覚障害の学生が入学してきますので、他大学の先進的な事例をきき大変参考になりました。
- ・ノートテイクを知らなかったの、支援方法として興味深かった。
- ・ノートテイクについて。
- ・学生のために図書館が法律にかかわることまで配慮されているのだなと感じた。
- ・37条のガイドラインの存在は知っていたが、正直運用の方法についてはよくわかっていなかった。細かな内容、それぞれの運用のために必要な配慮等よく理解できた。
- ・2016・4前にまさに必要としている内容のセミナーでとても助かり有り難いものだった。
- ・37条のガイドラインと DCR、etc.の支援業務について知ることができた。本学でも状況を確認して参考にしたい。
- ・障害者支援として、「著作権法のガイドライン」と「ノートテイク」という具体的な事例を初めて知りました。（全く専門外ですので）。個々のボランティアや専任職員のご尽力の上になりたっていること、改めて素晴らしい取り組みだと認識しました。
- ・著作権法37条ガイドラインの策定経緯に興味深かったです。
- ・ノートテイクについて。
- ・立命館大学の支援学習の実態について。
- ・講演1では、基本的なことが押えられ、講演2、3では具体的事例を聞くことができ有意義でした。
- ・ノートテイクを初めて目にすることができました。
- ・ノートテイク会の具体的な活動状況を聞くことができ、大変興味深かったです。
- ・著作権法第37条のガイドライン作成のために、図書館団体と権利者団体で1年にもわたって交渉がありその交渉の結果このガイドラインが出来たというのを今日のセミナーで初めて知りました。
- ・著作権法第37条ガイドラインが作られた背景、大学でのとりくみ（図書館の学修支援、情報提供）
- ・ノートテイクの実際
- ・所蔵資料でなくてもよいこと。
- ・コーディネーターの役割が重要であること。
- ・千葉大のノートテイク会のことを改めてきちんと聞くことができ勉強になりました。また立命館大学の事例（視覚障がい）も新たな学びでした。（ALCだから仕方ないかもしれないが、図書館のことに特化しすぎ？）
- ・著作権方37条ガイドラインの経緯と内容

（次ページに続く）

- ・障害の種類と程度はその大学（図書館）の判断によるという部分がよいのか悪いのか（利用者にとって）。図書館によって差が生じることを意味することがわかりました。千葉大の取り組みがとても参考になりました。
- ・障害者への資料提供の流れがよくわかりました。
- ・ノートテイクの実際の活動は大変ではあるが、やりがいのある活動であることがよくわかりました。
- ・具体的な話が聞けて良かったです。
- ・図書館の対応が理解できた。
- ・障害者に対応したサービスが国立大学を中心に行われていることがわかった。
- ・著作権法第37条のガイドラインについて詳細に説明いただき、大変よくわかった。何ができるかできないかをしっかり考えてみたい。
- ・著作権にまつわる障害者へのサービスの弊害について、また解消法について理解することができました。ありがとうございました。
- ・著作権法第37条の解釈について聴くことができ大変参考になりました。今回の講演で、様々な形の障害をもつ方々に柔軟な対応がとれるとわかりました。
- ・ガイドラインの意義と策定のご苦労
- ・実際に障害のある学生を支援している状況、よくわかりました。
- ・障害者差別解消法の施行にともなって行うべきこと。

## 2. 本日のセミナーで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- ・もう少し時間があれば。
- ・manaba+R で提供しているのは音声？
- ・他機関とのデータ相互利用の展望について。他大学と協力すれば、かなりのデータ共用ができるのでは？
- ・視覚、聴覚障害といった比較的理解しやすい障害の支援ではなく、また体力的な支援も必要となる肢体不自由等については、どのような方針がとれるのでしょうか。
- ・身体障害者以外の障害者への支援は今後どのように実現していけるのでしょうか。
- ・障害者差別解消法の概要がかんたんにでも説明があると理解がさらに進んだと思いました。
- ・障害者差別解消法の条文が参考資料としてあると良かったと思います。
- ・障害者支援室（学修支援体制）というのはどの大学でも設置されているのか（義務？）
- ・図書館と支援室の連携のしくみなど。支援室の位置づけ。
- ・大変難しいとは思いますが、『発達障がい』（精神障がい含）への先進的取り組みについても紹介してほしいと思いました。数的には（暗数含め）多いと思うので。
- ・37条ガイドラインの現実的な運用状況（各大学での実績）
- ・音声を文字にするシステムが開発されていないのか。コンピュータ会社と提携できるのでは？
- ・書店がテキストデータを提供することはできないのか。（冊子とデータ両方購入）
- ・わからなかったことは特になし。
- ・図書館資料のテキストデータ化について、データ化作業の内容をもっと詳しく知りたいと思いました。（たとえば完成したファイルの形式や校正作業の様子など。）
- ・また、テキストデータを実際に利用している様子、どのような形で利用されているか（拡大表示？）が知りたいと思いました。

3. 大学における教育・学修支援の在り方についてのお考え、ご所属先での取組事例やご存知の特徴ある事例などがあればお書きください。

- ・自閉症など発達障がいのある生徒（主に高校生）が大学に進学した後に、おこりうる問題（キャンパスライフを含め）を解消していきたいと思っています。
- ・まさに来年度、図書館での新しい取り組みを計画しています。
- ・障がい者についての関心や理解が少ないと感じる。（千葉大自体において）
- ・発達障害 視覚上に見落としがある。目に見えても注意が行き届いていないで支援が必要（な人への事例。学生対象ではない）
- ・大がかりな障害学生支援体制は、学生部主体で既に整備され、現に毎年多数の様々な障害学生学修支援が実現できている。しかし、図書館との連携は不十分で課題。
- ・本学は支援部署がないため、各学部学科単位で独自に支援を行っているため大学として統一した支援体制を作りたいと今考えています。（学部学科の独自性が高いため統一行動をとらない）
- ・本学でも視覚障害者が入学しており、図書のテキスト化を始めています。しかし、まだまだ手探り状況ですので、他大学の事例を参考にと考えています。
- ・販売しているオーディオブックをうまく活用できればと思っています。
- ・特にないが、来年度肢体不自由（座位を保つことができない）学生が推薦入試で入学することが決まったので図書館含めて全学体制で支援に取り組む必要がある。
- ・『発達障害』学生への支援では、まなびが多いと思われる大学がいくつかある。（ex.発達障がいの学生さんがノートテイクするという事例！ピアサポートとか！発達障がいのグループ活動、障がい学生支援コーディネーターもおられるし！）
- ・聴覚障害の学生の増減の話がありましたが、支援する上で増減はかなり大きな課題と思います。
- ・現状では特に説明できる事例がありません。
- ・「実績がない。→予算が出ない。→実績が作れない。」という仕組みのなかで、もし新入学生に障害のある学生がいた場合、新学期4月5月にどんな支援ができるのか、心もとないです。教員と職員のチームワークもとても重要だと感じました。
- ・視覚障害の学生を昨年受け入れましたが、彼らは自分の力で学業をこなしていたように思います。

4. 本日のセミナーの内容について等、その他、自由にご意見をお書きください。

- ・支援を必要とする学生、支援をしようとする学生、両者が学生であることに、大きな意味があると感じました。このような仕組みが、社会全体に広まることを望みます。これからもがんばってください。
- ・立命館大学の事例が参考になりました。千葉大の取り組みもすばらしいと思いました。
- ・学びたいと思っている学生さんについていねいに対応しようとするのは大切なことであるけれど、費用の面で相当な工夫と努力が必要になりますね。たくさんの方が協力し、知恵を出しあうような気軽な機会がたくさんあるといいなと思います。
- ・著作権と障害者差別解消法の関係、障害学生への実際の支援のありかたなど参考になりました。
- ・ノートテイク会の人あつめはどのように行っているのだろう・・・お聞きしたかったです。多くの学生があつまっていてうらやましい限りです！応援しています！
- ・千葉大の学生（特に支援側）は人のために努力できる人たちなのだなと嬉しかった。
- ・千葉大も聴覚障害に加えて、視覚障害に力を入れてほしい。

（次ページに続く）



2016年3月8日 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPS セミナー  
「法学におけるアクティブ・ラーニングとカリキュラム改革」  
参加者アンケート

当日参加者数： 23 名（アカデミック・リンク・センター・附属図書館関係者を除く）アンケート提出数： 12 件

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、教育関係共同利用拠点として、「教育・学修支援専門職」の養成のために必要な研修プログラムの構築・運営の準備に取り組んでいます。今後の活動のために、本日のシンポジウムに参加されたご意見・ご感想をお寄せください。なお、記載いただいたご意見・ご感想は、個人名・組織名が特定できないかたちで公開する場合があります。

1. 本日のセミナーで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- ・スモールステップ化
- ・授業を受ける側として、一人の先生と接するのはひとつの授業のみで、長くても半期しか接しない。したがって、授業の内容を長期休暇中に復習して疑問がでたとしても、次学期の同分野を教えている先生は別の人ということがほとんどだった。なので、一人の先生が同系統の授業を何コマも持っている、と、以前の内容が質問しやすいだろうなと思った。
- ・AL(アクティブ・ラーニング)の手法がいくつもあること。大人数のAL.どうやって学生を授業に参加（主体的に）させるか。
- ・広報の工夫
- ・法学の授業は、大教室の授業では一方授業が当然であるし、それしかできないと思っていたが、工夫しただけでは双方向の授業ができるということが驚きだった。
- ・アクティブ・ラーニングと一口に言っても、様々なレベルがあること。反対する人たちはどうしてものいること。
- ・法学教育でもできるALの方法を知ることができました。
- ・スモールステップの考え方に感銘を受けました。
- ・ALが、比較的入りやすいものであると感じ、やる気になった。ただ、教育内容の練り直しが重要なので、そこに精力を注入する必要があると感じた。
- ・アクティブ・ラーニングについて、具体的な方法を実践する術を目にして、法学でもこのようなことができることを知った。
- ・自分のやっていることを、組織的な改革としてやっていることに、おどろいた。
- ・先生方の目線から、アクティブ・ラーニングの取り組みを色々お話いただいたので、とてもおもしろかったです。図書館で行う情報リテラシー教育を考える際に、図書館で行うガイダンスなどを一番に思っていたのですが、先生方をサポートするという方向から図書館でできることは何だろう、と考えるようになりました。
- ・領域を縦割りにしないで、初級・中級・上級とスモールステップ化！！
- ・自己効力感を充足させることの重要性がよく分かった。
- ・学生に与える負荷を少なくするところからスタート！！

2. 本日のセミナーで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- ・事前課題を出す教員とそうでない教員がいると、事前課題の多い授業を避けて、そうでない授業ばかり選ぶ学生が出てくるのではないかと。特に1, 2年で楽な授業に慣れてしまった学生ほど。
- ・基礎的な知識の取得はAL(アクティブ・ラーニング)で効率的に可能か。

次頁に続く



- ・多くの講義科目を AL 化した場合、学生の自習時間が大幅に増えて、対応できなくなるのではないかとこの疑問があります。
- ・興味や関心を上げることはできる。授業内容や量については減るのではないと思うが、学生のモチベーションはかなり上がると思う。
- ・自習とのバランス
- ・人になじめない学生へのフォローの要否
- ・職員がやる、先生がやるではなく、双方協力してアクティブ・ラーニングを実施するなら、どうすればよいだろう、と思いました。

3. 大学における教育・学修支援の在り方についてのお考え、ご所属先での取組事例やご存知の特徴ある事例などがあればお書きください。

- ・J Mooc の番組を学際的に作ってみました。
- ・自分自身がやっている AL(アクティブ・ラーニング)と通じる部分がかかなりあったので自信になりました。
- ・クォーター制の導入、100 分授業化を検討しています。
- ・高度教育研究・開発センターで、全学的 FD に取り組んでおり、授業アンケートの授業見直しなどを行っています。
- ・行政法 I における過去問+解説の公開
- ・文献収集等の事前課題
- ・環境法のディベート

4. 本日のセミナーの内容について等、その他、自由にご意見をお書きください。

- ・大変刺激的かつ有益であった。
- ・大変参考になりました。
- ・授業を受けている身として、教育がどんなに工夫されているのかということを知った。
- ・勉強をする上でそれらを意識すると、学習効果が上がるかもしれないと思った。
- ・大変参考になりました。なお、本学法学部は新学科設置に向け、AL をどう導入するか悩んでいます。講師の中川先生に一度ご講演をお願いしたいと思います。
- ・素晴らしかった。やる気のでる内容だった。
- ・中川先生、お話おもしろかったです。何もないところから、ゼロベースで作り上げるのは大変だったと思いますが、よい取り組みだと思いました。
- ・とても刺激を受けたセミナーでした。
- ・大変刺激的な内容でした。
- ・とても新鮮で、興味深いお話を拝聴できてよかったです。ありがとうございました。
- ・FD 委員としての役割と実践者のコンビ、カップルで動くことができたというのが幸福な例であるなど実感した。

5. 次の(1)、(2)について、該当するものに○をつけてください。

(1) a. 千葉大学外の方 6名 b. 千葉大学学内の方 5名 (回答なし 1名)

(2) a. 学生 2名 b. 教員 7名 c. 大学職員(図書館職員を除く) 1名 d. 図書館職員 1名  
e. 出版関係 0名 f. その他 1名

6. セミナーを何で知りましたか？

a. Web(アカデミック・リンク・センター) 3名 b. Web(図書館) 0名 c. Web(千葉大学) 0名

d. 図書館内電子掲示 0名 e. ポスター 2名 f. センターからのメール 5名

g. Facebook・Twitter 0名 h. その他 2名 (アサガオメール) (回答なし1名) ※複数回答あり

7. 千葉大学 アカデミック・リンク・センターでは、セミナーの開催や関連する情報を提供しています。これらの情報を希望される方は、お名前・ご所属・メールアドレスをご記入ください。(既に登録されている方は引き続きお届けしますので、空欄で結構です)

お名前：( ) ご所属：( )

電子メールアドレス：  申込時に利用したもの  それ以外 ( )

ご協力ありがとうございました。

※6名が新規に継続的な情報提供を希望

【教育関係共同利用拠点 平成28年度実施計画書】

1. 拠点の概要

(1) 目的・概要等

大学名	千葉大学	学長名	徳久 剛史
拠点代表者名	竹内 比呂也		
拠点の名称	千葉大学 アカデミック・リンク・センター		
共同利用分野	大学の教職員の組織的な研修等の実施機関		
目的・概要	「大学教育の質的転換」を推進するため、教育・学修を支援する新たな専門職の能力ルーブリックを開発し、全国の大学職員を対象とした実践的SD教育プログラムを実施して職員の高度化を図るとともに、教育・学修支援活動の情報拠点としてネットワークを形成する。		

(2) 当該年度における実施計画(概要)

<p>本拠点は、千葉大学アカデミック・リンク・センターが2011年から行ってきた教育・学修支援に関するプロジェクトの成果をふまえ、教育・学修支援専門職に必要な能力ルーブリックの開発と、それに基づく実践的SD教育プログラムの開発、全国拠点としての情報発信とネットワーク形成を推進するものである。なお、本拠点事業は、アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム(Academic Link Professional Staff development program for educational and learning support: ALPS)と称することとした。</p> <p>平成28年度は、昨年度に引き続き以下の4点を中心に実施することとする。</p> <p>第一に教育・学修支援専門職に必要な能力ルーブリックの開発と段階的研修プログラムの構築である。平成27年度は、センターの教育・学修支援専門職養成部門のもとに、教員・職員からなる企画ワーキンググループを設置し、先行する国内大学の教育関係共同利用拠点への訪問調査及び既存の知見に関する調査を行った。また、内外の文献調査により、教育・学修支援専門職能力ルーブリックの策定の参考とすべき先行事例等を収集・分析し、「大学職員へのインタビュー調査」「大学職員へのアンケート調査」を行い、教育・学修支援専門職開発に必要な「能力・資質の抽出」を行った。平成28年度には、昨年度までの成果に基づき、「実践的SD教育プログラム」及び「能力ルーブリック」を構築し、広く社会に公表する。</p> <p>第二に、「教育・学修支援専門職を養成する実践的SD教育プログラム(履修証明プログラム)」の開発に向けた取組である。平成27年度に4回実施した実績を持つ「ALPSセミナー」の経験と前述の成果を融合し、実践的SD教育プログラムとして、能力ルーブリックと研修プログラムの整合性を念頭に置きつつ、教育・学修支援専門職の職能開発に必要な能力・資質を含んだ体系的プログラムとして設計する。そして、年度内にプログラムの一部を部分的に試行する。</p> <p>第三に、教育・学修支援実務の全国拠点としての情報発信と教育・学修支援専門職によるネットワーク形成の推進である。平成27年度には、原則として各回の「ALPSセミナー」をアカデミック・リンク・センターのウェブサイト動画配信するとともに、シンポジウムの成果を「ALPSブックレット」として冊子体で刊行し、全国国公立大学へ配布した。平成28年度は、これらの活動を進めるとともに、教育・学修支援専門職のためのポータルサイトとしての機能を強化する。</p> <p>第四に、運営・広報・環境整備等である。平成27年度に続き、学外者が過半数を占める運営委員会の体制を、平成28年度も維持するとともに、国内の大学・関連諸機関に対し拠点活動の周知を図る。特に、現在、東北大学を中心に進められている他の教育関係利用拠点等の協力関係組織である「大学教職員の能力開発に関する懇談会」に参加し、全国拠点としての情報を積極的に発信していく。</p>
--

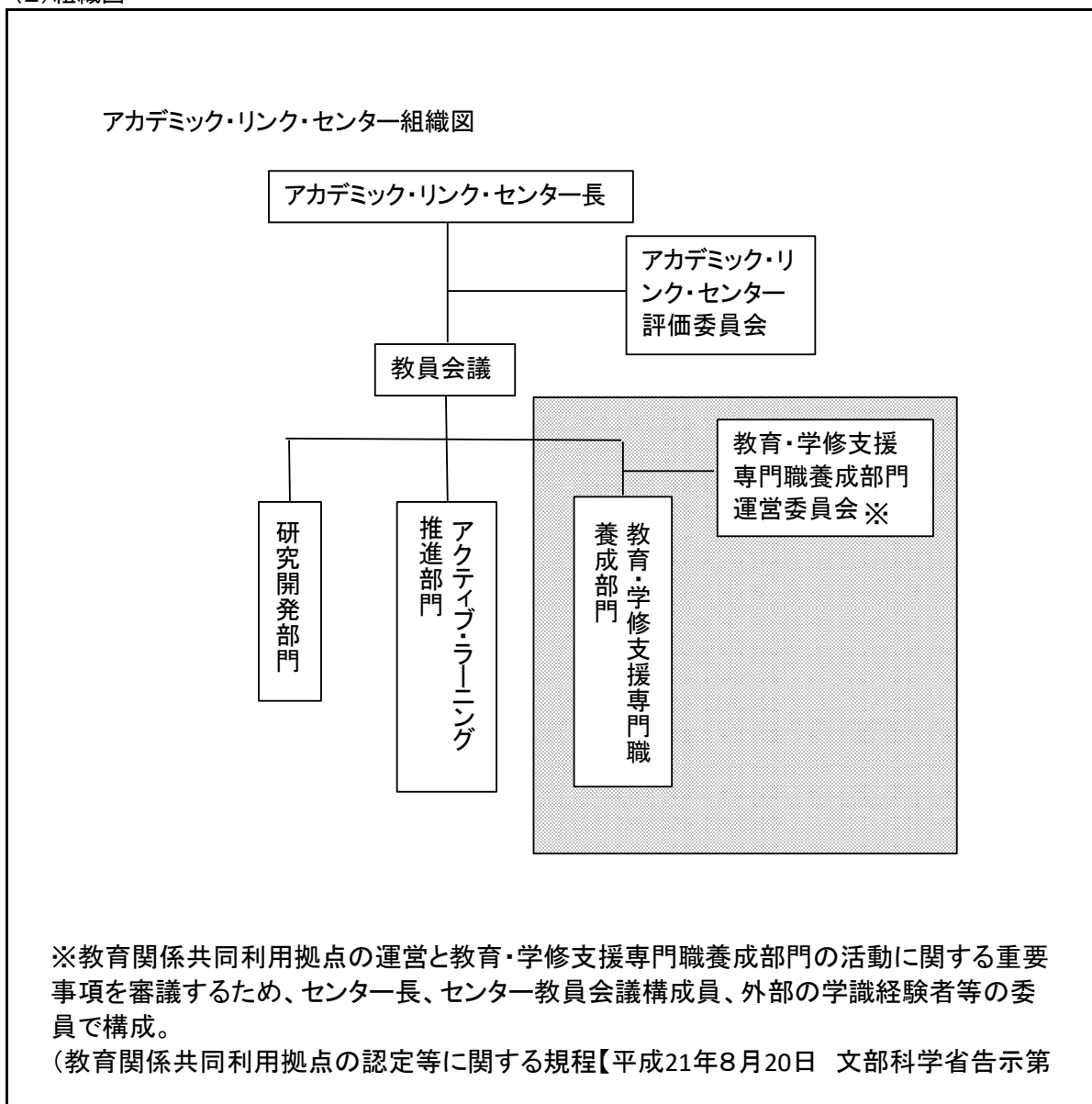
2. 組織等

(1) 当該拠点を記載している学則等

千葉大学学則(別紙1-1)

千葉大学アカデミック・リンク・センター規程(別紙1-2)

(2) 組織図



(3) 人員(平成28年4月1日時点)

教授	准教授	講師	助教	助手	小計	技術職員	事務職員	合計
			5		5		1	6
(3)	(2)		(1)		(6)	(2)	(1)	(9)

(4) その他人員(平成28年4月1日時点)

3-1. 共同利用実施のための運営体制

(1) 審議する委員会等に関する規則等

千葉大学アカデミック・リンク・センター教育・学修支援専門職養成部門運営委員会規程(別紙2)

(2) 審議する委員会等の所属者名等

委員会名【教育・学修支援専門職養成部門 運営委員会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
川本 一彦	千葉大学	統合情報センター准教授 (アカデミック・リンク・センター兼務教員)	情報学、知覚情報処理・知能ロボティクス
工藤 潤	公益財団法人大学基準協会	事務局長	高等教育論
篠田 道夫	桜美林大学 (中央教育審議会大学分科会大学教育部会臨時委員)	大学アドミニストレーション 研究科教授	高等教育論、大学職員論
白川 優治	千葉大学	国際教養学部准教授(アカデミック・リンク・センター兼務教員)	教育社会学、高等教育論
杉谷 祐美子	青山学院大学	教育人間科学部教授	高等教育論、教育社会学
銭谷 眞美	東京国立博物館 (千葉大学経営協議会委員)	館長	教育行政
竹内 比呂也	千葉大学	副学長・アカデミック・リンク・センター長	図書館情報学
土屋 俊	大学改革支援・学位授与機構	研究開発部・評価研究主幹(兼) 教授	哲学、高等教育質保証
御手洗 明佳	千葉大学	アカデミック・リンク・センター 特任助教	教育社会学、高等教育論
山田 礼子	同志社大学	社会学部教授	教育学
山中 弘美	千葉大学	アカデミック・リンク・センター副センター長	著作権

(3) 大学(法人)全体として共同利用を推進するための取組

関係部局からのワーキンググループへの参加。  
業務拡張に伴い兼務教員の増員。  
広報戦略本部との連携による情報発信。

### 3-2. 共同利用の見込み

#### (1) 共同利用の概要

課題名		概要
1	平成28年度ALPSシンポジウム	平成27年度に行った能力ルーブリックの開発とその内容をテーマとした、シンポジウムを行う。
2	平成28年度第1回ALPS セミナー	「学生に対する学習上の助言のあり方」をテーマとしたセミナーを行う。「アカデミック・アドバイジングの専門性と実践」について愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室講師の清水栄子先生に登壇頂く(内諾済)。
3	平成28年度第2回ALPS セミナー	危機管理やリスク等「現代の若者に対する学習上の助言のあり方」をテーマとしたセミナーを行う。
4	平成28年度第3回ALPS セミナー	「大学教育におけるICTの効果的な活用について」をテーマし、学修支援を行う中で重要となる情報リテラシー教育やICTを活用した新しい教育方法に関するセミナーを行う。
5	平成28年度第4回ALPS セミナー	3つのポリシーの見直しや高大接続改革等、近年の高等教育を取り巻く政策・制度の見直しや環境変化を受けて、それに対応する学修支援の在り方についてセミナーを行う。
6	平成28年度第5回ALPS セミナー	海外留学や留学生支援等、大学の国際化に伴う学修支援の在り方についてセミナーを行う。
7	実践的SDプログラムの試行的実施	実践的SDプログラムとして教育・学修支援専門職を養成する履修証明プログラムを実施する準備として、プログラムの一部を、(1)教材開発支援、(2)学生・学修に関する理解、(3)教育方法・教育評価の内容により、反転授業、インターシッ、集中講義等を組み合わせた方法を用いて、試行的にプログラムを開発・実施する。
8		※上記セミナーの順番やテーマ等は、大学職員を対象とするアンケート調査(平成28年3月実施中)の結果をふまえ変更する場合がある。
9		

#### (2) 共同利用の見込み

利用機関	平成28年度			備考
	所属機関数	利用人数	延べ人数	
学内	10	40	60	※平成27年度参加実績が、機関数29、平均37名であることをもとに算出
他大学	50	160	240	
内数 (可能であれば記入してください。)	国立			
	公立			
	私立			
大学以外の機関	10	20	30	
内数 (可能であれば記入してください。)	大学共同利用機関法人			
	民間・独立行政法人等			
	外国の研究機関			
計	70	220	330	

(3)その他、共同利用拠点として、特色ある取組等

平成27年度には、大学における教育・学修支援の専門性に関する国内外の先行研究を検討するとともに、国公立大学の「大学職員へのインタビュー調査」(国公立大学5大学30名)、「アンケート調査」(国公立9大学)を行い、それらの結果を基に、教育・学修支援専門職に必要な資質・能力を抽出した。平成28年度には、研究成果に基づいた実践的SD教育プログラムの開発及び教育・学修支援専門職のための能力ルーブリックを公開するとともに「実践的SD教育プログラム」の内容の一部を試行的に実施する。全国での初の試みとして、全国の国公立大学の大学職員の資質向上、教育・学修支援の拡充に資するものとなる。

3-3. 共同利用に係る支援予定

(1)共同利用する大学への支援の見込み

実践的SD教育プログラムの本格的な実施に向け、参加者に定期的な情報提供ができるよう、ポータル機能を有するウェブサイトを開発し、構築する。

(2)共同利用する大学の利便性の向上等を目的とした取組の見込み

「実践的SD教育プログラム」(試行版)の実施に伴い、任意の日時、場所で自学自修を可能とするe-ラーニング環境を整備する。

(3)その他、共同利用に係る支援のための特色ある取組の見込み

参加者各自が復習できるよう研修コンテンツ(今期実施予定のセミナー発表資料等)をポータル機能を有するウェブサイトを通じて、オンラインで提供する。

3-4. 情報提供・情報発信等

(1)共同利用に関する情報(利用方法・利用状況等)の提供の見込み

時期等	概要
平成28年4月	第1回ALPSセミナーの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成28年5月	第2回ALPSセミナーの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成28年6月	平成28年度ALPSシンポジウムの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成28年10月	第3回ALPSセミナーの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成28年11月	教育・学修支援専門職の職能開発に必要な能力・資質を含んだ履修証明プログラムの一部試行実施についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成28年12月	第4回ALPSセミナーの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始
平成29年1月	第5回ALPSセミナーの開催についてのウェブ広報、メール、各種メーリングリスト等での参加受付開始

(2)拠点に関する情報発信の予定(公開講座、公開講演会等含む)

平成27年度に引き続き、ALPSセミナー、シンポジウムを行うとともに、ウェブサイト等を通じて拠点の活動について広く周知する。また、東北大学を中心に進められている他の教育関係共同利用拠点等の協力関係組織である「大学教職員の能力開発に関する懇談会」に参加し、全国拠点としての情報を積極的に発信していく。なお、ALPSセミナー、ALPSシンポジウムは、履修証明プログラムの一部を構成するものであるが、これらセミナー・シンポジウムのみでの参加も認め、本拠点事業の取り組みは高等教育の発展のために広く貢献できるものとして位置付ける。

(3) 国際的な対応に向けた取組の見込み

教育・学修支援専門職のための能力ルーブリックの開発にあたり、海外大学での学修支援の状況、支援体制、支援人材の育成等の調査を実施し、国際的動向を踏まえたものとする。

4. その他

○当該拠点施設に係る予算関係資料

平成28年度ALPSプログラム実施経費(別紙3)

平成28年度の利用に当たっては試行なので費用徴収は行わない。